

藤原朝臣の富士は四季といふ點に於て、六玉川は玉川といふ點に於て...

【後鳥羽院】建仁元年和歌所内興に當り、召された歌人は、源通信・九條良經・藤原定家・源親長・鴨長明等であり、院の歌道御修業は、その前四年間の御精選によるものと云ふ...

- 元久歌集(三十八卷) (一三三)
日吉三十首御歌(元久二年) (一三八)
新古今和歌集(和歌) (一七九)
御代御歌(和歌) (一九九)
...

十六人撰(二九五)、「自撰歌」(續後集三七七)等。【歌(御文章)】後鳥羽院御口傳(和歌)〇千五百首歌合御列序(和歌)...



後鳥羽院(張貴備) 後鳥羽院

【御文章】院は元暦聖主と尊稱せらるるほど多能歌藝にましまし、歌の外に、東道・管絃道・蹴鞠道にも達せられた。...

- 正治二年院御百首歌 (一三三)
正治二年院御百首歌 (一三三)
正治二年院御百首歌 (一三三)
...

【御文章】院は元暦聖主と尊稱せらるるほど多能歌藝にましまし、歌の外に、東道・管絃道・蹴鞠道にも達せられた。...

【御文章】院は元暦聖主と尊稱せらるるほど多能歌藝にましまし、歌の外に、東道・管絃道・蹴鞠道にも達せられた。...

【御文章】院は元暦聖主と尊稱せらるるほど多能歌藝にましまし、歌の外に、東道・管絃道・蹴鞠道にも達せられた。...

【御文章】院は元暦聖主と尊稱せらるるほど多能歌藝にましまし、歌の外に、東道・管絃道・蹴鞠道にも達せられた。...

【御文章】院は元暦聖主と尊稱せらるるほど多能歌藝にましまし、歌の外に、東道・管絃道・蹴鞠道にも達せられた。...

【御文章】院は元暦聖主と尊稱せらるるほど多能歌藝にましまし、歌の外に、東道・管絃道・蹴鞠道にも達せられた。...

歳の頃であらう(歌謡「ひとり」参照)。天保七年(三十九)家系に譲つて今泉の池澤堂に隠棲した。歌に没頭してゐた結果、家業が衰へて来たのと、専心歌に進まうと思ひ立つたがためである。當時の彼の生活は極めて貧しく、歿する時までそれが続いた。同十一年、豊後の廣瀬淡窓の弟で、主として漢學を學んだ。安政四年(六十)離波に移つた。歌風を京阪の間に広めようと思つたのと、歌集を板にする機縁を見出さうとしたためであつた。彼は離波で筑前藩の勘定奉行生田久繁の保護を受けた。久繁は歌の上での彼の弟子であつて、勘の關係上から離波の富豪たちと交際してゐたのである。言道は、そこに十二年間を費つた。居所は數度變つた。知友には中島廣足・八田知紀・萩原廣道・佐々木弘綱・近藤芳樹・藤谷真好・長澤伴雄などがあり、門人も出来た。久繁が歸藩してからは門人の一人である同じ勘定奉行大岡克俊の保護を受けた。彼は離波の三筆の一人と言はれ、久繁・克俊などの周旋で、揮毫をしてゐたと思はれる。離波に於ける彼の喜びは、遊覽の出来たことと歌集發行の緒についたこととである。折々京都に遊んだり、又、月が瀬の梅や吉野の櫻などを觀賞した。これは弘化元年、五十一歳の時から、嘉永元年、五十五歳に至るまでの甲辰集から、「己酉集」「庚戌集」「辛亥集」「壬子集」と次を遂つての九年間の歌、一萬首の中から自選したものである。「戊午集」と題したのは、その年に選をした意である。嘉永元年(六十三)の時、「今集集」を撰んだ。當時今集に住んでゐたからである。文久元年正月、戊午・今集二集から抄出した「草徑集」を刊行した。「草徑集」二編の刊行は、豫定のみで果さなかつた。また文久三年から慶應四年までの歌を集めた「續草徑集」も刊行に至らなかつた。元治元年(六十七)三月、中風症を發し、慶應三年(七十)郷里の門人に促されて福岡に歸り、再び池澤堂の人となつた。病の重くなつた頃、言道は筆紙をもとめ、草堂言道居士と大書した。それが墓碑に刻まれてゐる。【葉集】言道は、古典には據るまいとして自然に古今集風の歌を作つた。その點に於て、彼は蘆庵・曼樹・各道等の系統にある人である。作ばかりではなく、歌論「ひとりごち」を見ても、彼が古今集派の人であることがわかるのである。しかし歌論「ひとりごち」の中には、独自の論があり、彼は又それを作に移してゐる。彼は「自分は天保の今日只今生きてゐる。だから天保の今日只今の歌を誦まう」といひ、また「或る距離を以て自分を誦める時、はじめて眞實の自分が眺められる。作歌に必要なのは、この距離である」とも言つてゐるが、これは歌の散文化を説いてゐるのである。作例を左に掲げる。

【葉集】ひとりごち、別集〇こぞのちり〇雨横集〇藤屋集〇鳥居集等。(田代) 【参考】大限言道 佐佐木富綱・海野義典共編 『子供芝居』廣瀬淡窓に子供の出演する芝居の總稱であるが、狭義には子供の見物対象とする童謡劇、又は兒童劇(各別)と區別して、主として従来の歌舞伎芝居を子供対象者本位の芝居とする。 【沿革】ひとりごち、別集〇こぞのちり〇雨横集〇藤屋集〇鳥居集等。(田代) 【参考】大限言道 佐佐木富綱・海野義典共編 『子供芝居』廣瀬淡窓に子供の出演する芝居の總稱であるが、狭義には子供の見物対象とする童謡劇、又は兒童劇(各別)と區別して、主として従来の歌舞伎芝居を子供対象者本位の芝居とする。

たのは若衆歌舞伎制の極端からである。その後、子供芝居は子供対象者の修行機關として加賀屋福之助(後の三代目歌右衛門)の如き名門の子弟も進んで出演するに至り、天明八年夏には福江市の側此太夫芝居で座元浅尾爲吉を初め、十歳前後の幼兒ばかりの身振狂言の興行あり、「役者幼少」と稱する評判記まで刊行された。修行過程としての子供芝居の效能に就いては「別集一編顯微論」にも「藤屋集」や子供芝居があつて、子供の時から段々舞臺歌を踏み、その器量に應じて大芝居へも出る。その修行の次第があるから出世も早く上手の役者も多く出るのであるといつてゐるやうに、京阪に於ける子供芝居の傳統はその後も竹田芝居を初めとして大阪座摩訶庵の子供芝居、京都たこ巻館の子供芝居等から幾多の隨從者を生んでゐる。江戸では天保の頃、土佐座で源之助(後の十郎)・團三郎(後の團十郎)の子供芝居が當り、その後嘉永年間中橋の宮芝居佐野松座と向橋丁の壽壽齋の寄席とで、競争で子供芝居を興行して、何れも大入りをおいた。文久・慶應の頃まで、遊樂芝居などで行つたが離波後は廢れた。明治三十年三月東京歌舞伎座で、丑之助・團三郎・三田八・玉三郎等による復話が意外に好奇心を呼んだのが動機で、同年五月淺草座で、澤村小傳次、中村銀藏、澤村宗之助、中村吉右衛門等をして子供芝居一座の旗揚げをして、大人も及ばぬ巧者の藝を見せて一時は頗る流行したが、やがて彼等の成人と共に被観者となり、又九代目團十郎の子供芝居無用論などあつて、程なく廢れた。(田代)

【小兒養育氣質】水井愛友『名稿』小兒養育氣質【作者】水井愛友『名稿』小兒養育氣質

氣質とも書いてある。【刊行】安永二平板。【評述】氣質全集(帝國文庫)所載。【解説】所謂氣質物の一種で、十章の説話を含む物語集である。中京の邊に住む甘藷屋小左衛門は小市郎・小次郎の二人の子を持ち、小次郎の乳母は殊の外芝居好き、毎日のやうに芝居を見に行くが、三つになる小次郎に芝居のわかる筈なく、泣き出すと一文菓子を食べさせておく。そのため小次郎は病氣になる。乳母は芝居見物の癖に氣をもむ。小左衛門はそれを主人思ひのためと誤解して本復讐ひに結構な小袖と金子百疋の心付を與へる(巻一)。小市郎の乳母は小身ながら、もとは武家の娘、小學の教に違はぬ兒の師たるべきものであるが、その堅い所が却つて主人夫婦の氣に入らずお暇となる。代りに履つた乳母は年三十七八、小市郎七歳の誕生日からであるが、常に腹痛みて顔の色あしく、毎日嘔吐する。兩親は醫者に診察させるがその效なく、瘦せ衰へるばかりである。遊安といふ醫者の診察で二三年積つた酒毒と判明し、乳母が平素隠し酒を飲んだことが露顯して放逐される(巻二)。江州八幡の百姓古世左衛門は二人の息子を持つてゐるが、商上手に生れつた物領は京都にやり、近江屋八兵衛と名乗つて綿木綿と燻燻の店を出させ、百姓好きに生れつた弟を仕立ててこれに家督を譲つた(巻三)。離波唐物町にて有徳なる唐物商唐屋左衛門の息子兵之助は、子供の時から一風變つたもの好き、十九の年病變の女郎に馴染を重ねた。併この女郎は病でも癒でもないことがわかつたが、物言ふのもまた格別面白いと妾宅を構へ、その二親をも引取つて開つた(巻四)。京和久屋巻五郎の女

房、實家で物極く教育されて、温和で慎み深かつた。夫が女中に手を附けて懐疑させたのを知つて、よく世話し、生れた男子の乳母として一家を和樂ならしめた(巻五)。龜屋九郎四郎といふ糊糊工人、技は秀でたが不身持のため貧乏し、九歳になる男の子を雇ひ質屋使させたところ、近所に主人の物を盗んで貰入れた者のあつたのを見て子供心に痛く心配したのを知り、父も改心した。これ母親の掛け勝れて、子を養つてよく教育したためであつた(巻六)。京の櫻屋源藏といふ糊工の娘、流手に育てたため、嫁入りして流手な姑の氣には入つたが、地味な亭主は家のためにならぬと心配し、呪によつて姑の伸を悪くしようとし、邪徳で善善な七十七になる近所の姑の許に袂裏をそれとなく細細の薬にすると買ひに行つたことが、ふと先方の姑縁と不和の種となり、遂に陰謀文の上、遺ひ物をして事済みになつた話(巻七)。この姑縁の薬を本當と心得、七十七の老婆の袂裏の黒髪を賣出して繁昌し、家が富み榮ゆるに至つた話(巻八)。我が子のみを愛して近所の子を虐め、その親より言ひがかりされて喧嘩に及び、機代出して事済んだ手前屋勝右衛門のこと、及び近所の多くの子を集めて愛し、五月の節句に、或る貧しい子のために價の高い人形を恵み、且つその親に金を與へた布袋屋徳右衛門のこと(巻九)。この徳右衛門が家の元信筆の布袋の畫の精と現はして、これも子供好きの水井實願といふ隠居を引合せた話(巻五の二)。(田代)

【古鳥蘇】高麗樂、新樂、大曲、高麗受感調曲に屬する。舞があり六人で舞ふ。舞者はして演ぜしめるもの。更に嚴格に言へば、歌舞伎初期の男色趣味に基づく若衆歌舞伎及び野郎歌舞伎、各別種、禁制後の子供対象者本位の歌舞伎狂言である。ちんこ芝居とは、その年節によつて、豆ちんこ中ちんこ等と分ち、大抵十五歳以下の子供対象者の演ずるものである。【種類】(一)漫芝居の一種たる竹田芝居(別項の節)として挿入する舞踏式・劇式の子供芝居。(二)漫芝居の一種たる竹田芝居(別項の節)として挿入する舞踏式・劇式の子供芝居の身振を用ひて、白は床の太夫に語らしめる身振狂言、或は首振り狂言と稱する子供芝居。(三)獨立して子供対象者の一座を組み、成人の役者同様に歌舞伎狂言を演ずる子供芝居の三種とする。

【小鳥の巢】小説二巻【作者】鈴木本三郎『發表』明治四十三年三月十日『月刊』明治四十五年十一月十月『國民新聞』明治四十五年十一月十月『國民新聞』明治四十五年十一月十月『國民新聞』明治四十五年十一月十月

御内書

御内書(内書)を見よ。
小中村清矩(内書)を見よ。
名)もと原田氏、幼名は榮之助、金四郎、金右衛門、通稱は清實。...

御入部加羅女

御入部加羅女(御入部加羅女)を見よ。
「御入部加羅女」(御入部加羅女)を見よ。
「御入部加羅女」(御入部加羅女)を見よ。...

その専門が律令の講究に在つて、會々明治政府草創の際、一般の施設を大賛成に則つて、行つた時に當つたのは實に興味あることで、國文學の講究を以て當時の政治の大本に影響を與へたことは、近世に於ては蓋し珍らしい事例である。...

「悅日抄」等を始め、近世までの當時の巨匠達の歌書も、今の眼で見ると、「いと無下に小兒を導くのみ」の幼きことで、百人一首の講釋を引用して説明する如きことは無益であるとして、歌の巧みなのは天性であるとも言つてゐるが、併し彼は古歌の勉強、作歌の習練といふ方面を決して閉却してゐるのではなく、假名づかひのみだれた事を慨し、歌學の基礎的方面をも重んじてゐる。...

せられる。その遺蹟は近衛公府所蔵の自筆日記を始め、書畫共に比較的多く諸方に傳はつてゐる。...

木花開耶姫(木花開耶姫)を見よ。
このほと(このほと)を見よ。
古俳書文庫(古俳書文庫)を見よ。...

五排哲(五排哲)を見よ。
木幡狐(木幡狐)を見よ。...

近衛流(近衛流)を見よ。
古播磨風筑後丸(古播磨風筑後丸)を見よ。...

この花(この花)を見よ。
「この花」(この花)を見よ。
「この花」(この花)を見よ。...

木幡狐(木幡狐)を見よ。
「木幡狐」(木幡狐)を見よ。
「木幡狐」(木幡狐)を見よ。...

古播磨風筑後丸(古播磨風筑後丸)を見よ。
「古播磨風筑後丸」(古播磨風筑後丸)を見よ。
「古播磨風筑後丸」(古播磨風筑後丸)を見よ。...

近衛流(近衛流)を見よ。
「近衛流」(近衛流)を見よ。
「近衛流」(近衛流)を見よ。...

中村古右衛門の藝術を推して斯界の注目を集めたことある。一般文學、演劇等に普通する彼の趣味は、ロマンチックな傾向性よりも、むしろ古典的な整齊美及び傳統の親しみを形態と精神の上に求めるものやうに見える。

【著作】文集には、『演劇評論』、『批評集』、『傳記研究』、『芭蕉俳句研究』などがあり、翻譯にはストリンドベリーの『父』、『稲妻』、『團圓』、『父と子』、『シニツレルの「アナトール」』などがある。

【小室節】馬子歌(名義)發生地の地名によるらしいが不詳。『櫻痴』(江戸中世の貴族)、『櫻痴百種所収』には、信州の小諸から派生したとある。『沿革』發生年代未詳。萬治年中江戸の日本橋、飯田町、淺草見附の三箇所から吉原の大門迄の駄賃附に、馬子二人こむろぶしうたふ、かざり白馬駄賃と見えてゐる。専ら海道筋で語つたものらしい。歌は近松の淨瑠璃に見えてゐる。曰く、

所謂の演劇、演劇はりして小説を考へて、そなた上りかおや今、文をやらにも演劇しよにも、こゝは演劇の山なれば、能にや事かくてみは持たぬ、もしも水口おとまりならば、其のだから四五軒目の茶屋で、馬も息を其の身も無事で、やがて上りといふてたれ、エイトノヤンヤ。

といふ話、これなどは單なる口合ひとしても面白かつたらうが、話の改訂者が實際は盲人の說話を業とする者であつたので、特に聴衆に大きな興味を興へ、永くこの新しい形態を流布せしめたやうである。盲人で無ければ考へつかない話、もしくは盲人の話なので一層面白く聞かれたといふ話は、注意に見ると數多く残つてゐる。笑話には更にその例が多く、たとへば座頭の長座を憎んで、召仕の者が出口に才徳を吊して置く、八人の盲者が頭をこれに打付けて歸つて行く、御坊何時であらう。はて今八つ頭の頭を打つたではないかといふ類の落し話、又は香い亭主が餅を惜しんで旅の座頭に食はせないので、狂歌を詠む。

せられた長者の傳説があり、丁度當座の持長と同一やうに、長者の威勢を以て一日の中に千人の片目の人足を揃へたとも語つてゐるが、共に最初簡單なる米倉の昔話を持ち運ばれてゐなかつたらば、發生し得られぬ傳説のやうに思はれる。兎に角、座頭は説話の運搬によつて衣食の資を得べき職業であつたから、改訂布行の趣向は概して自嘲笑の方針を取つてゐた。それが彼等を中心とした笑話の多くある原因だと思ふ。

【櫻痴】(初段)『本陣屋門前』天曆の御代、源頼光は名劍を尋ねて小夜中山の蘆原に宿を決めたが、女院の弟たる清原高藤と落ち合ったので、讀つて別宿に避けた。(蘆原座敷)その夜平正盛が高藤を訪ねて、坂田忠時を討つた我が家來物部平太の身邊の保護を頼んだ。これを渡れ聞いた下女小蘇こそ忠時の遺兒蘇我である。豫て言ひ交した下男喜之助を力に、蘇我は敵を討つことができた。(頼光宿)二人は落ち延びて頼光に頼り、蘇我は遺言の名劍を頼光に獻じ、喜之助は家臣となつて唯水貞光と名乗る。折柄寄せた高藤勢は、綱・貞光に倒された。(二段)『岩倉大納言兼多郎』高藤の讒言で頼光が姿を隠したため、婚約中

の兼冬は娘源清は悲歎にくれてゐる。呼び込まれた源清は源七が好むかみと小唄の三味線を弾く。丁度傾城が野屋の八重桐が榮地、蘇我をこれに耳にしたが、坂田時行と契つた頃、腕で作つた明歌であるが、不審を懐き、傾城の右腕と名乗り呼び入れられて見ると、果して源七時行であつたので、娘の手前は源清の辯舌面白く聞かせつゝも敵も討つて男の不身持を恨むのであつた。妹蘇我が敵を討つたのをその時知つた時行は、妹蘇の餘り切腹して女の胎内に秘した男を宿さうと誓つた。切口から逆つた娘が、女の口に入るよと見え女は悶絶した。折から娘を奪はうとする高藤勢が寄せた。すると八重桐は突然起きて寄手を蘇我立てた。妻は鬼女の振舞と見えた。

今日から頼光の家臣に加はり、名も坂田公時と名乗らせた。こゝに綱と貞光も来て、主従五人、惡鬼退治に勇ま立つ。娘は山から山へ逃げ失せた。(五段)『高懸山』名劍の威勢を公時の怪力で、一行は江州高懸山の鬼神を大綱で縛り上げた。(内裏裏)親戚ならず、頼光は鎮守府將軍に任せられ、正盛は謀殺、高懸は流罪となる。

三段目・四段目への脚色の展開は、當に本曲をして不朽の意義あらしめるものと思ふ。【影響】當時既に河内久四郎の『百鬼山姥』に脚色され、歌舞伎狂言の當り作であつたが、二段目が『しやべり山姥』として、四段目が所作事『山姥』として、獨立して今日に及んでゐる。安永四年冬、京京雲座の風小六の山姥は最も名高い。山姥を男に書き替へたのが『山姥』。明治十八年市村座の『山姥』である。その他、他の世界と變交せした歌舞伎作はなかり多い。

【櫻痴】(初段)『本陣屋門前』天曆の御代、源頼光は名劍を尋ねて小夜中山の蘆原に宿を決めたが、女院の弟たる清原高藤と落ち合ったので、讀つて別宿に避けた。(蘆原座敷)その夜平正盛が高藤を訪ねて、坂田忠時を討つた我が家來物部平太の身邊の保護を頼んだ。これを渡れ聞いた下女小蘇こそ忠時の遺兒蘇我である。豫て言ひ交した下男喜之助を力に、蘇我は敵を討つことができた。(頼光宿)二人は落ち延びて頼光に頼り、蘇我は遺言の名劍を頼光に獻じ、喜之助は家臣となつて唯水貞光と名乗る。折柄寄せた高藤勢は、綱・貞光に倒された。(二段)『岩倉大納言兼多郎』高藤の讒言で頼光が姿を隠したため、婚約中

【櫻痴】(初段)『本陣屋門前』天曆の御代、源頼光は名劍を尋ねて小夜中山の蘆原に宿を決めたが、女院の弟たる清原高藤と落ち合ったので、讀つて別宿に避けた。(蘆原座敷)その夜平正盛が高藤を訪ねて、坂田忠時を討つた我が家來物部平太の身邊の保護を頼んだ。これを渡れ聞いた下女小蘇こそ忠時の遺兒蘇我である。豫て言ひ交した下男喜之助を力に、蘇我は敵を討つことができた。(頼光宿)二人は落ち延びて頼光に頼り、蘇我は遺言の名劍を頼光に獻じ、喜之助は家臣となつて唯水貞光と名乗る。折柄寄せた高藤勢は、綱・貞光に倒された。(二段)『岩倉大納言兼多郎』高藤の讒言で頼光が姿を隠したため、婚約中

【櫻痴】(初段)『本陣屋門前』天曆の御代、源頼光は名劍を尋ねて小夜中山の蘆原に宿を決めたが、女院の弟たる清原高藤と落ち合ったので、讀つて別宿に避けた。(蘆原座敷)その夜平正盛が高藤を訪ねて、坂田忠時を討つた我が家來物部平太の身邊の保護を頼んだ。これを渡れ聞いた下女小蘇こそ忠時の遺兒蘇我である。豫て言ひ交した下男喜之助を力に、蘇我は敵を討つことができた。(頼光宿)二人は落ち延びて頼光に頼り、蘇我は遺言の名劍を頼光に獻じ、喜之助は家臣となつて唯水貞光と名乗る。折柄寄せた高藤勢は、綱・貞光に倒された。(二段)『岩倉大納言兼多郎』高藤の讒言で頼光が姿を隠したため、婚約中

【櫻痴】(初段)『本陣屋門前』天曆の御代、源頼光は名劍を尋ねて小夜中山の蘆原に宿を決めたが、女院の弟たる清原高藤と落ち合ったので、讀つて別宿に避けた。(蘆原座敷)その夜平正盛が高藤を訪ねて、坂田忠時を討つた我が家來物部平太の身邊の保護を頼んだ。これを渡れ聞いた下女小蘇こそ忠時の遺兒蘇我である。豫て言ひ交した下男喜之助を力に、蘇我は敵を討つことができた。(頼光宿)二人は落ち延びて頼光に頼り、蘇我は遺言の名劍を頼光に獻じ、喜之助は家臣となつて唯水貞光と名乗る。折柄寄せた高藤勢は、綱・貞光に倒された。(二段)『岩倉大納言兼多郎』高藤の讒言で頼光が姿を隠したため、婚約中

【櫻痴】(初段)『本陣屋門前』天曆の御代、源頼光は名劍を尋ねて小夜中山の蘆原に宿を決めたが、女院の弟たる清原高藤と落ち合ったので、讀つて別宿に避けた。(蘆原座敷)その夜平正盛が高藤を訪ねて、坂田忠時を討つた我が家來物部平太の身邊の保護を頼んだ。これを渡れ聞いた下女小蘇こそ忠時の遺兒蘇我である。豫て言ひ交した下男喜之助を力に、蘇我は敵を討つことができた。(頼光宿)二人は落ち延びて頼光に頼り、蘇我は遺言の名劍を頼光に獻じ、喜之助は家臣となつて唯水貞光と名乗る。折柄寄せた高藤勢は、綱・貞光に倒された。(二段)『岩倉大納言兼多郎』高藤の讒言で頼光が姿を隠したため、婚約中

【櫻痴】(初段)『本陣屋門前』天曆の御代、源頼光は名劍を尋ねて小夜中山の蘆原に宿を決めたが、女院の弟たる清原高藤と落ち合ったので、讀つて別宿に避けた。(蘆原座敷)その夜平正盛が高藤を訪ねて、坂田忠時を討つた我が家來物部平太の身邊の保護を頼んだ。これを渡れ聞いた下女小蘇こそ忠時の遺兒蘇我である。豫て言ひ交した下男喜之助を力に、蘇我は敵を討つことができた。(頼光宿)二人は落ち延びて頼光に頼り、蘇我は遺言の名劍を頼光に獻じ、喜之助は家臣となつて唯水貞光と名乗る。折柄寄せた高藤勢は、綱・貞光に倒された。(二段)『岩倉大納言兼多郎』高藤の讒言で頼光が姿を隠したため、婚約中

【櫻痴】(初段)『本陣屋門前』天曆の御代、源頼光は名劍を尋ねて小夜中山の蘆原に宿を決めたが、女院の弟たる清原高藤と落ち合ったので、讀つて別宿に避けた。(蘆原座敷)その夜平正盛が高藤を訪ねて、坂田忠時を討つた我が家來物部平太の身邊の保護を頼んだ。これを渡れ聞いた下女小蘇こそ忠時の遺兒蘇我である。豫て言ひ交した下男喜之助を力に、蘇我は敵を討つことができた。(頼光宿)二人は落ち延びて頼光に頼り、蘇我は遺言の名劍を頼光に獻じ、喜之助は家臣となつて唯水貞光と名乗る。折柄寄せた高藤勢は、綱・貞光に倒された。(二段)『岩倉大納言兼多郎』高藤の讒言で頼光が姿を隠したため、婚約中

【櫻痴】(初段)『本陣屋門前』天曆の御代、源頼光は名劍を尋ねて小夜中山の蘆原に宿を決めたが、女院の弟たる清原高藤と落ち合ったので、讀つて別宿に避けた。(蘆原座敷)その夜平正盛が高藤を訪ねて、坂田忠時を討つた我が家來物部平太の身邊の保護を頼んだ。これを渡れ聞いた下女小蘇こそ忠時の遺兒蘇我である。豫て言ひ交した下男喜之助を力に、蘇我は敵を討つことができた。(頼光宿)二人は落ち延びて頼光に頼り、蘇我は遺言の名劍を頼光に獻じ、喜之助は家臣となつて唯水貞光と名乗る。折柄寄せた高藤勢は、綱・貞光に倒された。(二段)『岩倉大納言兼多郎』高藤の讒言で頼光が姿を隠したため、婚約中

馬場集(古)古文書中村直廣(古)古文書概説
藤月萬(古)古文書概説伊本二(日本古文書)
書目上

古柳 藤原 名義 古柳は本来小柳と書くべきで、小柳を誤み込んだ元歌に基いた名義である。【出典】『樂府抄』(別題)卷一に出づ。【解説】古柳に、藤原の御歌、ただの古柳の二種がある(『樂府抄』口傳)。歌ひぶりの變遷によつて、この差が生じたものと思はれる。元來朗詠の曲調に似た節で、恐らくは朗詠より出た一體の歌なのであらう。朗詠の源家(藤原家)には、小柳ふし八首を傳へたと云ふ(『文選』)。その中には、朗詠の文句を取つて歌つたものもあると見える。『古柳』と云ふのは、この朗詠家に傳へた節なのであらう。今残れる歌は、新しい方の古柳で、朗詠風の歌である。『古柳』と同歌であるかどうかは分らぬ。

そよや、小柳よよな、下り藤の花やな、咲きよへけれ、よりな、むつれ歌や、打鼓まよな、昔柳のや、や、いとぞ目出度や、なにな、そよな
この歌が一首だけ見えるが、これが古柳の元歌であらう。『樂府抄』(別題)に「古柳下り藤を歌ふ」とあるのもこの歌であらう。同書に「澤に鶴高くと云ふ古柳」と見えるが、この句のある古柳は今日残つてゐない。なほ古柳とは、風俗歌の我門の事であらうと云ふ説もある(『樂府抄』)。我門の中には「しだる小柳」と云ふ句もあるが、今日では、その説は最早や信じられない。古柳は鎌倉室町時代に「古柳の聲引」とあつて、古小柳は、聲を長く引く歌ひ方であつたらしい。『岩屋の草紙』にも、「(白石の)御歌ども参り、今様小柳歌ひ

すましたりけるに」と見える。
古山 藤原 山姥 山姥を見よ。
古友尼 佛人 佛人 橋本氏 別號
松永庵(生後)未詳、明和天明時代をその盛時と見るべきであらう。【佛系】馬場存義門と號して存義門であるが、所謂講道で、點者ではなかつた。空也念佛に親しんで佛阿と稱した。明和六年の初冬、京に上つて五條西洞院の西に別荘を設けて五疊庵と稱し、齋村一門と交遊を重ね、翌七年、吉野、橋立、大坂にも遊び、同年冬、江戸に歸つて五疊庵の一書を編してこの旅行の記念とした。古友は他へ移したのであるが、不幸その夫に死別して橋本家へ戻つた。安永八年の二月、姉弟相携へて吉野の花を見て京へ出たが、古友はこの時亡夫の七回忌に當るので、卯月の初め髪を下した。齋村一門は十餘年ぶりの奉里を接待した。その秋、本曾路を経て江戸に戻り、文臺の控書をした。古友尼には娘もあり、孫共もあつた事はその句の前書によつて窺はれるが、その没時享年とも不明である。奉里は文政二年正月二十五日七十九歳で歿してゐるから、姉弟相携へて京に上つた時は、奉里が三十九歳であらう。その没時は寛政年代と考へてよいであらう。奉里が深川宮が岡のほとりに住んでゐた事は、田女の「海山」によつて推知され、その菩提所は、淺草本願寺中裏院であつた。(奉里が第二世有無庵存義を稱したのは晩年であらう。【佛系】そののり(佛系) 安永八年刊「牛紙本」上巻の題、下巻の題のなほ「古友尼」あり。安永八年の(佛系) 松かね(佛系) 天明四年刊「牛紙本」一巻、前年古友尼が卯月

ある。四巻以外に、古語集供儀一巻を加へ、上は「古事記」所載、續火詞や古風土記の歌より現代の體裁に至るまで、全體で六百頁に達する。唯本書は、初めは各部類分の中を年代順に排列する積りであつたらしいが、後には體裁として、甚だ檢査にも適當にも不便であるから、もつと整理して完全な書とする必要がある。(【佛系】)

古葉略類聚 抄 藤原 歌集
五巻 著者 未詳 流布の寫本の原本は、卷八に建長二年九月十二日、卷九に同年九月二十九日、卷十に同年十一月二日、卷名不詳、同月六日三日書寫の奥書のある書である。縦九寸三分横七寸三分、仙花紙袋綴の冊子で、もと奈良春日宮の神主千鳥家に傳はり、後四巻は奈良市外佐保村の興福院の所に移り、今竹田園の所蔵となつた。水戸野考前には建長八年に原本から寫したものと、田中勘兵衛氏も同じ頃の古寫本を藏してゐる。安永年間江田世蕃、井上高鶴、植村萬言の三人が原本から寫して、安永六年十月の江田世蕃の序を附したものが世に行はれ、その體裁本とした四冊本や、その他學本の一冊本もある。而して現在傳はる建長二年本の脱落や錯簡の箇所が、水戸本や田中本で補訂される所もある。建長二年本は大正十二年帝國學士院の補助を受けて玻璃版に印行され、又同年興福院所蔵の四冊本も指定せられた。【解説】萬葉集の分類書であるが、卷八・九・十・十二と卷名不詳との五巻が傳存するのみである。卷八は里より編に至る家庭生活用具に関する事物によつて分類し、卷九は山より木橋に至る

尾脊六人の女侍傳人の句を立句として、存義奉里等と號した歌仙六巻と、古友尼の御歌仙一巻とで、存義の序文があり、後半は存義後、奉里が古友尼の御歌を整理編次して四巻の御歌といふ見出しを附し、序文を附したものである。(【佛系】)

今宵の少將物語 藤原 御伽
草子一巻 著者 未詳 「近古小説解題」に「御伽草子」と推定してある。【別名】「雨やどり」。「しづのの縁(別名)雨やどり」(別題)とは別本(『成立』室町季世)『御伽草子』(別題)の「新編御伽草子」上巻所載。「寛永四年八月十一日寫」とあるある寫本傳存。【題村】の要素も加はつてゐる。区下が遂に帝位を踐む構想の如きは、既に「狭衣物語」にも見える「源氏物語」の影響であるが、本書では取替子の形で取扱はれてゐる。雨やどりの機縁に始まるのが別本「雨やどり」一名「しづのの縁」と共通してゐる。

【提要】中頃、按察大納言の北の方は美しい姫を残して世を去つたが、やがて迎へられた後の北の方にも姫が二人生れた。先の姫若は乳母に任せてあつたが、或る日、乳母の勤めで鞍馬に行き、行末の事など初瀬と、初瀬へ参るとの御告があつたので、初瀬に詣でて下向する途次、五條邊で驛頭に遭ひ、側の家の門邊に雨を避けてゐると、腰を上げた車が美しい殿上人を乗せて引入れた。それは大將の一人子の中納言で、こゝはその乳母の許であつた。中納言は才藝比無く、君寵と世望を一身に負ひ、姫を持つ程の人々に智にみせながら、今立ち濡れるべき人も見出さずにはゐられさせ、契を結んだ。翌日後朝の歌の贈

答あり、中納言は決して歸さぬやうに己が乳母に言ひ置いたが、乳母は行末もしくもないものを詮のない事と考へ、知る人の許に車を請うて立ち歸る姫主従を強ひて引留めもしなかつた。女を失つた中納言は神佛に祈るより外はなく、父母から勧められた宰相の君の女にも返事すらしなかつた。姫の乳母は何事も觀音の御計ひと信じながら、姫君のただならぬ御有様を痛め、女御の乳母を勤めてゐる己が姉の許に姫君を伴ふと、その晩のまどろみに、姫君の御懐から月の光のさし出るのを初瀬の別當らしい人が、袖に受けて内へ参ると夢み、夢解きに解かせること、國主が御生れになるのだと云ふ。やがて誕生あつたは若君であつた。同じ頃、内裏に女御の御産あり、まだ春宮もましまさぬので、諸事萬端賑めしく、人々の期待の中に御出生あつたは鬼子であつた。術なくて、女御の乳母はその御母と計つてか、姫君の御子と取替へてそれと披露した。假使には師の大納言夫妻が定まり、一の皇子なので體での儀式まばゆ

く、女御は中宮に、人々も加附した。家に歸つた姫を姫母は夫に讒言して乳母共々失はうとしたが、中宮方より大納言へ、春宮の御介錯にその姫を姫母せりやう御使が立つた。姫母は嫉んだが、姫は華やう御使が御使の時めいた。中納言はなほ雨宿りの姫君を思ひ忘れず、月日を過してゐたところ、或る時、この御局を何心なく覗いて、美しい御殿を見出し、昔の人とも知らず心を亂し、思案の末、その女房長部に文を託したが、長部の肩に書かれてあつた御殿の歌かその人であることを知り、乳母の計ひで再會の後、中宮の御許で退下し、中納言との間に若君

地理及び草木の名によつて分類し、卷十は水より久具郡に至る水に関する名稱によつて分類し、卷十二は老より事未詳歌に至る人倫に関する事項によつて分類し、卷名未詳は神、水垣より無背信に至る神仙・慶賀及び人倫に関する名稱で分類されてゐる。その項目の分類は甚だ詳細である。全部で幾巻あつたか不明だが、多分十二巻で終つたものであらう。その題目は略して「類聚古集」(別題)の短歌の部(第一巻から第十五巻まで)と一致するので、それによつたものらしい。但し「類聚古集」の如く大目には無く、細目のみである。又短歌、旋頭歌は皆採つたが、長歌は除き去つたものが多い。且つ「類聚古集」の如く歌體による分類をなさず、各項目の中に長歌、旋頭歌をも入れてゐる。歌詞は「萬葉集」の本文のままに記して、右傍に片假字で振假字式に調を書いてあるが、或は調のみを記し、或は片假字に「萬葉」の漢字を交へて書き、本文のままに類も多い。題詞や左註は「萬葉集」通りに書き、或は意を取つて書いた。

【備考】「類聚古集」に次いで、分類書として古集のもののみならず、それよりも分類の方法が進歩せず體裁も統一して居り、作歌の参考書としてすぐれてゐる。又「萬葉集」の校勘上貴重なるもので、「類聚古集」その他平安朝時代の古寫本と一致して、今日の流布本を訂正すべき箇所が少くない。また他本の缺を補ふ所もある。

後葉和歌集 藤原 私家集
二十卷 一册又は二册 著者 長門前司爲経(山歌色集、八雲御神私記) 本集第二に「法師にならん」と思ひける頃月をみ侍りて、藤原爲経、在明の月より外に誰をかは山路の友にちぎりおくべきことあるのは撰者の歌か。序文に「老いの身の霜をいたげけるが霜を忘れて云々」とあるから、本集は晩年の撰者か。【名義】残れる言の葉を集めたものと、意匠文「成立」(詞花集)撰者對しては多くの非難があつたが、別に集を撰じて具體的に且つ對抗的に非難したものは出た。本集の如きはその一である。序文によれば「詞花集」は新時代の歌として批評の餘地のあるものがあつたので、改撰の詔が下つてゐたやうであつたが、撰者編輯が既に致したので改撰の詔も空しくなつた。そこで爲経は先づ「詞花集」中から然るべき歌を書き抜き、撰に入るべくして洩れた歌で、空しく朽ち果てて了ふやうなものや、後の撰者の材料ともならうものを書き加へて纏めたものである。私的な興味に依つて撰したので、弘く流布するならば世上の嘲を受けるであらう。比較的穩かに記してはいるが、「八雲御抄私記」には、「詞花集を破る」とあり、清輔は更に「教宣記」なるものを撰して「後葉集」を繼じた程であつたから、勸撰集を認めないといふ意味で、相當に手酷しい攻撃となつたのであらう。然し「詞花集」から多くの歌を採つてゐるのを見れば、全然「詞花集」を認めないといふ程でもなかつたと思はれる。なほ、序に「藤がねのつらね集めたりし人も夕べの空の雲にまじり」とあつて、「詞花集」の撰者編輯の致した事を記してゐるから、その没する久壽二年五月七日(公卿補任)以後の事と考へられる。別に作者名の記し方から考へて、後白河天皇を今上と申し記してゐるから保元三年八月十一日以前となり、實行を單に太政大臣としてゐ

新君次々に出生、春宮は十三で御元服、やがて御位に即かれたが、實妹とも知らずに、中納言の大納言を床し思し、度々御せもあり、御文も遣はされるのを、御殿は固じ果て、と、或る夜、女院、乳母共々の背腹を立ち聞かれた帝は驚いて断念し、左大臣の御女を女御に召された。今は大納言になつてゐる中納言は御殿の口から事情を聞き、辱くも嬉しくも愛怖ろしく覺えたが、やがて攝政となり、大納言は女院の御甥、宮の中納言に嫁ぎ、女御に春宮御誕生、同じく十三で御誕生、宮の中納言の姫君内、人々めでたく笑えた。皆、神佛の御利益である。(【佛系】)

古語集 藤原 歌集
【備考】もと「皇典研究所演義集」第四十六號(明治二十八年三月發行)以下第百八十號に互つて連載せられたものであるが、佚稿だけは、同誌所載以後に、遺漏を補ふ意味で集められたもの、本巻後篇共に國學院大學編纂「國文論叢」(明治三十六年刊)に収められてゐる。【解説】目錄によると四巻より成り、卷一は神代歌、卷二は田原歌、卷三は雜歌、卷四は今様及び雜曲であるが、併し本文は必ずしも目錄の如く整然としてゐない。初めに叙があるが、歌話の沿革にも觸れてゐる。歌詞は古典體書より採録し、又諸方より贈られた報告を併せ載せて、所々自己の考説註解を加へたものである。故に歌話集であると共に註釋書としても有用である。「中古雜唱集」(後篇)の(多別項)に入れる歌も全部を収めて、従来のこの種の書を集大成した感がある。中には前田夏隆の諸曲「要石」の註解の如きも取入れてある。琉球及び蝦夷の歌話を収めて詳細なる解説を附した如きは、従来の書に見ざる特徴で

こようし こようわ

るから、保元二年八月九日以前となり、更に實能を内大臣、伊通を大納言、公能を右衛門督としてゐるから保元元年(久壽三年)九月の政變に伴ふ官職移動以前と見ることができ、兩者を合せると久壽二年五月より三年九月以前の一年餘の間となる。假に右の推定に誤謬があるとしても同三年九月より、さほど後ではあるまい。さうすれば「阿花集」葵寛の仁平元年より約三年の後で、關原以後間もなくの事となる。「諸本」群書類従一四七所載本は末の二巻を除いてゐるが、圖書寮本に依つて校合増補した新校群書類従本は末の二巻を有するのみならず、巻十八までで於ても缺けてゐた歌を補つてゐる。

は偶然であるのか、或は爲経と俊成との間に特殊な關係があつたのかは明瞭でない。なほ本集から阿花・千載の兩集の歌を取り去れば、拙劣な歌が残るので、勅撰集を主にすると、本集の存在は影が薄くなる。併し千載集に材料を與へてゐること、阿花・千載の兩集を結びつける中間の集であることは、なほ一つの興味である。(阿花集歌集卷三)

と謀つて兼政自筆の色紙を乞ひ請け、胸中何事かを叙しつゝ遊女を出る。(二段)駿州安倍川の邸、初めに遊女の生活を唄つた節事がある。攝屋高屋で虎若と宇右衛門とは、富士山に於て天文觀測中の兼政・廣信なりと評し、以前の色紙を尋主に與へて信用させた上、狼藉を働かす遊女の耳をそそり取つて逃げる。(三)段(富士山)初めに富士山の四季を歌つた節事がある。兼政・廣信兩人は、無事觀測を遂げて下山する。(兼中)朝觀望は宮内と名告つて宮仕へに上つてゐるが、今日しも年の暮で衣配りの衣の下見をしてゐる。これも節事である。例年三條家に賜はる衣が今年他家に定められてゐる事から、やがて兼政が配流された事を知り、涙は泣き止む。(佐保川時)勅使は、上京の途にある兼政等に出席し、勅使を傳へる。兼政の節事間斷平内・平七兄弟は遊樂するが、主に朝望される。兼政・廣信は、そのまゝ配所へ向ふ。(四段)難波梅の濱)兼政と兼政の契りのあつた右九左丸の二少年が、供を頼つて消て来るが許されぬ。船の漕ぎ去つた後、兩人は岩上に坐したまひ食を結つて主に殉ずる。(朝觀望道行)兼政は宮仕へを辭し、乳母玉水と共に兼政の跡を追ふ。(五段)兼政院)大和邊に温泉が湧き出たので、兼政院を設けて諸國の病病人を治療してゐる。その中に兼政に耳をそがれた安倍川の遊女も交つてゐた。(兼中)伊勢の運

宮を取行はせられるにつき、古例に解し得ぬ點があるので、兼政・廣信は召還される。兼政は鮮かにその疑義を解く。(檢所)三條兼政・木津良廣信と大伴朝臣忠朝・虎若・宇右衛門等の對決。論争の後以前の安倍川の遊女が呼出されて事明白となり、忠朝等は罰せられ、兼政には朝觀望を賜はる。



【解説】本曲は、淨瑠璃作者としての井原西鶴を見る上での唯一の作品である點と、その作が近松の「異女の手習」(源)と同時に見られる點、加賀屋・義太夫をしてそれと、同時に眞價を世に問はしたといふセンセイシヨナルな記録を我が豫劇史の上に遺した點とで、特に注意される作である。「新撰」との比較の

上で指摘されるこの作の特性は、(一)全曲としての構成は、「層」の方が遙かに緊密であるが、各段、各巻の全曲との結びつきは可なり稀薄である。例へば右九左丸二若衆の代官兼平内・平七兄弟の件等唐突でもあり、それ自身顯つてゐない。彼の浮世草子に於ても屢々見出し得る特性であるが、少くもこれは淨瑠璃の場合には失敗である。(二)構想上の複雑性が無い。繁雜な複合的な計りや誤差、組織は、一般に近世戲曲構想上の基本的手法であり、近松は既にその方向を取りつゝあつたに反し、「層」に於てはそれ等が總て一元的で單純である。(三)舞臺技巧が少い。例へば「新撰」では流行のカタクリを用ひて、觀覺的效果を高めてゐるが、「層」にはそれが無い。(四)人情的要素が少く、且つそれを散文的・概念的に取扱つてゐる。例へば「新撰」に於ける實方・瑠璃姫の戀と、「層」に於ける兼政・朝望の戀とを比較しても明かである。以上の諸點は、結局淨瑠璃とはその鑑賞者層を異にし、傳統を異にする浮世草子の作者としての西鶴の把持するレアリズムの現れであつて、ロマンチズムを要求する讀者層に迎合する態度の低かつた點が、「層」の敗北の主要な原因であつたらう。

記述によつて信ぜられ、最近藤井乙男氏もその筆致から四鶴作と推定されてゐる。前述の諸特性とその發見法や筆跡からその推定に誤りは無いやうである。(兼政の「異女の手習」(源))

- 西鶴の淨瑠璃「層」の發見目次(江戸文學研究會)
○淨瑠璃名作集上巻解説(兼政)
○大正松全集第一巻解説(兼政)
○兼政萬句合(兼政)
○兼政萬句合(兼政)

ばかりでなく、「切りたくもあり切りたくもなし」などの如く、單なる十四文字の短句型のことも有る。而してその課題の上に天梅・仁等の文字を附してゐるのは、合印といふもので、合印は天・満・宮・梅・松・仁・義・禮・智・信・鶴・龜・叶の十四文字から成り、一ヶ年に催さるゝ十四度の定會に配せられるものである。一年中の定會といふは八月より十二月まで毎月五日の日で、但し十二月に限り最後の二十五日を休會とする例であるから都合十四回になる。そこで、八月五日の分が天、十二月十五日の分が叶といふ合印になる。表示すれば次の如くである。

八月五日、天、十五日、滿、廿五日、宣
九月五日、松、十五日、禮、廿五日、松
十月五日、仁、十五日、禮、廿五日、松
十一月五日、智、十五日、信、廿五日、龜
十二月五日、龜、十五日、叶

述べたものであるが、萬句合の點者は勿論川柳一人ではなく、同時代には露九だの、机鳥だの、歌月だの、白鶴だのと實に多士濟々であつて、その點式等にも多少の相違があり、合印の如きも亦、同一でなかつたことは勿論である。

古來風體抄

【著者】藤原俊成(成立山來) 式子内親王から「歌の姿をもよほしと云ひ詞をいみじと云ふ事は如何なる事ぞ。すべて歌を詠むべき趣を書きて出すべし」との仰せを蒙つて、建久八年生年八十四歳の時執筆し、五年後の建仁元年に奉つたものである。【諸本】元禄三年の刊本五冊がある。續群書類從卷四八八に載めたものは、榮進自筆本の傳本に據り、下巻が附けてゐるが、經濟雜誌社版は、圖書寮本及び刊本によつて補つて完本としてゐる。

つた言葉を経て、歌の姿、詞は時代の異なるに隨つて變つて行くので、當時の人が殊更に難しい事を詠んだ譯でないとし、心もかしく詞つかひも好く見えてる歌が多く、諷刺になる歌も多い事を言つて、百九十五首の多數を採つてゐる。人麿に就いては「上古中古、今の末の代までをかかみけるにや、昔の世にも今の世にもかなひて見ゆめり」と譽め、「古今集」に就いては「此集の頃ほひより歌のよきあしきも殊に選ひ定められたれば、歌の本體には唯古今集を仰ぎ信ずべき事なり」と言ひ、「拾遺集」よりも抄を掲げ、「後拾遺」については拾遺以後、公任以下のすぐれた歌人輩出し、面白く聞き近き物に心得たる様の歌が多かつたので、擇者の好みから偏へてをかしき風體を採つたので、従来の諸集に比しては、かたがた劣つてゐると評し、「金葉集」については擇者に少し時はなを折る心の進んだ爲か、如何かと思はれる歌があると言ひ、「詞花集」は餘りにをかしき條のふりで、それ程の多し事を誦じ、又己の撰んだ「千載集」では歌の主として第二に撰んだ事を言つてゐる。その他、能因の「支々集」、良道の「打開集」の私撰集にも觸れてゐる。素より簡略ではあるが、和歌の史的記述の初をなすものである。【批評】この書は、論敵諸集、關原一派の六條家別業に對する、考證を事とし、歌學の實際に即し、鑑賞批評的の對して、行かうとする歌人的な立場を示すものである。長歌・短歌の説につき、萬葉集の事を云ひながら、(二)に廿一(一)の反歌、短歌を長歌と云ふら、(三)に萬葉集をくはし見ざるに似たり」と言ひ、又歌中、同事情のみを認めて他は拘泥すべからずとし、或は和歌體説の無意義な事を言へる如き、主として清輔の「萬葉抄」(別項)に對する駁論と考へられ、河社、かびやに關する可なり長い考證は、關原の「六百番陳狀」(別項)に對する反駁と見られる。この書の外に「和歌肝要」と題するものがあつて、彼の著として傳へられてゐるが、その假託の書であることは諸家の指摘せる所である。その外に「正治二年和字奏狀」(別項)の如きものがあるが、歌論書としてはこの「古來風體抄」が現在の唯一の漢語に於ける和歌の書であり、彼が判者となつた諸歌合に於ける判詞と共に、二條家(別項)歌學の祖として兩玄體を唱道した俊成の歌論研究上貴重な資料である。(中島)

【孤立語】言語學【名稱】(英) Isolated Language (獨) eine isolierte Sprache (獨) une langue isolante 【附説】言語の形態的分類の一。單語が連つて文を成す時、各單語が、語尾變化又はその他文法上の關係を示す變化を全く有せずして連結せられる形態を孤立(Isolation)といふ。幼児の「ワンワン」や「アアアア」(父は彼方にゐる)「ワンワン」等は孤立の一例である。或る國語に於てその單語が主として孤立の形で文を成す習慣のある時、その國語を孤立語といふ。古代支那語は種々孤立語の例として挙げられる。【參考】G. V. d. Gabelentz: Die Sprachwissenschaft. Leipzig 1911. H. Sweet: History of Language. London, 1911. E. Sapir: Language. New York 1921. (附録)五輪碑玉體圖(註)「歌」を「歌」を見よ。是藤原「玉體圖」を見よ。

惟足たけあし 神祇家【姓】吉川【通稱】五郎左衛門【號】觀音堂・山田隱士【生没】元和元年(二)と云ふ正月二十八日生れ、元祿七年(三)五月十一日歿す。享年八十。【附歴】惟足の先は、宇多源氏佐々木源三秀義より出づ。父廣元、江戸に出て、徳川氏に仕へようとして果さないで歿した。惟足僅かに九歳、尚幼に養はれ、長じて商賣となつたが、慶安四年、年三十七、鎌倉に退隱し、専ら古典を研究した。偶々京都に吉田流の神道を傳へた萩原兼光の講を聞き、爾來、公卿、諸侯のために道を講じ、略と席の温まる時がなかつた。惟足に道を傳へた者に、正親町實豐、姉小路、富小路の諸卿、紀伊侯頼宣、會津侯正之、稻葉美濃守、淺野内膳等がある。【著書】神代卷家傳聞書○神代卷惟足抄○神道大意講談○日本學問○吉川觀音堂事記等。【批評】惟足の學説は、頗る多數に渉つてゐるが、その要を摘まむと、三種の神靈については「事を云へば三種の寶寶、理を云へば天子の御心也。三種の寶寶は收まりて胸中であり、胸中三種の寶寶に現はる(神代卷惟足抄)これを更に説明して、玉は温調の徳を以て恵み玉ふ。寶寶は只温ばかりにては惡逆の者想之を爾す也。徳は其邪正を明白に照して、玉を用所に玉、徳を用所に徳を用と也(神代卷惟足抄)と言つてゐる。その説、簡に據つたところが多いが、また時代の要求に應じて、その説を立てたものと見るべきであらう。(田中(一))

是則これのり 歌人(三十六歌仙の一)【姓】坂上【家系】田村實四代孫の子(坂上五郎)・筑城の父【附歴】延喜八年、大和權少將に任じ、同權少少佐・中藏物・少内記大

内記を繼ぎ、延長二年從五位下に叙し加賀介に任じた。古今集日録。延喜五年三月二十日仁壽殿に行はれた慶賀に、殿上人の外、藤原實之、在原相如・榎井清郷等と共に召され、二百六度まで進足に隨つて贈さなかつたので、内藏寮の御名録はつた(舊記二十)。延喜七年醍醐天皇の大井川行幸に供奉し、十三年孝子院歌合の作者となつた(家集)。「古今集」卷五、六に、大和國に行き鹿田川に遊び、奈良の都を訪れたとあるのは、大和權少將に任じた延喜八年の頃か(在日中作風)。「家集」坂上是則集がある。その他凡そ二十六首、合計凡そ三十九首(坂上是則集) 群書類從卷三四八所載本、歌仙歌集本は同系統のものと思はれるが、歌の數に於て類從本は四十四首にて一首少く、歌仙歌集本には補遺六首あり、部類に於て歌仙歌集は部類の名目を掲げ、その下にその部類に屬する歌の題をすべて記し、更にその歌毎に題を掲げてゐること「堤中納言集」の如くである。詠歌感傷の中に客觀描寫の美しさを出してゐるのが、その特色である。

【著者】古今集日録○歌仙傳○百人一首一夕話(西下) 【是善】漢學者【姓】菅原【生没】嵯峨の弘仁三年に生れ、陽成帝の元慶四年(一)五(一)八月三十日歿す。享年六十九。【家系】野見宿禰の後裔で、その子孫は土師連となり、更に土師宿禰と改め、光仁帝の天應元年六月、居る處の地名により、土師を改めて菅原となし、桓武帝の延暦九年十二月に菅原朝臣の姓を賜はつた。宇庭土人清公と傳はつて、善主・是善はその二子で、遺跡は是善の子(清公傳)。【附歴】承和二年(二)十四歲、文章得業生

に補せられて從六位となり、同十二年文章博士の稱號を受く。仁壽三年(八)十二萬大學頭名等。貞觀十一年(五十八)大江真人南淵年名等と「貞觀式」を撰述す。元祿三年(六十八)從三位となり、同年起兵者等と文德實錄に編纂す。【人物】幼にして父祖の業を傳へ、十一歳の時殿上して、帝の前に詩を賦し文を讀んだと云ふ。これは遺蹟が十一歳の時に詩を賦したと等しく、環境と天性の然らしめたものである。長ずると及び文意愈々華麗富麗となり、小野篁・春澄・大江山人等と文を以て自他共に許してゐた。篁は當時詩家の宗匠と稱へられ、萬葉・吾人は在朝の通稱と呼ばれた者である。その門に入出する者は、上朝・良吏・阿人・儒士等、あらゆる知識階級を網羅してゐたかの觀があつた。彼は學を好むこと貪るが如く、天性宿事には是はされるのを好まず、風月を賞し吟詠を樂んで然る自適した。殊に佛道を崇信して殺生を好まず、仁愛と孝行とを以て聞えた。思ふに篤實・溫藉・順良の學者であつたのであらう。不中にしてその詩集は、今傳はらないため、その詩を知る事は難いが、ただ「類聚古詩」に載せたものと、「櫻葉集」に「菅相公集」より一句掲げてゐるものが傳はつてゐるだけである。【著作】菅相公集十卷○銀葉集十卷○集韻律詩十卷○東宮切韻二十卷○會文類聚七十卷(以上上巻、何れも「類聚國史」及び「三代實錄」にその名を見るが、現存してゐない)○類聚名義抄十一卷(別項)○文德實錄十卷(別項)○貞觀格十二卷○貞觀式二十卷等。【參考】扶桑略記卷二十○公卿補任○續日本後紀卷八○文德實錄卷五・十○三代實錄卷

五・十六・二十三・三十八○類聚古詩○梅城錄○本朝文粹卷九 【語呂】口合の一種で、天明頃から流行した。體語・俗語等世にありふれた成句に、聲響の似寄つた別句を寄せて、原句と違つた意義の別句を作成する一種の洒落(言海)に、かかる口合を文にした時は、口口或は語語といひ、口にした時は洒落といふと區別してゐる。江戸に生れて江戸で發したものである。口合の一種である點は地口(別項)と同一であるが、ただ語呂は地口の一步進歩したもので、單に聲響の耳に聞いて似通つてゐるのみに止まらず、原語と造語と母音までも一致するやうに作成するもの、カサタナハマヤラリ(藤九行の子音)や、アイウエオの横五段の母音と相通するを要するのである。例へば次の如くである。

た時、關原藩の出頭にも尺八吹十人でこれを奏した。事にも三味線にも合せたもので、歌は「赤竹初心集」に見えてゐる。

つくりする。その時、富の勘太郎が面當に角樽と盆を下げて挨拶に来て、厭味のいひたい方面を言つたので、二人もつひに堪忍袋の緒を切つて顔み合ひを始め、とも、勘八も手傳つて勘太郎を袋叩きにする。そこへ大岡越前守配下の石子伴が来て、勘太郎の罪状、いよいよ明白になつたからとそのまま又引立てて行く。權三も勘十も呆氣に取られてその後を見送つてゐると、六郎兵衛と彦三郎とが奉行所から歸つて来て本服を脱したといふ。まづ勘太郎を釋放し、隠し目録をつけてその後、勘太郎を探つてゐると、さうと知らない勘太郎は、豫て天井裏に隠して置いた血だらけの金財布を密かに出して来て焼き捨てた。それによつて勘十のとれない證據を押へられ、再び彼は御用になつたのだつた。彦三郎の半死も實は奉行所の策略で、彦三郎は生きて歸つて来た。長屋のものは一同その姿を見るなり、驚きしてそのまはりを取巻いた。

【編者】島田良徳(後の令名)【名義】講習堂主人島田良徳(後の令名)の撰文叙に「横峽則怡然歎心者、與夫良山連璧玩弄而傾日者、何以異哉矣。因名之曰良山集」とある。【刊行】慶安四年冬【解説】第十三巻末の良徳の跋による。良徳が撰者たる望みがあったので、良徳がこれを許した。その點を述べた句を集めたものである。十三巻を、春部・夏部・秋部・冬部の順に分ち、季節別にして俳句を集め、附録は廻文部で、これも春夏秋冬に分つて廻文の俳句を集めてある。集められてゐる俳句は、大部分貞門の作であるが、各季節の句の初めの方に作者名な句の句があつて、これは良徳の跋文に「抑、この所の大流波、竹馬狂吟集、其外古き句の作者、あまねく人のしれる事なれば「大流波(貞門)や竹馬狂吟集」の中のもの採り来られてゐるものあり」とが知られ、「大流波」中の俳句と比べ見ると、正しく「大流波」中の俳句が見出される。また「大流波」(發句帳)各別項その他と比べて見ると、これ等の集と本集と共通する句があり、それ等が本集の作者名なしの部にも、作者名のある部にも見出せるので、跋文に「其外古き句は、大部分貞門の頃の貞門の作を集めたものであるが、右の如く貞門中でも古い句の外に、貞門以前の古俳句をも採つてゐるので、この點から云ふと、「大流波」や「玉海集」



るので、その事情が判明する。【價值】本集は「玉海集」と共に良徳が晩年に企圖した撰集の一で、本集が前集「玉海集」が後集をなすものであることは、「玉海集」の序跋によつて知られる。兩集撰者を異にする關係にもよつて、作者の願望にも多少異なる所があり、材料や體裁の上にも異なる所があつて、兩集を合せ見て良徳の晩年頃に於ける貞門の態度及び狀況の全鳥獸圖が形づくられる。集中作者名の脇に住所姓名の記されてゐることは兩集共に變りはないが、他の同列の集に見られない本集の特色の一は、附録一巻が全部廻文の俳句であることである(毛吹草)。廻文の俳句を集めてゐるが、一巻は與へてゐない。併し本集はこれに暗示されたものかも知れない。廻文の如きは、今日から見れば甚だしい遊戯的なものに過ぎないが、貞門俳諧の性質や技術を知る上には恰好の資料と云へる。また宗鑑の古俳句を「大流波」や「竹馬狂吟集」から採つた事も特色の一で、「大流波」との比較によつて、良徳等の採つた「大流波」を知り得ると共に、從來判然しなかつた「竹馬狂吟集」が全部或は一部俳句を載せたものであることを知り得ること、俳諧史上重要な資料を提供するものである。特に「玉海集」に「よしやふれ夢はあしくと花の雨(前書)の句に、「是は細河圖書法印支公の御作なり。竹馬狂吟抄にあり」と後註せると合せ考へて、從來これを宗鑑の集(狂歌集)と傳へ來つてゐる時代よりも、やゝ降るなにかの疑問を新たに起させる。「撰物語二續太平記」(廣書書目録大全)等によつて、本集の撰書者に南都の道名の「馬鹿集」(是の「撰物語」のあつた事が知られるが兩書とも傳存しないやうである。【註】

金色夜叉

小説【作者】尾崎紅葉【發表】明治三十年一月より讀賣新聞に連載。斷續六年に亘つたが遂に完結を見なかつた。【刊行】明治三十一年七月より同三十二年六月までに、前・中・後・續・新編・續の六巻を刊行。春陽堂。紅葉全集第六巻所収。【背景】高等中學生間一と、寄寓先の鴨津の娘宮とは許婚の仲で、相愛の秀才と佳人との未來の多幸なるべきを、人々に羨望されてゐた。ところが銀行頭取の息子富山唯繼に會つて見染められた宮は、わが美談に關り富貴に憧れて、一度求婚されるやこれに應じて許婚を捨てた。悲憤した眞一は熱海の海岸で、一生を通じて、一月十七日は僕の涙で必ず月を曇らして見せる。月が曇つたらば、眞一は何處かでお前を恨んで今夜のやうに泣いてゐると思つてくれ」といふ痛切な言葉を投げた宮と別れ、學業を廢して、行方を晦ましてしまった。彼は憤懣と絶望とに復讐を思ひ、死を思つた。人心の細るべからざる事と金に見易へられた事の無念さに胸が湧き返る苦しみば、われとわが感情を棄てさせる事に依つて紛らさうとした。かくて彼は強慾非道な高利貸野淵の手代となつて、種々な商賣に従つて辛うじてその苦を忘れ、かねて自ら金を積んでやがては恨みを賣さうとするのだつた。併し己を任せて忍び得ぬ事を敢てする痛苦と、又あまりにも大きい失戀の傷手とは遂に彼を救ふことなく、日ごと心身を病んで行くばかりだつた。一方、富山に嫁した宮は、別れて始めて眞一に對する眞實の愛が心底に潜んでゐるのを自ら覺つた。黄金に眩惑されてこれに就いたものの、充たされぬ胸中の飢はいよいよ烈しくなるばかりだつたが、殊に四年後

に、ふと眞一と相見して以來は、彼の恨みを解くためにわが富貴の地獄をさへ捨てようと思ひつゝの眞一だつた。そのうちに、眞一は野淵が血闘して生くべき初志を胸くまで續け、同業の赤根浦が色と利の誘ひを以て頻りに口説き立てると、一顧だにしなかつた。又、宮が悔惜のまごころを顯々となすにつれて、眞一は手に取らうとしなかつた。併し彼の心情を傳へられてからは、眞一の冷く堅く閉ざされた胸にも、かすかな動搖が起つて、或る晩の悪夢の裡で悔惜の自害をした宮に、すでに敵すといふ言葉を與へ、その辱をさへ喰つたのだつた。眞一の心は亂れ初めて、益々苦しくなつた時、丁度用事で鹽原へ出向いたが、温泉宿の隣室で、計らずも男女が心中しようとするのを見、その美しき相愛の情に打たれて、二人を窮境から救ひわが家に引き取つたらんとしたものであつたので、眞一は宮が身邊の不審な消息を知ることが出来た。そしてその宮は前にも増して繁々と思ひのたけを訴へた手紙を眞一の許に寄せて來るのだつた。【批評】明治大正を通じて、その發表當時の作ほど天下の觀聽を集め讀者を心酔せしめた小説はない大作である。一代の文豪が晩年の精力を傾けた名文の故でもあり、言々句々彫琢の妙を盡した名文の故でもあるが、第一に作者が新時代の讀者に親しみある社會に取材し、且つ着想の陳腐ならざる、筋の劇的變化に富めるがためである。そして單なる情痴の世界のみに沈滞せず、才筆を驅つて當時の世相を描破し、一個の社會小説を成さんとしたこと

が、時代的な要求に合致したにも依るだらう。しかし五年にあまたの鐘鐺の苦心にもかまはらず、彼が自家の米の飯と呼んだ傑作「多病多恨(男)に一巻を輪する出来栄」と云はなければならぬ。なほこの作が通俗劇に歐文版さへ交へて、しかも深然たる一種の文藝を創めたことは、特筆に値するものと思ふ。【附記】この作が未完のまま、作者は歿したので、小栗風葉は、師の意向に基き「終編、金色夜叉」を草したが、その文品、師の偉ありと稱された。【以上木志】【上演】「金色夜叉」は、新派俳優によつて屢々脚色上演された。その第一回は、明治三十年十二月、東京市村座。脚色者は藤澤淺二郎。俳優は川上晋二郎一流。この時は、まだ原作の後編までしか出てゐなかつたので、無理に仕組まれたものであつた。次いで、同三十五年二月、宮戸座に花房柳外脚色で、中野信近、千歳米坂等の一座が上演した。これ亦世評を動かすまでには至らなかつた。第三回は、同三十六年六月、東京座で原作者立業、岩崎舜花、花菱華のものを、高田實・藤澤淺二郎・佐藤武三・中野信近・山田九州男・守住月華等の一座で上演した。これは、實は紅葉の立案ばかりではなくて、高田が嘗て大阪で演じた餘計な筋をそれに換へたものであつた。だから、紅葉は初日が開くに及んで、役者のために狂言の筋を換へて憚らないのは、苟も正劇を標榜するものにあるまじきことと一方ならず憤慨したが、さういふ紅葉が、高田の芝居演介には満點の出来だとして稱讃した。第四回は、その二年後、同三十八年六月、眞砂座に、小栗風葉の脚色したもの、伊井善峰・村田正維・中村秋孝・井上正六・河村武・福島壽・中村

芝若・大谷馬十等の一座で上演した。この脚色が従前のものより優れた點は、原作の挿話を一切却却して、眞一と宮との性格の變化を示すに必要な場面だけを、統一連續させたのと、原作者の腹案に基いて、眞一が、宮の生ける屍を抱くといふ結末をつけたのになつた。この時の役割のうち、伊井の眞一、村田の宮尾、中村の浦田、井上の遊佐等が好評だつた。その四年後、同じこの一座によつて、新富座に演じられ、その後も屢々上演された。かうしてこの作は、「己が罪」(不知歸)等別項等に並ぶ新派劇の古典の一つとなり、更に屢々映畫化された。【以上久保田】【紙金泥】(紙金泥)を見よ。【今昔つれづれ草】(今昔つれづれ草)を見よ。【著者】島田良徳(後の令名)【名義】講習堂主人島田良徳(後の令名)の撰文叙に「横峽則怡然歎心者、與夫良山連璧玩弄而傾日者、何以異哉矣。因名之曰良山集」とある。【刊行】慶安四年冬【解説】第十三巻末の良徳の跋による。良徳が撰者たる望みがあったので、良徳がこれを許した。その點を述べた句を集めたものである。十三巻を、春部・夏部・秋部・冬部の順に分ち、季節別にして俳句を集め、附録は廻文部で、これも春夏秋冬に分つて廻文の俳句を集めてある。集められてゐる俳句は、大部分貞門の作であるが、各季節の句の初めの方に作者名な句の句があつて、これは良徳の跋文に「抑、この所の大流波、竹馬狂吟集、其外古き句の作者、あまねく人のしれる事なれば「大流波(貞門)や竹馬狂吟集」の中のもの採り来られてゐるものあり」とが知られ、「大流波」中の俳句と比べ見ると、正しく「大流波」中の俳句が見出される。また「大流波」(發句帳)各別項その他と比べて見ると、これ等の集と本集と共通する句があり、それ等が本集の作者名なしの部にも、作者名のある部にも見出せるので、跋文に「其外古き句は、大部分貞門の頃の貞門の作を集めたものであるが、右の如く貞門中でも古い句の外に、貞門以前の古俳句をも採つてゐるので、この點から云ふと、「大流波」や「玉海集」

登。上層に見る「死人」(持重於、山山)「死人」...

【解説】本書はこれを説話學的に観ると、印度...

五の「獅子」(獅子)「獅子」(獅子)「獅子」...

武勇傳説、卷二十七に見る迷信關係のもの...

屈指の説話文學と比肩せしめても、決して遜...

【性質】林鳥樂、古樂の小曲、空越調曲に属...

に降りし體を振りし舞也といふ。後、續樂部...

【参考】『古今和歌集』卷七、七卷、七卷...

【今撰集】『八雲御抄』には「顯昭法師三巻抄...

【治承】「林鳥樂」の...

【参考】『古今和歌集』卷七、七卷、七卷...

【参考】『古今和歌集』卷七、七卷、七卷...

【参考】『古今和歌集』卷七、七卷、七卷...



【治承】「林鳥樂」の...



【参考】『古今和歌集』...



【参考】『古今和歌集』...

老怪を撃つ。老怪の正體は赤牛鬼、王女は...

の大きと共に、幽遠な佛敎の思想を寓話めい...

人である。馬琴はこれを細につかつて、小野...

づなくむありけむ」と言つて、兩者を異つ...

「昆陽漫録集」及び「昆陽漫録補集」は本書の...

口に萬一を慮り、腰元紅井宗玄の巻を、...

戒僧となつて、執拗に折茶姫に付き纏ふとい...

下つてゐて、その聲は恐らく鳥の鳴聲を模し...

【昆陽漫録集】及び「昆陽漫録補集」は本書の...

【昆陽漫録集】及び「昆陽漫録補集」は本書の...

【昆陽漫録集】及び「昆陽漫録補集」は本書の...

【昆陽漫録集】及び「昆陽漫録補集」は本書の...



【解説】微頭尾めで度き観音物で、各流とも
脇狂言に数へてゐる。大藏・和泉では祖父の
名が財寶になつてゐるが、大藏流でも古くは
西熊などと書かれてゐるから、繁流の如く西
翁と呼んだものが、音轉により財寶に附會さ
れたものであらうと思ふ。つまり有徳の翁を
財寶と稱したものに相違ない。同様の趣向の
物は、三番叟の音轉列の中にもあつて、十人
の子寶と云ふ小書になつてゐる。この方は、
「落筆集」の幸之子節や、また常勢津の子寶三
番叟などに此つて流用されてゐる。(編田)

西翁十百句 【名義】西翁は西山宗因で、
十百句は百韻を十巻集めた意味である。【刊
行】延寶元年【撰本】芭蕉以前俳諧集(俳諧
文庫)所載。【解説】西翁十百句で、最初の
百韻には前書がなく、その他は岩城にて「梅
の花見に」江戸二面、前書時ス「奥州へ遣す」
「西國にて」伊勢にて「前書有、時ス」大坂に
て「櫻井詣」の如く標記されてゐる。各々百
韻の巻かれた年代は記してないが、中には内
容によつて、制作年代の推定されるものがある。
「江戸二面」の前書のある百韻の中に、「何
おもひても六十の秋」の句があるから、これは
寛文三年の春、五十九歳の時の作かと思はれ
る。「奥州へ遣す」の前書あるものの中に、「兼
かけを催すむまの年越て」の句や「寛文六年き
く時鳥」の句があるから、これは四年の年なる
寛文六年の作であらう。「前書有、時ス」とあ
るものの中に「六十三を今はこえたり」の句が
あるから、寛文七年頃の作かと思はれる。「大
坂にて」とあるものの中に「當年は五月二つ
の朝りあひ」の句があるから、同五月のあつた寛

文四年の作であらう。残り六巻のものは年代
を推定すべき手がかりがないが、以上の四巻
と合せ考へて、これ等十巻のものは寛文の初
め頃から延寶に接近する頃迄の間に成つたも
のと考へられる。これ等十巻のものを見渡す
と、巻々によつて多少の差異は認められるが、
概括して云ふと、古風(調子)の作に比べて餘
程斬新にも奇抜にもなつてゐるが、後の談林
調に見るやうな惡調放埒なものにはなつてゐ
ず、式目上から見て、古風の規格に必ずし
も拘泥せず、推合別項で去録の如きは必ず
しも拘泥しないが、主要な規格は守られて
ゐる。即ち古風の反動者たる宗因の特色、
談林調の體裁は既に備はつてゐると云ふべき
で、これが如何に發展すべきかの契機を識す
るものと云へる。かくしてこの十百韻は談林
派の第一聲となり、又第一聲たるにふさはし
いものであつた。(田田)

西王樂 【名義】西王樂は西王母
【撰本】左方樂、古樂、中曲、黄鐘調曲に屬す
る。序二帖、各七拍。破(拍子)。初め舞があ
つたが後に絶えた。「帝軍」仁明天皇の御作
で、大上皇成が舞を作つた。この曲の序は能
馬樂の「意垣」に合ひ、破は「嵐山」の歌に合ふ。
舞は後に絶えてしまつた。(田田)

【著作】二十巻種ある中で、源氏物語
類(九巻、明和十四年刊)は、群馬縣下藤名山置
の農民暴動事件を扱つた際小説だけに、忽
ち數萬冊を賣つたといふ。また「冬風月夕榮」
(九巻、同年刊)は、十三年もかゝつて父の仇一
瀬直久(當時東京上野區新井町)を京橋三十
間堀屋田部で討つた筑前秋月藩の白井六郎と
いふ青年の事件を書いて、當時評判が高かつ
たもの。又その他、比較的勝れたものに川柳
天網船等がある。

西翁 【名義】俳人芭蕉の弟子作者【本名】平
山五郎(俳号西翁)見田原(説)【説】初め
鶴水、後西翁又井原西翁(西翁置土産には鶴
をくはく)と調んでゐる。元禄の初め頃一時
西翁ともいつた。松蔭軒(二萬巻、二萬巻等の
別號もある)。「生段」寛永十九年生れ、同年よ
り辞定。元禄六年八月十日歿の説(「俳諧置土産」
一巻)「俳諧置土産」の句の年月日附を寛永年月日と見
たる説及び同書の註文、西翁の墓石の記に據つた
説と同年十月ははじめ歿の説(「西翁傳」九二)
【辭世】深世の月見過しにけり末(寛文二年)【墓
所】大阪八町寺町(西翁置土産)北條開水の建立、
仙崎西翁と刻してある。【像】芳賀一品の畫
に在る。西翁の最も知られてゐる。世には、「西翁置
土産」の最も多く知られてゐる。その他、西翁の
像が最も多く知られてゐる。その他、西翁の
像(「西翁傳」二巻)にも法體像が見えてゐる。
【大坂歌仙】には若い頃の俗體の像がある。
【筆蹟】現在知られてゐるもの著しいもの
には、「俳諧」附音の百韻一巻(「俳諧置土産」

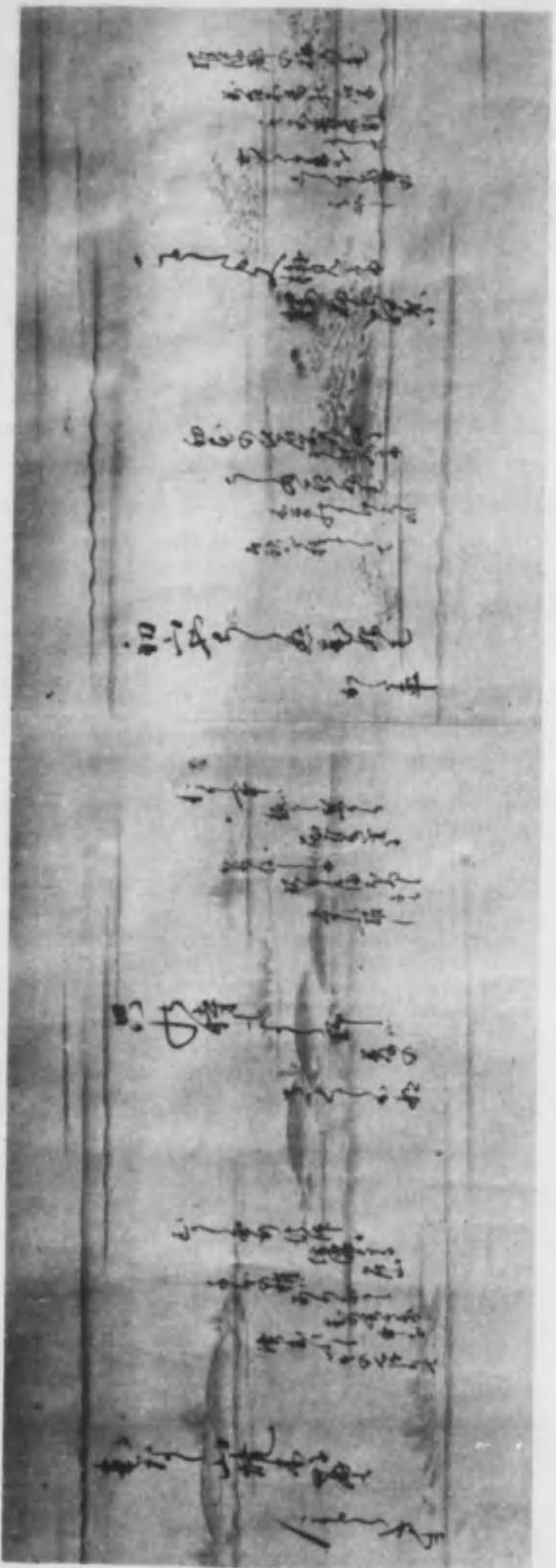


俳翁鶴 西原井
(藏所仙曲集大)



俳翁鶴 西原井 兼品一貫芳
(藏所氏實保久)

碑 墓 鶴 西
(寺頭雲町寺日町八坂大)



雲の峯今山見國の谷心略

同々嶺「本」に「石」に「山」

山「」の「國」に「山」に「山」

海原嶺「新」見「國」市

離間「」て「夫」離「」る「心」深「」る「心」

夏の「」時「」は「」二「」月「」

小「」舟「」は「」了「」年「」の「」舟「」

男「」に「」は「」船「」屋「」の「」間「」

式「」山「」嶺「」木「」に「」舟「」を「」到「」る「」舟「」

船「」は「」了「」心「」を「」了「」す「」

千「」本「」の「」舟「」は「」了「」る「」

只「」の「」和「」ま「」し「」て「」復「」射「」等「」の「」な「」る「」心「」

は「」は「」船「」

は「」り「」は「」了「」て「」原「」を「」ま「」る「」心「」に「」

降「」山「」を「」さ「」ら「」し「」て「」舟「」を「」了「」す「」

古「」船「」を「」了「」す「」て「」

水「」會「」の「」は「」了「」す「」心「」に「」

さ「」ら「」し「」て「」舟「」を「」了「」す「」

降「」山「」の「」北「」西「」の「」山「」に「」舟「」を「」了「」す「」

こ「」の「」り「」は「」了「」す「」心「」に「」

可「」な「」心「」を「」了「」す「」

其「」身「」を「」了「」す「」心「」に「」

風「」古「」本「」の「」舟「」を「」了「」す「」

墨「」跡「」の「」舟「」を「」了「」す「」

西 齋 齋 齋

如 如 如 如

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

卒 卒 卒 卒

きのふに響りてやらさむし
日は見えぬとも
風の聲におとろき
かくれなき長瀬も
枕の夢を覺しける

是沙汰て風のふくやうにけさの秋

日の本に仕ける徳には
名月の影を詠め
ける事のはやし

見た跡をちろこし人の月夜かな

見わたせば御機をきりませ
都の町をせしといふ
大原の里の女馬かたも
愛に目なれてはおかしからず

なくれなん絶としらば黒木賣

女中まじりに春の野の
すみれ相葉をつむむ世は
縁りかはりて萬の草もかれへに

枯野かなつはなの時の女情

雲心の聲といふ
名物の言葉をかりて
佛の一句になす事よしなく
是は子とも細工にしておかし

鳥賊の甲や我色酒す雪の露

遊奕す人はき
我も人も物のいそかはしき時とて
すまへの女のせんたく物なと
やかて花束木々に掛置けるは心なし

等持ス梅に柳にとしの暮

源 波 伴 林
松 徳 齋 西 鶴

藤波の藤の花
萬古不易の名木
其色香各異にして
世々に春を
しらす事のはやし

こころも又梅見て櫻ふち紅葉

初花の比名所の山にわけ入て
ちらぬ花ふむ
木曾のかけはし
古歌を續として

初山やちらぬ花ふむかた車

おもふ事は根から葉から
花なき里に
かりねして現にもまほろしにも
わすれ難し

只の時もよし野は夢のさくらかな

むかし西行法師信なる名山
千本の柳はありながら
花の咲きさる事を
遠望ししその心をとりて

花なし山燒木にせぬもほとよきす

世に住めは清屋の隣
後生願ひのたなき庭
小夜ふけて下手のきぬた
夏の寒ねをおこされし

婦聞いて夫戀いさかひ取るかな

草葉露し海見の國有
山なしの國花も紅葉も
朝も露酒もなくて
何か楽しみにはなりぬへし

露の身や山見の國の拾ひ物

に「俳諧者館屋町井原西鶴」とあるが、點者
になつたのも或は改題の頃であつたかも知れ
ない。延寶五年(三六)五月二十五日、彼は
大阪生玉本覺等に於て獨吟一千六百句を興行
した。これは有名な矢野(別題)の最初であ
る。同六年彼は江戸から来た田代松意を助
へ、京の藤原の庵に於て三吟三百句を催し、
同七年三月大坂三千風が仙臺の梅庵で獨吟
三千句を吐いたので、これを社とし、その仙
臺大矢野(別題)に跋を贈り、傍ら紀子が南都
極樂寺で、獨吟一千八百句を興行した事を否
定し、且つその巻に點をかけた彼本寺高政を
罵つた。併し彼はこれ等の入々に凌駕された
事に憤慨して、同八年(三九)五月七日やは
り生玉の本覺等に於て四吟四千句の二度目の
大矢野を興行し、暫く四千句と名乗つてゐた。
〔浮世草子作者時代〕天和二年(四一)三月
宗因が歿した。この時彼は始めて浮世草子に
筆を染め、「好色一代男」を書いた。一説に彼は
宗因の死に一期を劃して佛壇を造いたやうに
云ふがさうではない。同三年彼は大阪高津南
見庵に宗因の一周忌法要を督み、宗因の「詠む
とて」の句を立句として聯起し百韻を本式日
によつて興行した。翌貞享元年(四三)六月
五日には住吉の社前に於て第三回の矢野俳諧
を催し、「晝夜獨吟二萬三千五百句を興行し、
これより二萬句又は二萬句と自稱した。但し
その獨吟は今日には傳はつてゐず、唯發句だ
けが知られてゐるに過ぎない。又この興行は
餘りに飛び離れた多數であるから眞實を疑つ
てゐる人もあるが、開水の「こころを興行す
其角の二萬句の體」の句等によつて確定的の
ものとされてゐる。この年「諸國大圖」(好色二
代男)を出した。貞享二年彼は「源氏八島」(西
以下四五の浮瑠璃を収めた「小竹巻」を編み、
〔西鶴語國はなし〕を出した。この浮瑠璃興行
者として近松と競争したといふ説がある。同
三年「好色一代女」「好色五人女」「本朝二十
年」近代體懸者」等の作があつた。「懸者」
は老莊の虛無的思想を表したものである。同
四年「男色大鑑」「武道傳來記」等が出た。彼
の題材の轉換期はこの頃である。即ち従來
遊里などの好色生活を描いた彼は、武者物・町
人物等に筆を轉じて、武士の義理生活や町人
の物慾生活の描寫に向つたのである。「武義義
理物語」「新可笑記」「日本水代紙」等は、翌元祿
元年の作であつた。併し、「色里三所傳」(好
色感發記)等を彼の作とすれば、好色本の作も
あつたのである。西鶴と改めたのはこの頃で
あつた。この改題に就いて將軍御吉の女鶴歌
の名を傳つたためであらうといふ説もあるが
信じられない。同二年「本朝雜談比事」「日
玉辨」の作があつた。前者は「家談比事」に倣
つたもので裁判物、後者は地誌・旅行記の類であ
る。元祿三四年には、彼の晩年の俳諧・佛圖と
して開水との兩吟半歌仙二巻があり、可政の
「物見草」(別題)を取つた「石車」を出した。半歌
仙二巻は開水の「俳諧圖説」に見えてゐるが、
昔時の佛はなく、全然沈思的に、むしろ狂風
に近いものである。「石車」は松崎軒とい
ふ諷刺で發表されたもので、可政の痛罵に憤
慨し、開水の返答を待たずして、自らその體
裁に當らうといふ往年の意氣を見せたもので
ある。元祿五年彼は「世間圖算用二種(波土産
)を出した。これ彼が生前に於ける最後の出版
であつた。前者は「水代紙」(幾何)などと共に
町人物の傑作で、商人の理想を表し、金錢萬
能の町人階級の世相を描いたものである。

【業績】〔俳諧師として〕宗因門下の一鬼才で
あつた彼は、阿闍梨流といふ派の下の、遠
慮なく句を吐き散らした。貞享末期の開中
島流流が、「大坂西鶴は西鶴より放埒技師に勝
れ」とか、「江戸は不知大坂にて阿闍梨西鶴一
とか指摘したやうに、口拍子の響き事天下
第一の榮冠を贏ち得たのである。門人は多か
つたやうであるが、中で水田西吟、北條開水、
推本才助がその尤なる者であつた。西吟は落
月庵と號し、開水の西吟として高名であつた。
浮瑠璃作でもあつた。開水は師に忠實な人
で、西鶴没後七年間、師の舊庵を守り、「置土
産二種」(俗つれん)、「名残の友」等の西鶴
の遺稿を出版し、自分も亦西鶴を學んだ浮世
草子の作を成した。西鶴の俳風を承けて獨自
の句地を拓いたものは才無であつた。彼は淺
草の觀音堂に一日萬句の興行をして西鶴の口
拍子に倣つてゐる。江戸談林は才助系の宗匠
によつて、後世まで傳はつたのである。

〔浮世草子作者として〕彼は浮世草子(別題)の
創始者と目されてゐるが、浮世草子の内容、題
材、文體等は、明解・高治・宣文の假名草子(別
題)にその端を發してゐる。好色に關するもの
は、「色道大鑑」「浪花経」(各別題)、「遊女評判
記」「色道心得」がある。旅行物には、「東海
遺名所記」「浮世物語」(各別題)等があり、諸國
遊には、神佛・怪異物の「百物語」「御伽草子」
(各別題)等があり、歌物語には「誰が身の上」
〔大和二十四年(各別題)等があるが、多くは
古文の模倣や古典の翻案で、新興の平民文學
といふ色彩は濃厚でなく、又寫實にも忠實で
なかつた。尤も西鶴の作にも「源氏物語」の體

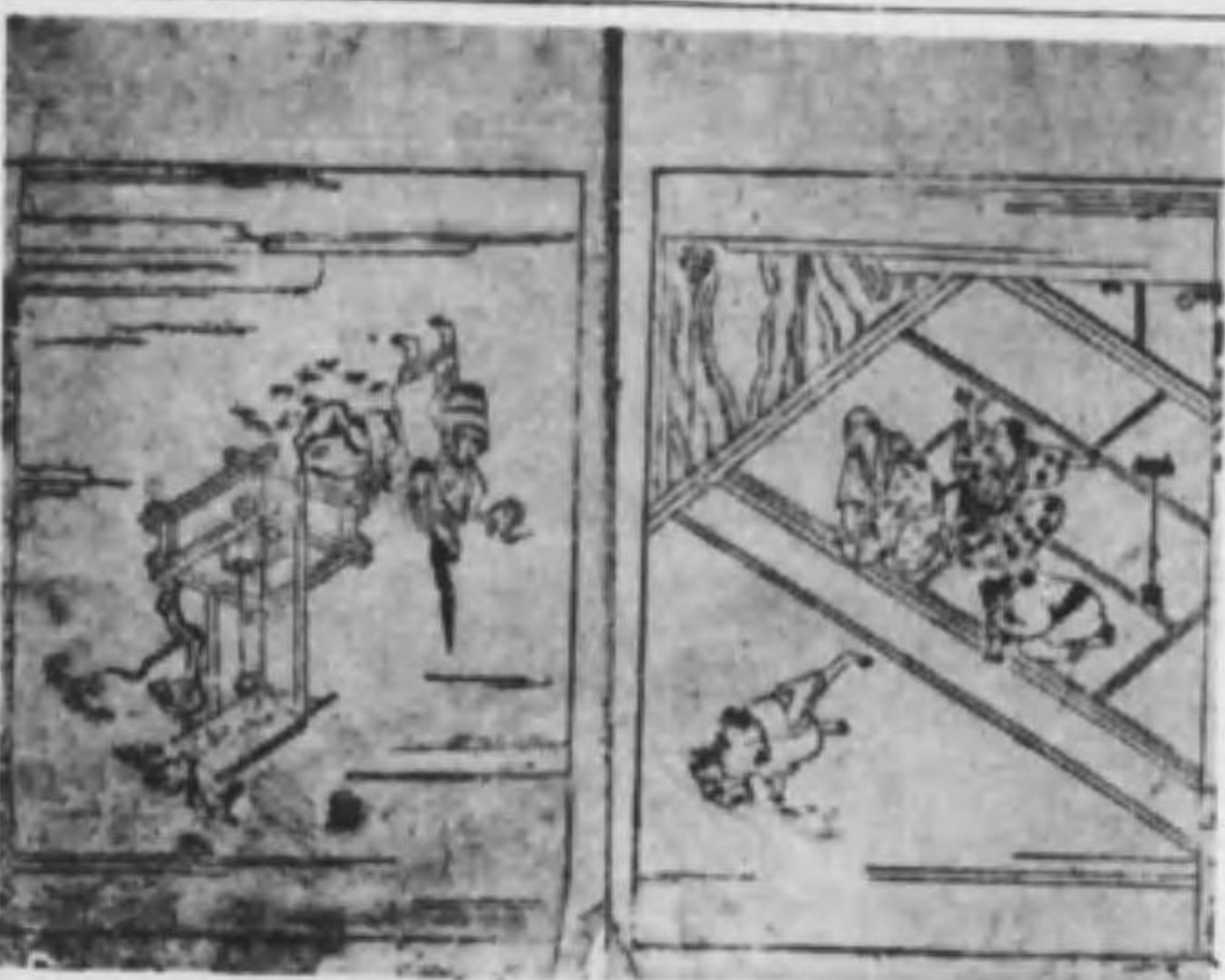
案や「伊勢物語」「徒然草」の模倣と思はれるも
のがあるけれど、その鋭敏な觀察と印象的な
省筆表現の下に、現實の世相・人情・殊に肉の
世界、金の世界を痛切に穿つて、人性の眞實
に達した所は、何人の追隨をも許さない古今
獨歩の觀がある。彼の作がいかにも世人の嗜好
に投じ、流行を見るに至つたかは、所謂西鶴
本といふ名の下に、例へば、「西鶴異傳物語」
〔小夜風「西鶴傳説車」(各別題)等の偽作が出
た事でも分るのである。又彼の筆致を眞似た
開水・與志・月尊堂等の作が、元祿・寶水の小説
界を賑はしたり、延いては八文字本(別題)
の中にまで同系統の作を見るまでになつたこ
とも、いかに彼の感化力の偉大であつたかを
示してゐる。彼は昔から發聲演說の多かつた
人である。先づ開水の「講談破邪關正」(別題)、
梅園堂の「元祿太平記」(別題)にその熱學を窺
られ、芭蕉に「淺ましく下れる姿あり」とし
なめられたといふ傳説、朱拙に好色の書を作
つて活計の課とした罪人と罵られ、下つては
瀧澤馬琴に文百と讀られたけれど、反つて其
角は彼の佛をなつかしがし、柳亭種彦や「奇人
談」の著者には敬ばれ、明治に入つて浪島英月
の紹介推薦に次いで、紅葉・露伴二大家の尊崇
する所となつたが、特に樋口一葉に大きな感
化を與へた。

【作風】新しくする、口拍子を輕くする、故事
をもちつて道化た事をいふ、併し首尾變化の
鋭、道理分明に聞えるのでなくはならぬと
いふのが、彼の句作上の主義であつた。殊に遊
蕩趣味は彼の作に最も多く見られる所であつた。
彼は現實に即して世相を穿つてゐるが、誇
張的の所があり、想像が手傳つてゐる所もあ
る。遠慮の遠かなる事は、前句の主格を控つ

の仙人坊といへる大徳、一年に二百貫目づつ遊女買に費つて財産を皆無にし、身請けした遊女小野鳥と貧しく暮し、一男を儲けたが産衣なければ紙衣を着せ、神樂に作つた具足を着せて、社参した話。(巻四)「江戸の小主人と京の唐土」と、太夫買ひの大徳より落ちて一奴の胡買ふまでで零落した男、遊女を身請けし紙買入の細工して貧しく暮してゐる内に、四人まで銀を儲けて愈々困り、十一年夫婦の交もせざる話。(大徳日の伊勢参りから屋の夢)三百貫目の身代で太夫吉野を身請けし、七貫目残して栗田口に住んで、世を風流に暮してゐる大徳がある。こゝに又、太夫左門を請け出して、樂自慢に伊勢参りを思ひ立つた五條の市といふ大徳、吉野夫婦の縁を見て、我にはまだ忙しき所があつて、引退した話。悪風は未のあかり、つねねにさがり有、この章には定まつた人物もなく、纏まつた話もなく、古に比べて遊びや大徳の淺まつた話もなく、古よといふ(巻五)「女郎がよい」といふ野郎がよいといふ、或る大徳零落して大阪長崎の北側の、堀と堀一重外に住むひして、三十七で死に、竹林寺の墓所に、施主後町まんと記した一基の石塔を淋しく遺した話。(しれぬ物は子の親)客の機織取りを商賣とする江戸の城使といふ野郎、客より金を貰ひ當分の官位を得るために京に上り、偶々客に伴はれて鳥取に行き、はんじやうといふ遊女の深切に迷ひ、金を貰ひ果して官位の望みも捨て、入水しようと思つてきめてゐるのを、はんじやう密かに金を恵まうとすれば、遊女を大阪に下り、こゝに機を以て細き機を立てつた話。(都も淋し朝顔の歌立)大阪福島の里に住む

ひして、清貧の生活を樂しんでゐる大徳の成れの果がある。或る日、善友訪ね來り、物語の末、主人は歸去ぶりに貧乏な歌を書いて、一人ゐる下人に、いつもの茶屋へ持つて行けといへば、下人は驚いて、日頃の掃きかき掃除しないので、主客大笑ひになつた話。「薄想」通篇十五話より成る。いづれも隨章で、遊蕩生活の極、零落した者の上を書いたものである。併し豪華好色の歌集も一時の夢と過ぎて、覺めた時は夜風の身に沁む紙衣となつてゐる哀れさを主題としたものでなく、かゝる人達にも、なほ大徳の意氣、品位を残すことを多く書いてある。従つて悲哀が全篇の主題であるとはかりは認め難い。なほ身請けされて、男と共に貧窮に墜れた女たちにも、遊女の意氣地を失はないでゐるものも見えてゐる。故に本篇は、零ろ大徳・遊女の成れのほけて残るかうした精神の表現を主として作つたものと見るべきであらう。西鶴を研究するもの注意を怠つてはならない主要な作品の一である。

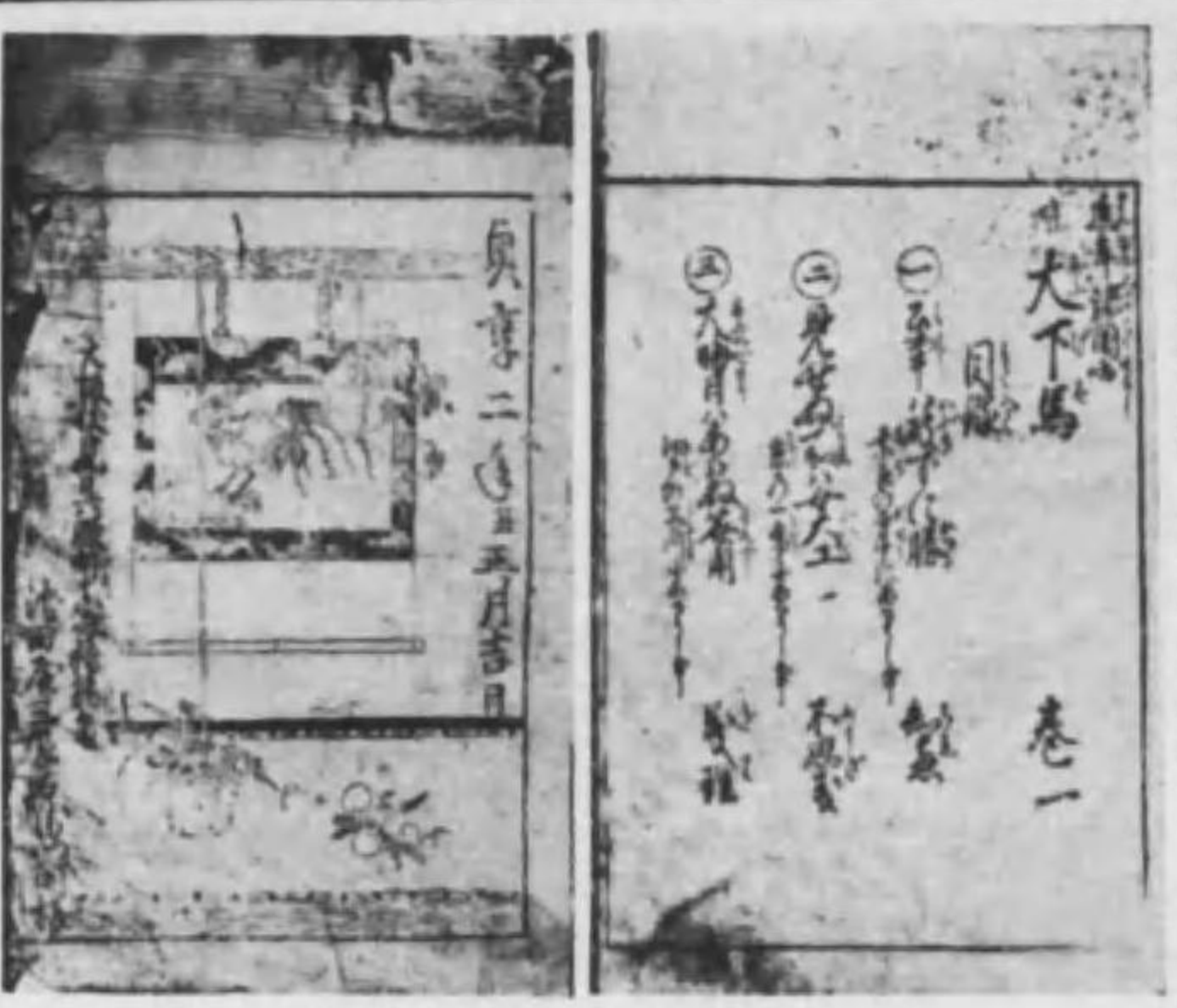
【西鶴綴留】浮世草子 六册
【作者】井原西鶴【刊行】元禄七年三月【諸本】正徳二年再版。西鶴全集(帝國文庫)、西鶴全集(有朋堂文庫)、西鶴全集(日本名著全集)等に所載。【解説】門人北條彌水の序の中に、西鶴生涯のうち述作する所の假名草子、棟に充ち牛に汗して、世にはびこる中に、日本水代藏・本朝町人・世の人心、これを三部の書と名づく。……水代藏は其功なりて後、町人・世の人心、半書道して、過し西の葉月にこの世を去りぬ。されば兩部の開たらんにはぬしの本望もかなはず、且つは惜しくも思はれるので、未完の二部を取りまとめ一部としたといふ意が書いてある。恐らく、これは信すべきであらう。即ち本書は、右未完の「本朝町人」と「世の人心」を合編して「西鶴綴留」の名を題したものであらう。各巻頭の書名に由れば、巻一・二が「本朝町人」で、巻三以下が「世の人心」である。さて「本朝町人」は、元禄二年の執筆であらう。巻二第一話の首に、「本朝は天照大神元より今元禄二年の初春まで二百廿三萬六千二百八十三年此國豊に續きてなほ君が代の松は久しきためし云々」と見えてゐる。本書はその書名に見ゆる如く、町人の模範たるべき経済的成功談



を綴り集めたもので、「水代藏」の精編と見られる九章から成つてゐる。その九章のうち三章は、藤田正直の徳に依つて成功した話である。「水代藏」の動機・節操・智慧・才の成功談のみから出来てゐるのに對して注意すべきことである。「世の人心」は、經濟的成功の一面に止まらず、廣く人心の現象・變化に關する十四章の説話より成る。中には主たる人物を設けないで、或は多藝は人の望むべきものでないことを戒め、或は手代を使用する主人の心得を説き、或は奉公人仲宿の有様を記したものなども交つてゐる。故に形は雜難に見えるが、内容は豊富である。一部としては十分の讀まりの附いてゐない作品ではあるが、個々の説話には勝れたものがあり、又西鶴を知るには重要な資料である。(西鶴全集)【西鶴綴留】西鶴全集(有朋堂文庫)等所載。【西鶴綴留】西鶴全集(有朋堂文庫)等所載。【西鶴綴留】西鶴全集(有朋堂文庫)等所載。

西鶴諸國はなし

子五册【作者】井原西鶴【別名】「近年諸國唯大下馬、略して大下馬といはれてゐる。【刊行】奥附に「貞享二年正月吉日 大阪伏見泉屋町寶徳橋角 池田三郎右衛門開板」とある。【諸本】帝國文庫本西鶴全集は、巻四の第二話、忍び扇の長歌までを載ぬ、有朋



堂文庫西鶴全集は巻九を缺いてゐる。全巻を載めたものには、日本名著全集の西鶴名作集と帝國文庫新本の西鶴全集がある。【解説】諸國の珍説怪談を集めて、これを文學化した短章三十五話より成る。序に「世間の廣き事國々を見めぐりてはなしの種をもとめ

ぬ」とあるが、諸國を巡行した作者が、旅中に得た傳説を本としたものであらう。但し中には、支那の傳説や、文獻の傳へた古傳説も交つてゐるかと思はれる。我が傳説文學は古くからあるが、特に浮世草子に先だつて流行した假名草子中の、珍説怪談を集めた諸國物語、百物語に倣つたもので、文學的興味はそれ等に比ぶれば、高くないものである。

西鶴俗つれ

【作者】浮世草子 五册【作者】西鶴(北條彌水の序文中に「此俗つれ」をなにかきかたみにして松蔭西鶴のかきりある今はの時、とりまきれたるさうしの中より、この比見さらえて書林何某にゆつる」とあり、又書林の序文中にも西鶴の遺著たることを述べてある)【刊行】奥附に「元禄八乙亥曆五春吉日 書林 京洛寺町五條上町中庄兵衛 浪花坊筋後町 八尾甚左衛門」とある。【名題】書林の序文の首と各巻目次の首には「西鶴俗つれ」とあり、題簽には「俗つれ」とあり、題記してある。又俗つれ(一)の書名は作者の命名でなく、書林の好みで附けたのである。その意は、作中酒に關する話の數條あるに因みて、「徒然草」中に酒の論議のあるより思ひつきであることが、書林序に彌水の序文で知られる。【諸本】西鶴全集(帝國文庫)日本

古典全集、西鶴名作集(日本名著全集)、西鶴全集(有朋堂文庫)等所載。【解説】巻一・巻三・巻四の三冊は各四話、巻二・巻五の二冊は各三話、總べて十八話より成る短編集である。「俗つれ」の名が、愛好の隨筆文學の名に取られてゐる通り、隨筆風に編纂されたもので、體裁の整はない觀がある。巻一は、第一話に飲酒の戒めを説き、第二・三・四話何れも飲酒より身を滅ぼし又は失策をしたもの、巻二は第一・二話に遊蕩の戒めを説き、第三話に多少酒に酔つたもの、第三話に多少酒に酔つたもの、酒屋の息子が結婚の夜頓死し、娘は一旦生家に歸り、兩親の勤めもだしかねて聲を取つたが、聲を説いて表面だけの夫婦となり、兩親死して夫婦出家を遂げた話である。巻三は又酒に酔つた話、第一話は行ひ殊勝なる下女の話であるが、第二話は酒の醉のために客の前で失言した野郎の話、第三話は死んだ親友に代つてその老母を養つてゐた僧が、宿醉のために三日もこの老母を顧みずに餓死させた話、第四話は解酒より妻の頭髪を切り、醜態を後悔し禁酒した男の話、これまでを通過すると、飲酒に關する話は一般的に纏まつてゐるやうであるが、中間に別種の題材の話を混じてゐること上述の通りである。巻四の第一話は老母に不孝をする富める夫婦と、反對によく老父をいたはる貧なる夫婦とを對照してゐる。第二話以下三章は續きと見える。第二話には、見出しに、「序 蟻蟻の邊に隠家好色巻」とあつて、京娘の邊に隠家を作り住む大富の男が、替譯の餘り、妻とすべし理想的美人を贖買して求める。即ち條件を與へて出入の者共を全國に派遣し、

秋を期して復命すべきこととする旨を書き、次にその秋、使の者共が歸京し、求め出した美人を一々に品評して、取な完全な美人を選定しようとする。第三話は、京の北千本念佛の美人について特色風俗を詳し記述して、鼻孔少し大に過ぐる程を擧げてゐる。以上の三章は離かに離散したもので、完結に至つてゐないと思はれる。或は西鶴が遺稿の未完なるものを取り入れたのであらう。これだけで全體の意匠を付度するならば、かういふ形の下に各章を一人に宛てて、幾人かの美人を盡く鑑定ではなかつたらうか。當時繪本などに美人畫が行はれてゐたから、彼にさうした思ひつきがなかつたとも言はれまい。果してさうだとすると、「好色五人女」の三の「妾の關守」に示した彼の詳細なる美人の觀察記述に於ける特殊な技倆を十分に見るべき作を成したであらう。巻五は又類例もかほる零落しても元の大徳は、流石に大徳の氣品を保つと違ひ、或る大徳が零落して昔の氣品を失つて物惜しみした話。第二話は彌まり油を寄進すべしといふ男のこと、吉原高尾ののない章で、大阪新町遊女等のために水代藏を保護してゐる。第三話は親類りの大財産を遊蕩に費ひ盡した三人の兄弟が生活のために兄は大徳、仲は財閥、弟は太夫と役を分けて、經營したまはるを多居に抱へられたが、この遊女買より外には一毫もなし得ないので、解雇されて親類となつた話である。本巻は幾分「置土産」に相通するものがある。かく本書は

未完成の遺稿の種かを取集めたものと見ゆ。全體を通じて見れば、然りとて整つてゐないが、部分的に見ると、飲酒に關するもの、美人に關するもの、大座の身の果に關するものなどが、中心となつてをり、各々それ等にはそれ等として見るべき長所がある。(『小島』)

西鶴傳授車

【作者】天狗堂轉授【刊行】享保元年板。【解説】「浮世の月見」に「浮世草子」の句を残して現世を去つた西鶴が、似合はしき有可きもあらばと、風呂敷包みを肩に遠く六道の巷を彷徨つてゐると、小さい鬼が出て来て、「浮世にある頃、小説を作つて諸人に無理酒をのませた科により、酒屋地獄に落ちた者」ところ、文章の響あるによつて、閻魔王特にその罪を赦される」とあつて、地獄の狂言作者となる。「とても神樂には生れませで、交響に變らぬなりのはて、さりとては夢にあふさへ面目なれど板行屋が昔忘れぬ手向の水思へばうれしうもまたなつかしければ道出しの鐘を限り冥途の長物語り必ず人に許さす。なと疑ふにつめたい鼻を押付けて、一以つ西鶴の語る冥土物語となる。一百三十六地獄の總主閻魔王の在り平安城の花の春、牛頭馬頭の驛卒等が打ち叩き三味線引いてぞめき歩くは、大津鶴に少しも違ふ所はない。席上によ召され、西鶴は交響以来の因みに以て新野長太夫・片岡仁右衛門の二人を御前に推薦する。大王以ての外に喜び、二人に引出物を賜ふ。以下表面は地獄閻魔王城であつて、實は元禄當時の好色生活の種々相を描いたもの。都の分限者達が鳴物調といふナンセンスな遊びを催してゐると、手代の袖の片六セが諷刺して「金銀は盡くる時あるものなれば者をやめ美し」

娘を控し求め御方なりとも親分になり大王に軍公に出せば御方愛するは知れたこと。その上で太子殿ができてさへすれば十萬石はたしかなもの、御知行はつくる時なき子孫々々までの御家言なれば行末めでたく繁昌せん」と申上げる。そこで、片六の近所に住む天竺浪人の娘の十八九ばかりなるをば御方からせて大王に奉る。果して大王のお氣に入り寵愛ならびなき事になるといふ段(第三巻)と、閻魔王城出入りの吳服屋の手代が、長太夫を若殿に入つて浮舟の許に通はせるといふ段(第五巻)と、徳川大奥の生活及び輪島生鳥の一件をあつてこんだものである。長太夫のことが現はれたので浮舟は病氣と偽り、然るべき御方に祈つて貰ふ事になる。そこで長太夫を初めとして、片岡・伊勢野以下十二人作山伏となつて閻魔王城の調所を越える段は、謡曲の「安宅」の文章をそのまま並べてある。かくてつひに見目噴鼻に咬き出されて浮舟は浮かれ舟、長太夫はうつほ船、あとの衆は高麗舟、稚子一つを帆にかけて後日浪と船出する。

西鶴名残の友

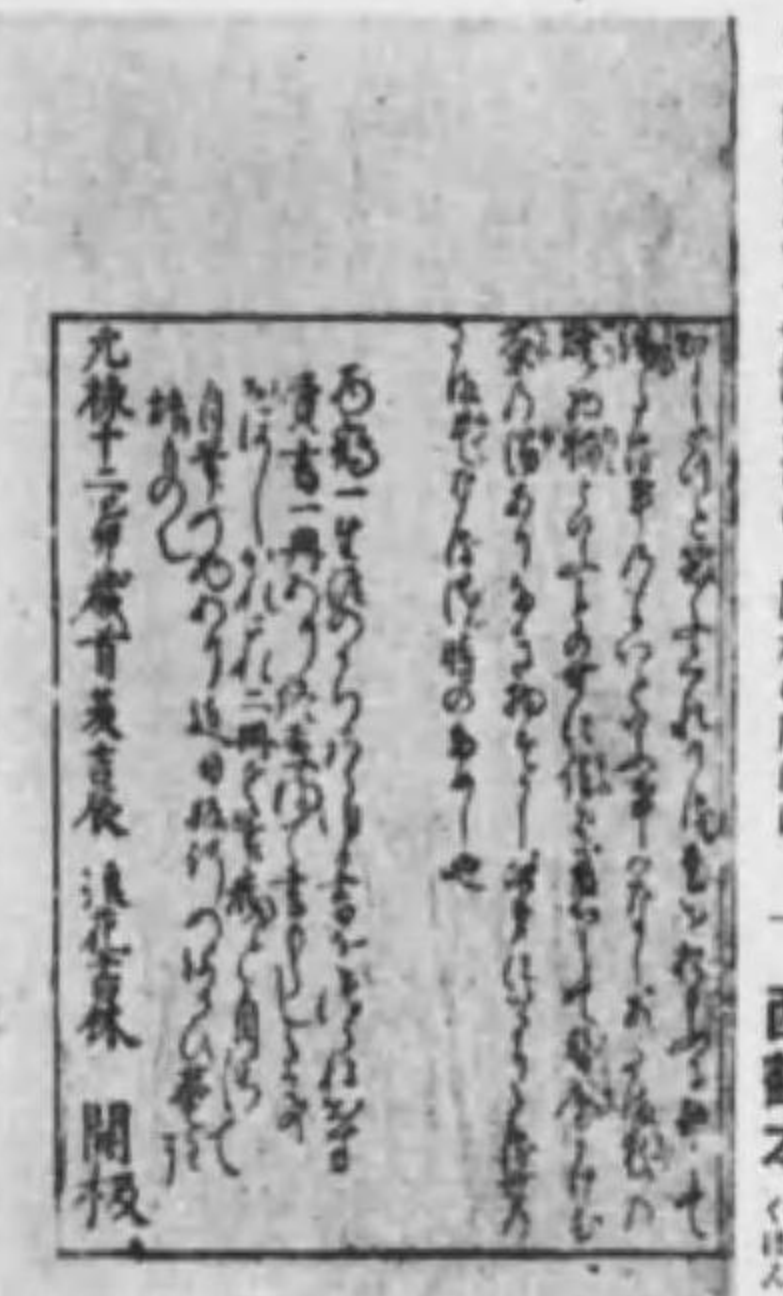
【作者】西鶴【刊行】元禄十二己卯歲夏吉辰浪花書林開板【名義】西鶴【解説】最後の二節は「好色一代男」の最後の趣向にまねたものか、或は生鳥の遠島を諷したものであらう。又西鶴を冥土の狂言作者としたのは明かに「西鶴冥途物語(別題)」を諷刺したものであらう。最後は「女房ども呼聲に目ざめてみれば西鶴の繪像のみ」とあつて一篇を夢物語として結ぶのである。(因みに本書初版本には、第一巻の見かへしに西鶴の繪像と辭世の句とを掛物の形にして刷りこんである。)

さいかき

【名義】御伽草子本の表題は「さいかき」とあるが、主人公が佐伯であるから、「さいき(さいき)」を誤つたものである事は明かである。【解説】御伽草子本の表題は「さいかき」とあるが、主人公が佐伯であるから、「さいき(さいき)」を誤つたものである事は明かである。【解説】御伽草子本の表題は「さいかき」とあるが、主人公が佐伯であるから、「さいき(さいき)」を誤つたものである事は明かである。

西行

【名義】御伽草子本の表題は「さいかき」とあるが、主人公が佐伯であるから、「さいき(さいき)」を誤つたものである事は明かである。【解説】御伽草子本の表題は「さいかき」とあるが、主人公が佐伯であるから、「さいき(さいき)」を誤つたものである事は明かである。



元禄十二年庚申夏吉辰浪花書林開板

西鶴冥途物語

【作者】未詳、海影の署名がある。【刊行】元禄十年【書本】徳川文藝叢書(選集)【解説】京の幻夢といふ俳諧師が、成る日、花見から歸つて来て支離先で頓死し、冥途に行つて閻魔王の宗匠になつてゐる西鶴に逢ふ。そして西鶴の案内で冥途の俳諧の有様を聞き、更に現世で俳諧を行き違へた俳諧師どもが、様々の實苦に逢ふ有様を幾らも見物する(以上上巻一より三まで)。次に巻四・五に於ては、神樂に上り貞徳頼朝・立直頼朝かと思はれる人を選び、今の世の附合の非を論ぜられて蘇生する。一家眷屬、限りなく喜ぶうちに、幻夢は見開きた冥途の俳諧の有様を十分に書き記したいと、先づ藤波の下り、西鶴の舊居を吊り、それより俳諧修業に諸國行脚をしよう、と、東國さして發足する事に話は終る。西鶴の冥途話に假託して、當時の俳諧及び俳諧師の弊風を諷したものである。(『小島』)

西鶴集

【編者】各務支考【名義】支考は京より東に在る時は東華坊と言ひ、西に在る時は西華坊と言つたが、それによつて東西の二集があるのである。華は榮也、光也とあつて、こゝでは西國へ旅行した時の俳諧を指したのである。【刊行】元禄十二年【書本】支考全集(俳諧文庫)所収【内容】乾之巻の巻頭に、表合の目録六ヶ條をあげて内容の大體を略説し、次に攝津・播磨・備前・備中・安藝・豊前・肥後・肥前・筑前・長門の諸門人と附けた表合(八句二十六を擧げ、それへ後句・臨三の意味・附方を説明し

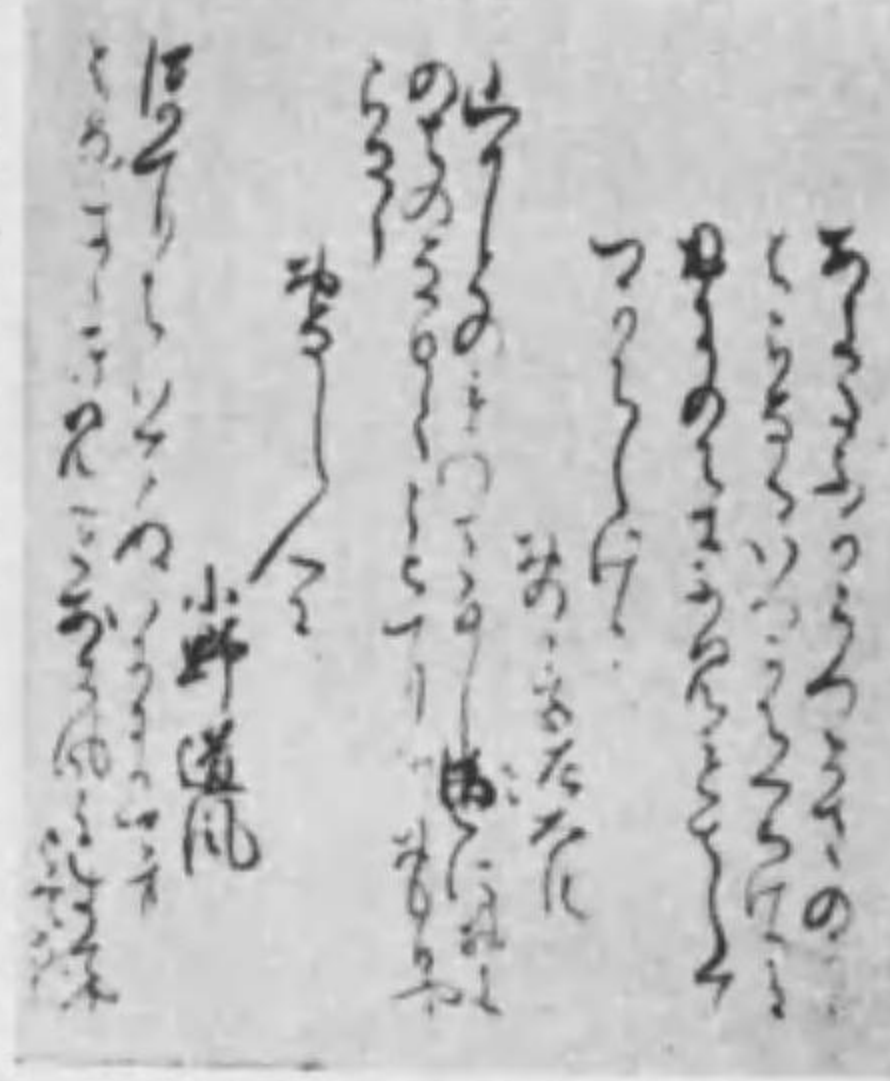
西行

【名義】御伽草子本の表題は「さいかき」とあるが、主人公が佐伯であるから、「さいき(さいき)」を誤つたものである事は明かである。【解説】御伽草子本の表題は「さいかき」とあるが、主人公が佐伯であるから、「さいき(さいき)」を誤つたものである事は明かである。

西行

【名義】御伽草子本の表題は「さいかき」とあるが、主人公が佐伯であるから、「さいき(さいき)」を誤つたものである事は明かである。【解説】御伽草子本の表題は「さいかき」とあるが、主人公が佐伯であるから、「さいき(さいき)」を誤つたものである事は明かである。

解決にまで到達し得たのである。これは彼が得道後、引續く忍従的修行によつても十分推測される。...



(切川白) 西行法師

相ふれた情流は、暖い人間愛を求め、その中に生きてゐた彼の佛を忍ばしめるに足る。...

日本詩人であつたと云つてもよい。西行の花と月とに對する愛着は、全く超人的なものと云つてもよい。...

【著作】(和歌) 勸修寺集のもの(千載集十八卷、新古今九十四卷、なほ只十三代電に遺く遺入されて、その對百四十二首に及ぶ。...

で、後成にその判詞を乞ひ、慈圓に請書されたので、高田有氏である。十二社歌合の一である云ふが、他の社歌多くを減して編はらない。...

提疑法の修辭の目立つこと(例へば「いかせん」「いかにぞや」等)、第四句と第五句に於ける並立句法の使用著しきこと等を掲げ得る。...

が遙に人勝を凌駕してゐると云つてよい。勿論その歌風には、「おぼろげの人のまねびなんどすき」(後鳥羽院御歌)でない非凡性が存するけれど、その精神はわが中世より近世に互り弘く民族を支配し得たもので、...

○西行法師傳海軍和歌 ○異本山家集附録西行論 藤田作太郎 ○西行法師全集附録西行の生涯 尾山嘉三郎 ○西行上人歌集新編附録系圖 年譜地名考研究書目尾山嘉三郎。...

本は異同甚しく、順序の違ひ、記事の出入等も多い。(以上小本) 【繪卷】この物語の繪卷には數種あるが、時代も古く製作もすぐれてゐるのは、土佐國屋敷と傳ふるもので、もと四巻本らしいが、今は後半を遺して第一巻が尾州徳川侯、第二巻が徳川侯の所蔵となつてゐる。...



(尾州侯所藏) 西行法師繪卷

に、この作家の技術は頗る相違ないものであつて、他の繪巻に見られぬほど感嘆が湧き、情愴が多い。この繪巻の外に、海田采女信相保の筆といふ四巻乃至五巻も世に行はれてゐるが、これ等は兼風も時代も下るものである。この海田采女のものを書いた宗達筆の繪巻もまた著名で、毛利公府所藏の四巻が一般に知られてゐる。帝國圖書館にも五巻の繪巻がある。鎌倉時代は偉人崇徳の思想も盛んで、福徳神など通行した時で、「西行物語繪巻」も亦、この趨勢の中から生まれたものとおぼしき。その後、足利朝以降は弘く行はれて、繪巻類もこの種のものが出来てゐるらしい。(以上田中)

西行物の謡曲

西行法師の和歌文はその作と傳へられてゐる。「撰集抄」を頼りとした謡曲に、「雨月」「江口」「西行傳」が「松山天狗」がある。「諸本」現行諸謡曲本。謡曲歌書、國民文庫、日本文學大系、謡曲三百五十番集(日本名著全集)等所収。「雨月」四番目(作者)金春兼朝(謡曲本作者註文二頁十番目)。「内容」西行法師(ウキ)が明神に参詣するため、住吉に来て宿を求めると、老夫婦が、雄(ウキ)は雨音を好んで軒端を弄かうといひ、互に言ひ争つて、思はず「腰が軒端を弄さそわづらふ」といふ歌の下句を傳へ、西行にこの上句をつければお宿しようといふ。西行は、「月はれ雨はたまれとにたくに」とつけた。老夫婦は喜んだ。その夜、住吉社人(ウキ)に住吉明神が乗り移つて出て、西行の袂歌に感じ、舞を舞ふといふ曲。儀式夢幻能。五流現行。「江口」三番目(作者)世阿彌(謡曲本作者註文)

西國曲

西國曲(ウキ)は、佛樂集七册(編者)雲水齋説書・向井氏雲龍・久野氏傳風訂・小山氏草合校とあれど、露川の指導の下に成つてゐる事は勿論である。「名義」凡例によれば、西國の風流といふ義である。作者不知としてその國の方言を讀み入れた句を、一句ずつ二冊の曲の初めに置いてゐる。「刊行」享保二年(諸本)西門併濟集(佛書大系外)所収「内容」露川、説書が西國十五ヶ國を廻つた俳諧行脚の集である。卷之一には伊勢より周防までの記を掲げ、發句百九、題文八篇を収め、卷之二には長門より筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後を廻遊して、再び伊勢に歸るまでの記事と掲げ、發句百四十一、題文九篇を収め、卷之三には攝津國・播磨國・美作國・備前國・備中國・備前國・備後國・周防國・長門國の連句二十、題文三三篇を収め、卷之四には筑前國・筑後國・肥前國・肥後國・豊前國・豊後國の連句十七、題文三三篇を収め、卷之五には諸邦發句と題し、東海・東山・奥羽・北越の句三百三十七を採録し、卷之六には同じく諸邦の發句三百八十二を採録し、卷之七には連句百五十五、題文九篇を収めてゐる。前代正早才の序、享保二年二月釋氏燕説の序、凡例七ヶ條、跋として享保二年五月七十一老衰杖(烏)の一文を添へて、首尾の體裁を飾つてゐる。「價值」可なりな内容を

西國立志編

西國立志編(ウキ)は、中村数字(原書)サムエル・スミス(Samuel Smith)の「自勵助道」(Self-help)数字は一名名自動詞と傍註してゐる。その題名は内容を示したものである。「刊行」明治四年七月靜岡にて刊行。同年二月、洋裝一冊の合本が複製された。活字版になつてからは、明治の前半期を通じて幾度も複製されてゐる。複製も少からず行はれ、今日種々の型の本が坊間に散見する。「由来」原書は明治元年四月、数字が倫敦を去る時、友人フーリヤンドが贈別として贈つたものである。船中、これを讀讀して感激深く思はず、我が國青年の修養調にらしめんと欲し、世事多端の際、靜岡に在つて事務の傍ら翻譯に従ひ、明治三年十月末、約十月ヶ月を費して成つた。譯の執筆大久保一翁に請り、薄金若干を得、更に藩校の職員本平謙一郎及び夫人の助力によつて世に送り出された。「内容」翻譯の底本となつたものは、西曆一八六七年版で、従つて譯書には原序二篇を譯載してゐる。木版本には往々原書第一版の序文を缺くものがある。全部が十三編に分れ、毎編若干の訓言と数多くの實話とを収めてゐる。即ち、

一 新編 和蘭人自勵助道(一) 二 新編 和蘭人自勵助道(二) 三 新編 和蘭人自勵助道(三) 四 新編 和蘭人自勵助道(四) 五 新編 和蘭人自勵助道(五) 六 新編 和蘭人自勵助道(六) 七 新編 和蘭人自勵助道(七) 八 新編 和蘭人自勵助道(八) 九 新編 和蘭人自勵助道(九) 十 新編 和蘭人自勵助道(十) 十一 新編 和蘭人自勵助道(十一) 十二 新編 和蘭人自勵助道(十二) 十三 新編 和蘭人自勵助道(十三)

細君が、里方の繼母の無心が重なり、夫に知られて離縁となつた経路を書いたものである。夫が収入の多いに任せて贅澤な生活をしたので、借金に苦しめられるやうになつたが、世間體をくづさうとはしない。その表面の華やかさを見て、貧しい細君の里方では、なまぬ仲の繼母が時々無心を申込む。多くの場合、細君は間に合せて来たが、度重なる夫の手前さうも云へず、殊に夫の不機嫌な折柄、又四十圓の無心を言ひ出されたので、夫に隠して、小間使お間に旨を含め、夜そつと自分の衣服を質屋に持ち込ませた迄はよかつたが、その歸途、お間は盗人に金を奪き取られたので、一切の秘密が夫にわかり、申罪ないとお園が井戸へ投身した事などから、細君は離縁された。そのあとで、夫は洋行中に出来てゐた女がフランスから歸つて来たのを新夫人としたと傳へられた。

【批評】里方の繼母と、夫との間に立つて苦勞する細君の境遇が哀れ深く描かれ、作者の眞摯な心持がこの作を生かしてゐる。田山花袋は「書生氣質」よりも、寧ろ本筋を可とし、より整つた價值があると云つた。短篇小説の少い道徳には珍らしい作である。(編者)

【再現象術】再現象術(Reincarnation)は、變幻的に形成される藝術の中、彫刻・繪畫等の如く、その直觀的な現はれかたが、現實的具體的な感性的形相を再生してゐるか、又はその形相が描出されてゐるとき、それ等を再現藝術と呼び、客觀描寫として吾々は理解するのであるが、しかし藝術に現はされる自然的現實は、全く自然そのものではなく又模倣でもない。我々の意

任に就かれた。同年十月二十七日、野宮にて庚申の夜(松風入夜祭)といふ題で、「翠の音に峯の松風通ふらしいづれの緒より調べそめけむ」と詠まれた。野宮には女御も共に下られたが、家集に、「伊勢の後の御くだりのたび音をおぼしめて」とある歌を、「拾遺集」では、「圓融院の御時野宮より侍りけるに母の前の書宮もともに越え侍りて」とあり、別に「新古今集」に「むすめの書宮に具して下り侍りて云々」とある。家集に「忍びて下り給へれば尼になり給ひぬと聞きて云々」とあるのは後の度であらう。長閑に住んで久しく夢内せられぬ頃、主上から御製を頂いたが、御返歌に「秋の都の外に住む身は」とあつたので、時の人が后を望む気色があると申した。女御は恥ぢて、この歌を御集から除かれたといふ(十訓抄)。

【作中】家集「野宮女御集」。群書類從卷二七一所載本と歌仙歌集本とは全く等しく、歌の数字二首で、詞書は三人稱で書かれてゐる。馬内侍との問答歌が二首あり、書院との御問答歌もあつて「新編古今集」に「御子内親王とある。集中、離遊の事が見えるが、契沖は「物にかけるは此れを始めか」と云つてゐる。なほ勅撰集に入つた歌は、拾遺四、後拾遺七、その他凡そ三十一首。

【参考】歌仙傳「本朝皇風韻藻」○大日本史七九〇歌道人物志○河社「西下」細君(心)小説「作者」坪内逍遙「發見」明治二十二年一月「國民之友」刊行同二十三年、民友社(美穂の編輯)合巻。遺書選集別冊第一巻、現代日本文學全集(坪内逍遙集)所収。

櫻を切つて火に焚き、心だけのもてなしをし... 僧はその人柄に感して名を呼ぶると、宿主は、自分は佐野源左衛門尉常世といふ者で、一族に押領せられてかくの如く零落した...

【参考】貞徳水代記中身置(源代清傳) 卷六(神鏡) 源代清傳(源代清傳)...

テの人物が、「鉢木」のは忠誠無二のものであるが、「藤原」は非道な悪人であり、一曲の主眼を「鉢木」では零落した武士の厚情と意氣とに置いてゐるが、「藤原」では悪人の醜態を興味の中心として居り、舞臺の轉換も、「鉢木」では前後は佐野の住居、後段は鎌倉の執權屋敷と、前後を劇然と區別してゐるが、藤原では、一段のうちに不明瞭な間に場所も時をも動いてゐるのである...

歿とあるが、確否を知らない。清流の「貞徳水代記」の小傳に辭世の句が出てゐて、その傍に「成三月十二日」とある。享年は水代記家譜共に七十三とあるが未詳。辭世は、夜の明に花にひらくや浄土門(問屋)七(神鏡)...

【参考】貞徳水代記中身置(源代清傳) 卷六(神鏡) 源代清傳(源代清傳)...

そんげく... せんげく... せんげく... せんげく... せんげく... せんげく... せんげく... せんげく... せんげく... せんげく...

山伏 文

【参考】四香日(作者)不明、徳本作者註文。但し、中巻に「藤原」の名が見える。(名)藤水とも書く。(内容)最明寺實徳(？)は政道を正さんために、諸國一見の修行者を装うて西國に下る途次、攝津國葛城で一夜の宿を求めて、先地頭藤左衛門の遺子月若子方が、叔父藤原某に所領を奪はれて、家人(？)に襲はれてゐるのを知り、藤原(藤原)が舟遊に出てゐる所へ行つて、所領を月若子方に返させた。そして藤原は死罪にも行はるべき處であつたが、最明寺は慈悲を以てこれを宥し、且つこの領地をそのまゝ知付せしめたといふ。

【参考】諸曲評 大和田建樹(諸曲大観) 佐藤大郎(佐藤) 在民部卿家歌合(在民部卿家歌合)...

【参考】貞徳水代記中身置(源代清傳) 卷六(神鏡) 源代清傳(源代清傳)...

【参考】貞徳水代記中身置(源代清傳) 卷六(神鏡) 源代清傳(源代清傳)...

後者は作者を悲心僧都としてゐるが、ずつと後世のものである。佛家の作つたものは「朝野群載」や、「本朝文粹」等に載つてゐる。文學方面に關する祭文に有名な文人を祭る祭文もあれば、歌合の祭文もある。佛家で主として眞言・天台で用ひ、眞言の祭文は重役となつてゐる。江戸の祭文と稱するものは、これ等祭文が歌合化されたものであつて、興味本位の内容のもの祭文と稱する山伏立ちの器樂者が門附して唱つた。系統から云へば神道系統の祭文である。祭文は初め讀むと稱し、後讀ると云ふやうになつたが、つまり内容の上にも曲節の上にも變化があつたことを意味する。伴泰盛も初めは眞言法皇具を用ひてゐたのであるが、後に三味線に合せるに至つた。この事も祭文の内容、曲節の變化を助長せしめたことであらう。が、これ等の事柄は元祿時代をすつと隔てての事であつて、内容變化に就いては元祿の頃既にあつたのである。祭祭文をよぶに色祭文、心中祭文の語を以てするが、祭祭文の内容の固定化が來た事を意味するのである。享保年代には八祭文(歌祭文)といつて最も流行したものがあつた。色祭文の名にふさはしい内容のものであつた。この歌祭文は諸地に行はれて大阪祭文・生玉祭文・江戸祭文・壬生祭文・上州祭文等の種類が出来、それぞれ特徴があつたやうで、江戸祭文は白こゝろで、力身を第一としてゐたといふ。ちよんがり節・ちよんがり節・法皇祭文などは、やはりこれ等祭祭文の餘流である。

【参考】諸國奇談と角書 五册(著者)橋本春樹(角書) 刊行 寛政七年より十年に至る。【解説】諸國奇談と角書...

【参考】貞徳水代記中身置(源代清傳) 卷六(神鏡) 源代清傳(源代清傳)...

【参考】貞徳水代記中身置(源代清傳) 卷六(神鏡) 源代清傳(源代清傳)...

てやり、友人への消息に自ら落梅舎の来去と書き始めた。とにかく落梅舎に於ける芭蕉の生活は、極めて清閑であった。凡そ夫婦・芭蕉・去來、他一人の者凡て五人が一つ敷屋に入つて寝たれど眠れず、夜半過ぎから起きて、菓子や食つて明方まで話し明かすなどのことがあり、芭蕉が夢に社園を見て泣いた事なども書かれてゐる。白氏文集・本朝一人一首・世物語・源氏物語・土佐日記・松葉集を座右に置き、詩の五重の器に櫻子の菓子を感じ、名酒一盃、盃を添へてある状態、芭蕉の清閑な生活が如實に現はれてゐる。芭蕉の俳文としては簡素な方ではあるが、寂寥を樂しむ氣味を直叙した所に特色を持つ日記である。

坂上郎女(いさか)の歌人【本名】大伴坂上郎女。坂上の名はその住居してゐた地名から出たのであらう。【生没】不詳。奈良朝の中期に、その青年期以後を越つた。郎女の作によれば、最も古いものは「萬葉集」巻三、天平五年冬十一月大伴氏氏神を祭る歌で、最も新しきは同巻十九の天平勝興二年、彼女の第二女大伴家持の妻大伴坂上大嬢に贈つた長歌反歌である。この間、満十七七年間と云ふべき年に近かつたことが察せられる。【家系】大伴安原(佐保大前)の娘、坂上の妹である。家持には叔母に當り、坂上大嬢の母である。【関係】「萬葉集」巻四の「千鳥鳴く」の歌の左註に、「右、郎女者、佐保大前守之女也。初嫁一品橘皇子、被、無、傳、而皇子薨之後、藤原麻呂大夫時、郎女、馬」とある。即ち最初藤原麻呂大夫に嫁し、藤原麻呂に嫁したのである。次に又藤原麻呂の死後、異母兄

藤原宿禰に嫁して、三女を生んだ。【作品】すべて萬葉集に出でゐる。巻三に、長歌二首、短歌四首、巻四に長歌二首、短歌三十六首、短歌一首、巻六に長歌一首、短歌十首、巻八に短歌二十首、巻十七に短歌四首、巻十八に短歌二首、巻十九に長歌一首、短歌二首、(附註は、年代不明作者別萬葉集、藤原久年、藤原吉長による。他作者の数字はこれと相違してゐる)。計長歌六首、短歌一首、短歌七十七首。作品の多い事、萬葉女流歌人中第一位を占めてゐるが、また巻三、四、六、八、十七以下の諸巻の編者であつた家持と關係の深い位置に在つたためである。【批評】彼女は、萬葉の女流歌人中第一の作家であるのみならず、男女を通じての萬葉の代表作家の一人と言へる。當時の作家、殊に女性に、多くはその情熱や心の純真さで價値ある作品を作り上げてゐるに對し、勝れた技巧を以て作歌し、本格的歌人たることを示してゐる。即ち、その歌體が長歌、短歌、短歌の三種に亘つてゐるのは、女では坂上郎女のみであつて、歌才の豊さが窺はれる。その歌材の廣汎に互れる事も當時の女流に全く類がなく、戀愛歌の外に新羅の尼理羅を形ふ有名な長歌(巻三)、娘大嬢に贈れる歌の母の愛の溢れた歌(巻四十九)、聖武帝の御璽に思ひて作つた短歌(巻五)等よく種々の歌材、種々の歌體を自由に詠んでゐる。これは、殊に理羅の歌など、彼女の心が歌くあらゆるものに向つて開いてゐたと云ふ一證であつて、歌風の點のみならず、人としての彼女を感ふたにも良い資料である。(桑本)

酒樂歌(さか)の歌人【本名】藤原天皇の作家、殊に女性に、多くはその情熱や心の純真さで價値ある作品を作り上げてゐるに對し、勝れた技巧を以て作歌し、本格的歌人たることを示してゐる。即ち、その歌體が長歌、短歌、短歌の三種に亘つてゐるのは、女では坂上郎女のみであつて、歌才の豊さが窺はれる。その歌材の廣汎に互れる事も當時の女流に全く類がなく、戀愛歌の外に新羅の尼理羅を形ふ有名な長歌(巻三)、娘大嬢に贈れる歌の母の愛の溢れた歌(巻四十九)、聖武帝の御璽に思ひて作つた短歌(巻五)等よく種々の歌材、種々の歌體を自由に詠んでゐる。これは、殊に理羅の歌など、彼女の心が歌くあらゆるものに向つて開いてゐたと云ふ一證であつて、歌風の點のみならず、人としての彼女を感ふたにも良い資料である。(桑本)

角鹿より還り上り給うた時、御母神功皇后の御酒を飲じて歌ひ給つた御歌、又武内宿禰が御子に代つて答へ奉つた歌であるから、この名稱を得た。【出典】「古事記」仲哀天皇の條に二首出でゐる。【解説】酒樂歌で教習した大歌の一で、五言七言を交互に重ねた長歌で、末句が五三七と云ふ形式で終り、奇數句より成る形式である。又終末句に「ササ」と云ふ響子詞を持つてゐるのが特徴である。この御酒は、わが御酒と云ふくしの神、常世にいます。分たす。少名御酒の神、賜すくはし。【備考】「日本書紀」にも同歌が二首出でゐる。少異があるので、歌の形式を考へる上に參考となる。【参考】「酒樂歌」には「十六日酒樂歌二」として、同歌二首を出してゐる。その歌詞は「日本書紀」の歌と殆ど全く同一である。酒樂歌は酒樂歌の誤寫であらう。それは平安朝時代正月十六日酒樂歌の際に奏せられた大歌と思はれる。又同歌の如きも、酒樂歌の一種かと思はれる。【備考】酒樂歌の酒樂歌も酒樂歌の一であらう。大體祭の祝詞にも「酒樂歌」と云ふ句が見える。同種の歌を云ふのであらう。(桑本)

相模川(さか)の歌人【本名】御徳皇子。二巻【作者】未詳【題】山崎美成の「歌曲」には、香外舞曲の一として掲げてあるが、幸若家元にはその傳は無い。【成立】室町末、或は徳川初世(寛永六年)頃。【原本】古本は山本長兵衛。近古小説新編「源氏物語」所収。寫本では寛永六年の奥書もある。同十六年の奥書もある。或は奈良御本等。【関係】相模川の橋供養に關する傳説から編られて作つたもの。【備考】「保元平治」の傳説が主な素材となつたかと思はれる。諸曲「相模川」一名、橋供養と同村であるが、本書の方が複雑である。判官島原と重忠の賢人振りが強調せられてゐる。【解説】「相模川」の天下平定後、鎌倉に住んでゐた「やうはん」といふ聖僧は相模川の橋の崩壊を慨き、關東八ヶ國に勧進して修理の志を遂げ、盛んな供養を營んだ。聖僧は若宮の別宮、今宮の僧正、將軍も請せられて大小名を率ゐて参列したが、蓋例によつて定まつた先陣秩父の重忠を妬んだ源原景時、伏木隱の貫石、山崎の善功を誘ひ、子息源太の勧めに任せて謀叛を企てた。この由相模川に聞え、重忠が強ひて君に説いて先陣を譲つたため改めて景時がこれを勧めたが、供養半ばに八幡の扉根から三つの怪光飛來して川に入ると見れば、河水は忽ち五色に變じて流し、流れて来た三箇の鼓の無い提子に龍と化し、猛火と燃えて消失せ、續いて十三の天童、十六の若武者、十丈ばかりの大蛇等が登る。頭はれては姿

と一括總稱するが、その中にも光悅別稱の刊行した光悅本と角倉素庵(別稱)が出版した嵯峨本との區別ある事を論じたもの。その内容は、(一)諸書に散見せる嵯峨本の記事を批判し、(二)嵯峨本の定義を立て、(三)著者が蒐集又は信託した嵯峨本に就いての調査を述べ、(四)嵯峨本の特徴を明かにし、(五)光悅本と嵯峨本の區別を論じ、(六)出版の先後、版式等について、(七)光悅本と嵯峨本の優劣、(八)類似本について記し、且つ巻末に寫眞玻璃版四十葉を附して光悅・素庵の筆蹟、版式を明かにしてゐる。従来嵯峨本なる名稱はありながら、明確な概念を與へられてゐなかつたが、この書によつて、初めて科學的研究がなされた。【備考】本書は用紙に、光悅本及び嵯峨本に使用してゐる雲母摺、又は色摺り用紙を模造したものを用ひ、また光悅の意匠に成つた雲母摺を模寫して、薄墨で用紙中に摺り込んでゐる。

相模川(さか)の歌人【本名】御徳皇子。二巻【作者】未詳【題】山崎美成の「歌曲」には、香外舞曲の一として掲げてあるが、幸若家元にはその傳は無い。【成立】室町末、或は徳川初世(寛永六年)頃。【原本】古本は山本長兵衛。近古小説新編「源氏物語」所収。寫本では寛永六年の奥書もある。同十六年の奥書もある。或は奈良御本等。【関係】相模川の橋供養に關する傳説から編られて作つたもの。【備考】「保元平治」の傳説が主な素材となつたかと思はれる。諸曲「相模川」一名、橋供養と同村であるが、本書の方が複雑である。判官島原と重忠の賢人振りが強調せられてゐる。【解説】「相模川」の天下平定後、鎌倉に住んでゐた「やうはん」といふ聖僧は相模川の橋の崩壊を慨き、關東八ヶ國に勧進して修理の志を遂げ、盛んな供養を營んだ。聖僧は若宮の別宮、今宮の僧正、將軍も請せられて大小名を率ゐて参列したが、蓋例によつて定まつた先陣秩父の重忠を妬んだ源原景時、伏木隱の貫石、山崎の善功を誘ひ、子息源太の勧めに任せて謀叛を企てた。この由相模川に聞え、重忠が強ひて君に説いて先陣を譲つたため改めて景時がこれを勧めたが、供養半ばに八幡の扉根から三つの怪光飛來して川に入ると見れば、河水は忽ち五色に變じて流し、流れて来た三箇の鼓の無い提子に龍と化し、猛火と燃えて消失せ、續いて十三の天童、十六の若武者、十丈ばかりの大蛇等が登る。頭はれては姿

の歌の詞書がある。若し「後拾遺集」にいふ入道一品宮が相模の御仕へした方であるとすれば、「後拾遺集」奏覽前の水承四年奏去の條子内親王が正しく、「後拾遺集」奏覽より凡そ二十年後の長治二年奏去の條子内親王は誤りである。大江公實が相模守となつた時、共に任國に下り、彼に離別した(後拾遺集)十六國詞による。家集によれば相模在國箱根に詣でて百首の歌を奉納してゐる。「後拾遺集」三に依れば公實が大外記を所望した時、命議の諸卿は異議なく許さうとしたが、小野宮右大臣は反對して、彼は相模を撫して秀歌を案じてゐるから定めし公務を怠るであらうといつたとある。公實の妻である間に、公任の子定頼と通じ、定頼の家を引きとられたが、再び離別した事は「後拾遺集」卷十一に、「公實朝臣に相具して侍りけるに中納言定頼認びて書づれば」とあり、同十三に「中納言定頼今は更にこじといひて歸りて昔も侍らざりければ」とあり、なほ時代は不明であるが、大貳資通とも關係のあつたことは「金葉集」卷九に「大貳資通認びても申しけるを」とあるのもわかる。以上によると、彼女は伊勢や和泉式部の如く相當自由な戀愛生活をなしてゐたやうである。【作目】家集に「相模集」(別稱)があり、勅撰集に入る歌は後拾遺集四十、金葉四、詞花四、千載五、新古今十、新勅撰十八、以下凡そ二十七首、合計概ね百八首、なほ私撰集に入るものは女々集一首、後葉集三首、續詞花集五首である。【批評】彼女は、充實した張り切れるやうな生活意識をもちながら、それを統一しようとはせず、現實生活のままに見え、歌詠みであることを自覺せず、情

熱の単純な發露をそのまゝに投げ出してゐるのが彼女の歌である。【参考】「皇草紙」三〇中古歌仙傳〇百人一首一夕話(西二)

を隠し、雲中には北山から赤旗の四五百騎を率ひ、雲中から白旗の四五百騎を率ひ、同時に朝霧降馬して人心地無く、重忠の腰に挿く藤生して怪事の仔細を問ふと、景時は答へ得ず湯殿の暖火を貰ひ、重忠が三個の提子を清く盛、二位尼の寶篋、天皇を安堵せ、若武者を救護、大蛇を籠籠守歌であると説き、赤旗は平家、白旗は御倉守歌であると説き、弟の怨の所因を解し得ぬ朝霧は、重忠に命じて義經の寶を呼び戻すこと、重忠の景時を鎌倉中の爲めには第六天の魔王だと語つて雲に紛れる。續いて伊勢・熊井・龜井・片岡・鈴木の面々、又奥州の泉の三郎等も形を現はして想を述べ、最後に神代は源原の滅亡を三日以内と豫言した。朝霧は即座に景時父子三人の誅殺を命じた。驚いた景時は夜に紛れて落ち行く途次、宇都宮備三郎朝霧の境の前を乗打して射殺され、源太兄弟は勝となり、由井ヶ濱で斬られた。朝霧は、勳賞に伊豫國北部を賜はり、所知入した。

或は作者自ら書き集めたものであらう。【備考】「保元平治」の傳説が主な素材となつたかと思はれる。諸曲「相模川」一名、橋供養と同村であるが、本書の方が複雑である。判官島原と重忠の賢人振りが強調せられてゐる。【解説】「相模川」の天下平定後、鎌倉に住んでゐた「やうはん」といふ聖僧は相模川の橋の崩壊を慨き、關東八ヶ國に勧進して修理の志を遂げ、盛んな供養を營んだ。聖僧は若宮の別宮、今宮の僧正、將軍も請せられて大小名を率ゐて参列したが、蓋例によつて定まつた先陣秩父の重忠を妬んだ源原景時、伏木隱の貫石、山崎の善功を誘ひ、子息源太の勧めに任せて謀叛を企てた。この由相模川に聞え、重忠が強ひて君に説いて先陣を譲つたため改めて景時がこれを勧めたが、供養半ばに八幡の扉根から三つの怪光飛來して川に入ると見れば、河水は忽ち五色に變じて流し、流れて来た三箇の鼓の無い提子に龍と化し、猛火と燃えて消失せ、續いて十三の天童、十六の若武者、十丈ばかりの大蛇等が登る。頭はれては姿

【備考】「保元平治」の傳説が主な素材となつたかと思はれる。諸曲「相模川」一名、橋供養と同村であるが、本書の方が複雑である。判官島原と重忠の賢人振りが強調せられてゐる。【解説】「相模川」の天下平定後、鎌倉に住んでゐた「やうはん」といふ聖僧は相模川の橋の崩壊を慨き、關東八ヶ國に勧進して修理の志を遂げ、盛んな供養を營んだ。聖僧は若宮の別宮、今宮の僧正、將軍も請せられて大小名を率ゐて参列したが、蓋例によつて定まつた先陣秩父の重忠を妬んだ源原景時、伏木隱の貫石、山崎の善功を誘ひ、子息源太の勧めに任せて謀叛を企てた。この由相模川に聞え、重忠が強ひて君に説いて先陣を譲つたため改めて景時がこれを勧めたが、供養半ばに八幡の扉根から三つの怪光飛來して川に入ると見れば、河水は忽ち五色に變じて流し、流れて来た三箇の鼓の無い提子に龍と化し、猛火と燃えて消失せ、續いて十三の天童、十六の若武者、十丈ばかりの大蛇等が登る。頭はれては姿

理解されないものが随分多い。ありのまゝに紅の雨、子を頼ふ、幸、富、實の山、すべら

【櫻桃物語】「物語」一巻【作者】未詳【成立】室町中期か。古物語類字抄には、文明頃かといひ、又序に「秋の夜の長物語」

【櫻桃】紀中將康則は中納言康直の子で、幼名を松壽君といつた。幼にして才學に秀で、又眉目の美しさも並ぶ人がなかつた。父母は

【佐川藤太】「ひらかな盛衰記」を見よ。【本名】未詳【別名】佐川藤太、佐藤太等とも記す【生没】未詳【関係】安永以後、大阪の

【福慶】「生没」未詳【関係】氏は田邊、姓は史、維時天皇の條にある田邊史伯孫の子孫かと言

【防人歌】「防人」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

あつたので、喜んで律師の坊に行く、松壽君は父中納言の病氣、京に歸つた後であつた。

【佐川藤太】「ひらかな盛衰記」を見よ。【本名】未詳【別名】佐川藤太、佐藤太等とも記す【生没】未詳【関係】安永以後、大阪の

【福慶】「生没」未詳【関係】氏は田邊、姓は史、維時天皇の條にある田邊史伯孫の子孫かと言

【防人歌】「防人」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【山來】「山來」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【防人歌】「防人」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【山來】「山來」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【防人歌】「防人」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【山來】「山來」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【防人歌】「防人」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【山來】「山來」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【防人歌】「防人」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【山來】「山來」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【防人歌】「防人」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【山來】「山來」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【防人歌】「防人」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【山來】「山來」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【防人歌】「防人」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

濱村に細帽子を冠り、傘をさして美しい娘に化した白鷺の精に、瀬川菊之丞が現はれて、身をほかなむ振から一轉して、地獄に墜ちて修羅の責苦に遭ふ振に終る。瀬川菊之丞・市村謙誠所演、後「傾城」有義などと組合せて變換物の一であつて、その舞臺轉換法として廻り舞臺を用ひたのが江戸での囃子と傳へられ、そのため、一層この曲を名高くしてゐる。明治二十五年三月、東京歌舞伎座で、九代市川團十郎再演の折には、前曲として「傾城」が附加された。地は常陸津、作詞は福地操、作曲は六代岸澤式、振付は先代藤間勘



八八八八 中村 愛

左衛門であつた。本曲に據つて後年左の二曲が出来た。【世田代四季談】三大字【通稱】三津五郎の鶯【初演】文化十年三月七日初日、江戸中村座【其後】伊達屋【第二番】日大切、作詞二代瀬川如草、曲師長根と常陸津節との掛合、立明富士田子藏、太夫二代常陸津小文字太夫、作曲長根は并屋藤五郎、常陸津節は三代岸澤式、振付市山七十郎【備考】曲・振とも版式【内容】前半は菊之丞の鶯の改作、後半は女方の花柳節。坂東三津五郎十二ヶ月の所

作事の中の「十一月、雪の鶯」である。【世田代四季談】三大字【通稱】三津五郎の鶯【初演】文化十年三月七日初日、江戸中村座【其後】伊達屋【第二番】日大切、作詞二代瀬川如草、曲師長根と常陸津節との掛合、立明富士田子藏、太夫二代常陸津小文字太夫、作曲長根は并屋藤五郎、常陸津節は三代岸澤式、振付市山七十郎【備考】曲・振とも版式【内容】前半は菊之丞の鶯の改作、後半は女方の花柳節。坂東三津五郎十二ヶ月の所

【防人歌】「防人」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【山來】「山來」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【防人歌】「防人」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【山來】「山來」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

【防人歌】「防人」は「唐六典」の邊防に於ては、略と東國地方の人民に限られたり。國人中最も勇猛で支那朝鮮に對し

櫻姫全傳 櫻草紙 (さくらび) 讀本 五冊 [作者] 山東京傳 [書工] 歌川豊國 [名稱] 外題には「八櫻ひめ」とある。略稱して「櫻草紙」とも云つてゐる。櫻姫の傳奇であるから、櫻の異名に因んで「櫻草紙」と名づけたと例言に見える。【刊行】文化二年、江戸鶴屋喜右衛門版(諸本)天保十二年に再増補。輸入文庫(輸入文庫刊行社)・山東京傳集(近代日本文学大系)讀本集(日本名著全集等)に所載。【題材】作者未詳の書を得て補綴したと例言に云つてゐるが、假託の言で、古くから歌舞伎浄瑠璃に傳へられた清支櫻姫の説話に據つたものである。作者は引用書目その材料としたものを擧げてゐるが、その外に、これが趣向をなすに當つては、馬琴の「小夜中山石言遺響(前題)に暗示を得、支那小説「金瓶梅」、李笠翁の「風華傳奇」に材を取つてゐる。

【櫻草】後鳥羽院の頃、丹波桑田の長者野原治は、妻野分に子を愛へ、白拍子玉琴を妾とした。玉琴が懐妊するや野分は嫉妬に堪へず、密かに計つて玉琴を殺し、死骸を大江山の谷川に沈めた。その後、野分も身重くなつて櫻姫を産んだ。櫻姫十六歳の夜、都に遊んで播磨の郡土の子伴宗雄を見染め夫婦の縁が定まる。豫て腹に心をかけてゐた信田平太夫が、盜賊堀尾丸を引入れて義治を殺したので、野分と櫻姫は別れ、義治を殺した。櫻姫は病に作れて、鳥部野の墓所に目を眩る。墓守は玉琴の死體から生れて、野原家の舊邸で今は回廊修行者となつてゐる彌陀二郎に救はれて清水寺に僧となり、一度櫻姫を見てから墮落してしまつた清水の成れの果であつた。この時櫻姫は蘇生して、清支はこれ

を挑んだが、偶々來合せた彌陀二郎に殺される。一方野分は堀尾丸の手に落ち、先妻を殺さしめてその妻となるが、互の悪性が見られる。堀尾丸は養父家の舊邸田島遺跡系に討たれる。さて伴宗雄は舊邸と共に信田平太夫を討つて養父家を再興し、櫻と結婚するに至るが、櫻が妖氣に襲はれて悶死する。櫻は小蛇と化し、常照阿闍梨の法力を頼むと、櫻は小蛇と化し、骨に變じた。玉琴の怨靈が野分を苦しめるので、暫し假の姿を現はさせたのであつた。やがて野分は雷火に打たれて死し、宗雄は刺殺して僧となつた。

【構想】櫻草清支の事は多くの類作もあつて、よく聞えてゐるが、これは歌舞伎で最も知られてゐる清水寺と庵室の場、多くの材料を補綴したもので、當時の動機主義の見解から因果物語を構成しようとして、親子の因縁話に附會したのである。櫻と清支とが櫻がはりの兄弟であつて戀に悩むのも、野分が生きたらへて苦しむのも、玉琴の祟であつた。作者は櫻野分を中心としたものである。しかも、櫻は歌舞伎の影を隠して、支那小説の面影を移さうとしてゐる。【史的地位】文壇に諷刺的對立してゐる支那傳と原案との讀本には互に影響する事が多かつた。本篇は「石言遺響」と相對するもので、そして文化四年に、馬琴が「雲母問雨夜月(前題)を出したのにはこれと對つたものと云はれる。また馬琴は文化七年に「櫻草清支(前題)を著し、ふ合巻を出したが、翌年京傳は「櫻草紙」の筋をその儘に合巻にした。櫻草清支(前題)を著し、ふ合巻を出した。なほ文化五年の「清水清支契約書」といふ芝居は、この作を狂言に仕組んだものであ

【價値】支那風を装はうとして、やゝ筋の通らぬところはあつたが、大體に細心の工夫があつて首尾貫き、説話の組織配合も宜しきを得てゐる。京傳の讀本の才能を代表したものと見て注目されるものである。【註】(参考)讀本集解説(山東京傳)【名稱】櫻草が左大稱であつたので、官と名との一字を取つて命名したものである。一に「櫻草記」とも稱した。糸東とは櫻草の編を取つて名づけたものである。【諸本】櫻草前編書目録には左經記十一本とある。櫻草本十五冊は、舊松田藩久松定謙の獻納本に據つて、九條家藏本を補綴したものである。大正四年七月刊行「史料通覽」所載。【内容】本記は風に散れし、史料通覽本は、長和五年から長元八年までの十五年間の記事を載せ、別に類案雜例一卷を添へ、長元二年より同九年に至る四事記録してある。これは恐らく後人が本書の散佚前に抄出して置いたものの一節であらう。この本は櫻草本十五冊を底本として、それに改元部題「櫻草本」谷森家藏本等から増補したものである。なほ巻末に脱漏追加として、長和六年、寛仁五年、治安六年、六七年の跋註が附記されてゐる。【價値】櫻草が要職に在つて機軸に與つてゐる關係上、本書が前後中間に殘缺する所が多かつても、當時の事情を知るに足る正確な史料で、「小右記」(別題)と参照して互に不足を補ふことが出来る有益な史料である。(五村)

【酒上熱】狂歌(姓名)鳥田友直。字は子鶴。通稱左内。【姓名】五段、俊。酒上酒と改む。【生没】享保十年生れ、天明四年、中井積徳の序の序、同三年、中井積徳の序の序がある。

【酒上熱】「櫻草清支」に見よ。

【瑣語】「櫻草」二巻 [著者] 五井純徳。蘭洲、又河鹿と號した。大阪の儒者。【刊行】明和四年【解説】漢文隨筆で、博く和漢の書史涉獵の際、會心の事項を抄記して、自家の所感を加へたもの。經義・史話・語源・詩文話等に富む。上巻に天地之中以下二百二條、下巻に徳王賢以下九十七條を収めてゐる。我が國の武將碩儒等知名の人に係る評論も少くない。天明四年、中井積徳の序の序、同三年、中井積徳の序の序がある。

【成立】室町期か安土・慶長期か。刊本は後のもので、多くも室町期。【諸本】「さくらものさうし」と題する古寫本二巻が東京帝國圖書館にあつたが大震災で焼失。刊本は「狭衣」と題して明暦三年板の二巻本(寛文五年板を再版)があるが、調音人名等を異にし、祖武天皇を欽明天皇、狭衣の父大臣を内大臣と改し、兵衛大夫と見え、一同出家の事は無く、代りに内大臣は本地貴とせし、又内大臣がよしかたの大將の女を狭衣に配せようとするなどのことがあつた。「さくらもの記」と題する一巻の京都帝國圖書館藏本は、この刊本の系統の寫本。【櫻草】昔武天皇の御代、大臣の子、狭衣中將は二十一歳の時内裏からの歸途、清水寺の僧が二條西洞院神納言の女、飛鳥井の娘の大紫に參籠したのを引さうとするのに出逢ひ、これを救つたのを縁に契を結んだが、娘は狭衣中將とは知らないで懐胎した。時に中將が筑紫の太宰府を歸り、その代官として乳母子の兵衛大夫を下すことに定めたが、妻を娶つて同伴せんとする大夫に、飛鳥井の娘君を世話する者があり、娘と狭衣中將との交渉を知らぬ父母も許したので出逢ひとなつた。豫て決するところあつた娘は周防の室任の沖で投身した。偶々その兄、筑前安樂寺の別當が上洛の途上にあつてこれを救ひ、兄妹の名譽をし、共に都に歸り、父の許に至つて事の次第を語つたが、中納言夫妻は却つて疑つて親子の縁を絶つと怒り別當を追拂つたので、兄妹は洛西當野に假住する事となつた。一方、中將は失せぬ娘を怠るために、かねたかといふ隨身一人を連れて、諸國行脚をしてゐたが、別當も亦中將の行方を捜して旅すること

五年、空しく立歸るより外はなかつた。娘君の生んだ若君は五歳になつた。別當は更に奈良の大佛に一日參籠し、肝膽を砕いて祈願を勧めると、中將が來合せ、互に哀れ折觸を感ぜ、若君を養はれた。中將は泣く泣く、常磐に行き、若君を連れてその墓に詣ると、別當の祈願によつて娘は蘇生し、中將からかねたかを便に始終告げたので、父大臣は倉皇として當野に來り、一同めでたく歸落した。娘は北政所と呼ばれ、別當は天台座主となつた。一旦死して黒髪を身に添ふべきではなかつた。若君が落飾したので、新大臣も出家し、いと娘君が落飾したので、新大臣も出家し、兩親も世を捨て、皆小倉山にまします先帝に仕へて、往生の素願を遂げた。【解説】平安時代の狭衣物語(前題)の構想中の一節、飛鳥井娘君と狭衣中將に關する情話を主題として一層近代古時代化した作。中將の吹笛、娘君の擧げの擧、入水等原作の儘の點もあるが、原作では飛鳥井娘は女子なのを男子としたり、且つ狭衣の代りにその若君が受禪したりなどする改題もあり、人名も父堀河大臣、仁和寺の威儀師、式部大輔道成等がそれ、改められて居り、更に飛鳥井の再世、中將一家の別當等に至つては著しい近古色を示してゐる。刊本は本地物的色彩までも加へ、明かに室町期の作たる息はしめる。

【狭衣下紐】「下紐」とも「狭衣抄」とも呼ばれる。【巻數】四卷四冊。四卷二冊又は四卷一冊。寫本は多く二冊又は一冊となつてゐる。承應三年刊本に添附されてゐるのは、一冊又は四冊となつてゐる。【成立】天正十八年初冬に書寫の功を終つたと沙彌半醒(前巴)の署名がある。なほ下巻の終りに天正十九年三月九日、臨江書法眼眼巴とある。【内容】巻頭に序があり、次に狭衣系圖といふものが載せてある。これは關原帝から後冷泉帝に至る十代の御系圖と、關原中納言の系圖とである。この系圖には、狭衣大將は兼通の子、作者は大抵三位であると考へてゐる。成立時代は確かではないが、「源氏物語」よりも四十年ばかりおくれであると云つてゐる。註釋は重要な語句をぬき出して、これに解釋を加へたものである。刊本には巻四の終りに、狭衣系圖を附してゐるが、これは三條西實隆の作である。【價値】本書は「狭衣」の註として最も古いものである。序の一節に、「一條關原系圖などのあそび給はぬより、講釋など絶えたるべし」と云つてゐるやうに、細巴の時代に註釋は全く無かつたらしい。本書は註として詳細でもなく、たしかでもないが、最初のものとして歴史的價値を有する。(徳田)

【さくらもの記】「狭衣」を見よ。

【狭衣物語】「狭衣」を見よ。

【大紫】大紫三位(河津)・藤子内親王(河津)の二説がある。【名稱】巻一の「色々に重ねては着し人知れず思ひ初めては夜半の狭衣」の歌から出た。「和歌色葉集」や「八雲御抄」には、「狭衣大將」とある。【成立】藤岡博士は水永・天喜の頃、津田左右吉博士は白河院の頃としてゐる。【諸本】現在の古寫本中最も注意すべきものは、深川淳一氏藏の舊西本願寺藏の一本で、鎌倉初期の書寫と思はれ、流布本と對校して著しい異同がある。但し巻四は缺けてゐる。次に松浦伯家藏の一

本は、四卷全部あるが、巻三までは鎌倉中期頃の書寫、巻四はそれより少し後のものであらう。京都帝國大學内閣圖書館には注意すべきもの各數點あり、内閣文庫・神宮文庫・東京帝國大學研究室にそれ、一點あるが、何れも室町末より徳川期にかけてのものである。その他、大島雅太郎氏藏の一本、高野博士藏の零本等、いずれも注意すべきものである。古活字本は、元和のものと思ふものとあつて、四巻をそれ、上下に分けて八冊、承應三年の輸入刊本は、本文は古活字本を襲つたものであるが、巻一・二を上下に、巻三・四を上下に分けて十冊。外に下紐・系圖・日録等添へて全部で十六冊。明治以後、國文大觀園文藝書・有朋堂文庫・日本文学大系等に收められたが、本文は、いずれも承應の刊本を踏襲したものである。この物語の本文の原形が如何なる形であつたかは分らない。清水清臣の書入本によれば、この物語の古寫本で、發端の異つたものがあつたといふ。即ち「この頃堀河大臣と聞えて開白し給ふ」といふのが、發端になつてゐて、現在の諸本の「少年の春云々」の部分は、後に入つたとの事である。

【櫻草】「巻一之上」春のくれがた、狭衣は山吹の枝を折つて源氏宮の所へ持つて行く。狭衣は從妹に當る源氏宮に對して、苦しい戀に悩んでゐるが、戀を打明けた場合の源氏宮の思はく、兩親の驚き、世の風評、この三つを御しようとして聞きたる日を記してゐる(且つて、前書宮、狭衣の母、洞院の上坊門の上の三人の北の方を住まはせてゐた。狭衣は當

せらるべき記載である。(田中八二) 笹色猪口履手(ささきいろ) 草雙紙 合巻 六冊分二冊 前巻後巻に分つ【作者】 御亭猪彦【角書】紅粉屋小萬【書工】前巻 初代歌川豊國、後巻 二代目豊國(前巻)【刊行】文政九年西村板、但し前巻は七年十月、後巻は八年九月脱稿。【名義】本題の笹色猪口は紅粉の縁でいひ、履手は厚紙である。大御師普賢の縁でいつてゐる。【諸本】種彦短歌傑作集(續帝國文庫)に本文のみを収む。【題詞】近松作「大御師普賢」及び並木五郎作「五大刀懸鐘(各別項)による。

味をいふ。小萬、越庵が書いた三味線の劇の歌を箱に愛想つかしをする。(草名屋別巻)意春が見染めた女を悪手代右衛門が手びきして逢はせる。女はまだ主人に對面せぬ源兵衛の女房お玉であつたが、源兵衛は近頃の主人の態度を意見しようとして、わざと右衛門の指門に乗せさせたのであつた。源兵衛、お玉と共に諷言する。越庵は源兵衛に秘薬を飲ませて假死状態とし、小萬の遺物を掛けたまゝ、小萬を寢違で送る分にして、川の中に投込ませようとする。(松葉谷の田圃)源五兵衛から貰つた小袖を捨て家に歸り行く朝助を、三兵衛が源五兵衛と見違へて斬る。布太夫通りかゝつて介抱する。朝助の身の上を頼んで死ぬ。朝助はもと布太夫に仕へた足輕であつた。(田古江川の邊)源五兵衛、小萬を殺さうとして智恵を要し、附添ひの源五兵衛等五人を殺し、ゆくりなく源兵衛を助ける。その源兵衛から小萬の心づかひを聞く。三兵衛に身を任せし風情にしたのは、色紙を他に預けた一札を奪ふため、三味線の調をつきつけたのは、越庵の筆蹟とあの扇の筆蹟と同じであるのを見せるためだとのこと。なほその一札によつて色紙が意春の手許にあることが知られる。(意春の家)三の座敷、意春、女房お三とお玉の話をしてゐるところへ、おかやが葛籠を持って奉公の目見えに来る。(同座敷)三兵衛が意春に色紙を返せといふ。一度は越庵の秘薬で意識を失つた意春も今は正氣に復した事として、それに應じない。一札を出すか金を出すかせねばと聞き入れない。お玉、又小萬が三兵衛の指門にお三に意春がお玉(もとの座敷)右衛門にお三に意春がお玉に心あることを告げる。お三は夫に意見する

ためにお玉と遺物を着かへて女部屋に寝る。右衛門は、また源兵衛にはお玉が女部屋に寝てゐると告げる。源兵衛を意通に憤して放逐せよとする腹である。(同女部屋)右衛門問答呼ばはりしなから、屏風を開ける。中に源五兵衛と源兵衛との對坐、源五兵衛は葛籠の中に隠れてゐたが、右衛門に何かの策あるを察し、お三を脇へ逃したのである。意春は以前お玉に惚れたのも、越庵の秘薬のためと告げ、また右衛門が主家の横領の意あることを詰つて放逐する。(同小座敷)土蔵を破つて色紙の箱を盗み出した三兵衛を源五兵衛等と見違へて、おかやに敵討をさせる。源五兵衛は色紙を主家に納めて歸參を許され、小萬を妻として家は榮える。

敵討の事件を荷へさせ、一方には賣渡しの落着に運ばせるのである。作者はこれを「普賢」の中、お三とお玉が遺物を着かへつた結果、お三と源兵衛の意通を構成する趣向から學んだのであらう。お三とお玉が遺物を着かへる筋は、この作にもその趣向を承けてゐる。けれどお三をも意通に置かないとする新しい作意では、その事はさまで重い條件をなさない。そこでその趣向を別様に翻して、依然として二つの重い位置を趣向の上に占めさせたのであらう。原作に於ける小萬の源五兵衛に對する愛想つかしは、三味線の劇に書いてある五大力に加筆した三五大切といふ文字になつてゐるのを、これでは「うかれ女の浮れでありく旅ゆかたすみつき離れものぞぞりける」の「夫木集」の古歌になつてゐるところに種彦の好みが見られる。この前巻の縁は初代豊國の趣向として記憶すべきである。

笹川臨風(ささきいろ) 美術評論家、文學者【本名】種彦【國歴】明治三年八月、東京神田末廣町に生る。父は淺海、幕臣である。父が官吏として諸方へ轉任する毎に彼は伴はれた。第二高等中學を経て、明治二十六年東京帝國史科に入る。在學中、雜誌「東亞叢林」「日本人」「太陽」等に執筆し、その寄稿會に入つてから櫻井、朝風、芥舟等と親交があつた。二十九年、帝大卒業、翌年女出版として支那小説「支那史」を公けに、三十一年「日本地氣論」及び「支那文學史」を公刊した。一面俳句を好み、大野清江等と筑波會館を起したのはその頃のことである。次いで田岡嶺雲等と雜誌「江湖文學」(別項)に關係し、且つ「助長回天史」の編纂に從事した。當時「支那文學大綱」の一部を擔當して、「杜市」「孟子」等を執筆

し、且つ「帝國文學」の編輯に與つた。三十四年、柳木藩字都宮中學校長として赴任した。在任六年餘、四十年辭して上京、三省堂の「日本百科大辭典」編纂に従事し、傍ら諸學校に教鞭を執つた。四十三年、萬朝報に「日蓮上人」「山中鹿之助」等の歴史小説を連載し、一面美術批評に精進した。次いで四十二年、南北朝正閏論が起つた時、南朝正統論を主張し、南朝五十七年史「南朝正統論」を刊行して頗る力むところがあつた。その後、美術院、明治大學等に關係したが、主として著述に力を注ぎ、大正五年、姉崎鳴鳳等と雜誌「人文」を編輯發刊した。大正十三年、「東山時代の美術」についての論文により、文學博士の學位を授けられた。現在は京北中學校校長たる傍ら、東洋大學、駒澤大學に教授を執つてゐる。【著作】以上の外に、日本美術史、自然と文化との關係、江戸情調、現代美術、男性美、江戸と上方、江戸、日本帝國史等がある。小説には、櫻井、朝風、芥舟等とある。(高田)

等と新風を唱道した。後、竹柏會館を設けて雑誌「心の花」(別項)を刊行し、會員の指導に従つた。同三十七年一月、南方支那の旅より歸るや、豫てチャンパレン氏の言に指示を得て着手した和歌の歴史的研究を完成せんと志す。同年七月東京帝國大學文學部講師を嘱託せられ、爾來昭和六年三月まで二十八年間、和歌史、歌史、歌論史、國文學史、萬葉集等を著した。明治四十四年二月文學博士の學位を授けられた。同年十一月御寄附人を命ぜられ、明治天皇御集及昭憲皇太后御集の編纂に従つたが、御集の完成と共に大正十一年寄附人を辭した。同十三年宮内省御寄附管理委員臨時委員を嘱託せられて、歸府の典義精査のことに従つた。又明治四十五年文部省文藝委員會への建議が容れられて、橋本進吉・千田嘉武・田崎吉・久松潜一の諸氏と共に、「校本萬葉集」(別項)作成の事業に従事した。【著作】思草、別項、新月、常野木、豐原、以上歌史、日本歌學史、和歌史の研究(別項)、近世和歌史(別項)、歌論史、増訂萬葉集古宮本、白文萬葉集、分類萬葉集、國文學の文獻學的的研究、日本歌學上古之卷、定家歌集、戸田茂、藤田、實茂、藤田、本居宣長、古今集選釋、古今集選釋、増訂萬葉集抄、業經、専門の研究としては、和歌及び歌學の歴史的研究と萬葉集の建設とを目的としてゐる。又國文學の文獻學的研究によつて未知の資料及び源流した古典籍を發見して紹介し、且つその刊行に携はつたものが多い。撰本歌集一冊、琴歌集一巻、承徳本古詩集一巻、天治本萬葉集一巻、福本萬葉集抄一冊、元曆校本萬葉集

十四帖、萬葉集目錄一巻、六百番原歌集一冊、古今問答二巻、定家集本歌集日記一帖、仙傳傳書一巻、定家集本歌集日記一帖、仙傳傳書一巻、成尋阿闍梨日記一帖、類聚古集十六帖、樂府抄二冊、西行上人歌集一帖、信生法師集一帖、春日本萬葉集殘卷、飛鳥井雅有日記一冊、西本願寺藏本萬葉集二十冊を紹介し、日本歌學全書、續日本歌學全書、仙傳傳書、契神全書の刊行に携はつた。また萬葉集研究の副書として古典の刊行を企てた。扶桑珠玉の名のもとに、南都秘笈、萬葉集、業經十種の三十部を印行した。歌人としては竹柏會館を率ひ、「心の花」を刊行し、和歌の革新と趣味教育としての和歌の普及に力めてゐる。且つ童謡、唱歌、東歌等にも心を寄せて、その作が少なくない。なほ夙に民間にあつて和歌の普及に力めて来た爲め、その門に出づるところの歌人が多くない。その主なものを挙げれば、石橋千亦、川田順、木下利支、齋藤、下村宏、橋本、大塚、橋本、片山、廣子、柳原白蓮、九條武子等である。

歌を詠じた。その頃古物語語を讀み、雜語をぬき出して解釋を加へ、「雅言拾遺」一巻を著した。後補正して「雅言小解」と改題出版。二十歳の秋、山田なる足代弘調の門に入る。その寛治間のこと四年、専ら歌學を修め、終頭となり、師に代つて人を教へた。二十九歳の時弘調歿し、翌年江戸に出で、井上文庫に歌を學び、黒川春村、岡宮水好等と交はる。後、京に上つて河本延之、渡辺武と交はる。石阪に至つて萩原廣道、中島廣足と交はる。津藩主藤堂高敏に國學を講じ、齋藤樹堂と親しくした。明治十年松坂社中の請により同地に居を移し、鈴屋社の監督となる。同十五年の春、長子信綱(別項)を伴つて東京に上る。東京大學文學部古典科の講師となり、大學編輯所に入り、又東京師範學校講師をも兼ねた。明治十八年冬、病を得て退き、晩年は専ら著述を事とした。

【著述】竹取物語傳言解二巻(文政四年)、歌自六卷、長歌改良論一巻、竹柏園家集一巻、新編傳言一巻、活語全圖一帖、土佐日記傳言解二巻、伊勢物語傳言解二巻、櫻井歌集、小解一巻、歌文要語解一巻、與字遺枕詞傳言一巻、歌辭對典一巻、位山日記一巻、加越日記一巻、撰集、千結集(萬延元年)、明治開化集二巻、千代田歌集二巻、實田集二巻、伊勢名所歌集二巻、月潮梅風集一巻、位山集一巻、古今今樣集一巻、編纂書、日本歌學全書十二巻、八編大略一巻、足代舊歌集一巻、【影響】日本歌學全書、歌自、在、千代田歌集等は普く世に行はれて、明治の歌道に實した功績は少くなかつた。家學は長子信綱に傳へ

とも思はれる。本格的な挿繪としては、延應元年「百物語」が挿繪入木版で刊行され、これが我が國最初の挿繪美術となつた。續いて寛文四年「佛蘭比丘六物語」がやはり挿繪入木版で出版された。支那では咸通九年「金剛般若經」の扉繪に、木版で佛像を表はしたものがあつた。これが支那の挿繪としては最初のものであるといはれてゐる。應永二十一年「應永念佛緣起」二卷、文政年間には「弘法大師行狀緣起」十卷が木版手彩色で刊行された。これは冊子本ではなく、繪巻物だが、挿繪美術の方からは、重大な参考資料である。我が國初期發祥當時の挿繪美術は、多く支那の模刻本の挿繪であつたから、支那の挿繪は、我が國挿繪美術のために甚だ關係が深いのである。殊に宗教關係の經文の類とか、醫學、天文の書物等は、支那本の模刻といふ説だから、これ等の影響は、當時の挿繪界を指導したとも思はれる。室町時代乃至江戸初期あたりに、奈良繪本と稱する肉筆の挿繪入木版が現れた。この奈良繪本は、繪巻物と木版挿繪入木との中間に位置する如きもので、その起りに就いては暫く措くとして、とにかく挿繪と文學とが、一冊の内に互に獨立した立場を守つて、各々その本分を盡してゐる所に、挿繪美術の本領を示したものと見える。奈良繪本の挿繪は、肉筆繪彩色で、多く土佐繪風のもので、精巧なものもないではないが、多くは粗雑な描寫と下手モノ的の色調を現はしてゐる。この奈良繪本と木版挿繪入木との間には、どれだけの關係があるのか、その邊は詳かにしないが、何等かのつらなりは必ずあると考へられる。奈良繪本の古いのは、何年頃に製作されたものか、それも詳かでないが、とにかく、江戸初期に

もその製作があつたらしい。これは或は奈良繪本として、終りに近いものかと思はれる。いづれにしても奈良繪本なるものは、繪巻物を平俗化した形式であつて、挿繪美術とは關係甚だ深いものがある。この點、佛敎關係の經文や科學書類よりも、一層注意すべきものである。「江戸初期木版挿繪」江戸時代の挿繪と木版の技術も進歩して、挿繪入の文學書が旺んに刊行され出した。江戸初期、慶長、寛水の頃は、挿繪を加へた文學、假名草子、舞の本、淨瑠璃、お伽草子、物語、各道、歌書、歌調書の類から理科書まで出版された。殊に挿繪に手彩色を加へた挿繪本の出現した事は、未だ奈良繪本・繪巻物の傳統が遺つてゐたものと思はれ、頗る面白い現象である。挿繪の畫風も、土佐、野野の影響を明かに傳へてゐて、上品な理想畫風を保存するあたり、正に繪巻物系統と見て間違ひない。「源氏物語」平家物語「うづぼ物語」その他平安文學の模刻が、これ等の挿繪を更に繪巻らしくさせた傾きもあると思ふ。挿繪入木版本の小説類では、慶長十三年刊の「伊勢物語」が最初だといはれてゐる。この「伊勢物語」は、光悦の意匠と記されてゐるところから、世に光悦本と呼ばれ、或は嵯峨本とも稱されてゐる。「伊勢」の外に「三十六歌仙」その他がある。木版挿繪入小説類の出版は、これを最初として、寛水から寛文あたりにかけては、非常に多数にのぼつてゐる。併し挿繪の筆者に就いては、未だ明瞭になつてゐない。僅かに藤屋立園・高橋師源三郎・吉田半兵衛・夢川師宣等の名が見えるのみで、確實にその畫風を論評するまでに研究が届いてゐない。尤も夢川師宣も、寛文頃になると、作品に署名してゐるから、これ

等は論争の限りでないが、寛文以前の初期の作品は、何れも無記名だから、他の作家と混濁されて判別し難い。とにかく師宣が出て、浮世繪畫派を拓いてからは、挿繪の方も多く、浮世繪畫派の手に任せられた観がある。師宣の挿繪は、後期になると小説類から別れ、純文學と結びついて、閑居畫を主題とするに至つた。文學の方も、天和貞享時代から元禄時代にかけて、西鶴の好色本が起つたり、八文字屋本が出たりして、その挿繪には、半兵衛・師宣・西川祐信（或は西鶴自畫もあるといふ説もあるが）等の挿繪界の大家が現れ、ここに挿繪美術を完成するに至つた。西川祐信の八文字屋本挿繪は、出版當時既に世の好評を得たと傳へられてゐるのだから、その傑出した手腕に關西の挿繪界を風靡させたことは言ふまでもない。祐信の作品は、挿繪として立派であるのみでなく、繪畫表現の歴史からいつて、寫實派に進化した時代の代表作と見られることも出来る。祐信の時代に、江戸には農村政信等がゐる。祐信に近い本の挿繪や閑居繪畫を畫いてゐた。政信の前には、鳥居清信等一派の畫家が、赤本・黒本の挿繪を畫いた。「祐信以後の挿繪」西川祐信の没後は、事實上、關西の挿繪畫家は勢力を失つた。江戸に於ては、農村政信・鳥居清信等が、黄表紙・繪本等を畫いてゐたが、歌川豊國・同豊齋が出て、讀本・黄表紙（細密な描寫を試みて以來、鳥居清信が現れて、挿繪界を一變させるにいたつた。北齋の挿繪は讀本に多いが、豊國の劇的なそれとちがつて、北齋のは極端な寫實を旨とし、毛筆で表現し得る極限の細密を試みた。北齋は祐信と共に挿繪界の代表的作家と評してゐる。豊國は挿繪に役者の似顔を

應用して、この方でも人氣もあつたし、その作は特色もあるが、挿繪としては北齋に及ばない。豐國も挿繪作家として、相當の地位を占めてゐるが特色は強くない。この間に小説家十返舎一九が、濃墨風の挿繪を試みたり、大阪の耳島齋が、皮肉な繪を畫いたが、挿繪史の方からは特に彼を擧げる必要を認めない。こゝに注意すべきは、草雙紙・讀本の挿繪は、作者がその圓網の指定をなしたことである。これは作者と畫家との合作であつて、この傾向は合巻に至つて益々甚だしい。而して合巻に於ける挿繪と本文との關係は非常に密接なものとなり、一種の繪畫小説とも稱すべき特殊な文學となつた。合巻では、歌川國貞の「田舎源氏」の挿繪が最も面白い。春水の人情本挿繪は、主として歌川國貞が畫いてゐるが、繪畫に近い。かくて挿繪界は、寫實派から理想派に轉じた時に明治維新に際會した。「明治以後」明治の初年には、浮世繪師の仕事として、小説の挿繪と文明開化の挿繪があつた。挿繪の方では、芳艷が頭角を現してゐて、彼の挿繪は單行本や新聞小説に用ひられた。又畫家の名は不明だが、當時の小説類、殊に政治小説などに石版畫の挿繪が流行した。同時に少數ではあつたが、銅版畫の挿繪もあつた。中頃には小林清親が漫筆を畫いて聞々珍聞（掲載したり、鳴響が連筆を揮つたりした。併し挿繪としての名作は、堀田半古が新聞へ連載したものかと思ふ。その他にも優れた挿繪は多い。明治の終り頃には、雜誌「一從成美・竹久夢二等の女性的な挿繪も出た。大正時代では石井龜三の新聞挿繪が好評だつた。挿繪が日本畫家の手から、洋畫家の手へと移つて来たのは、面白い現象である。同時に挿

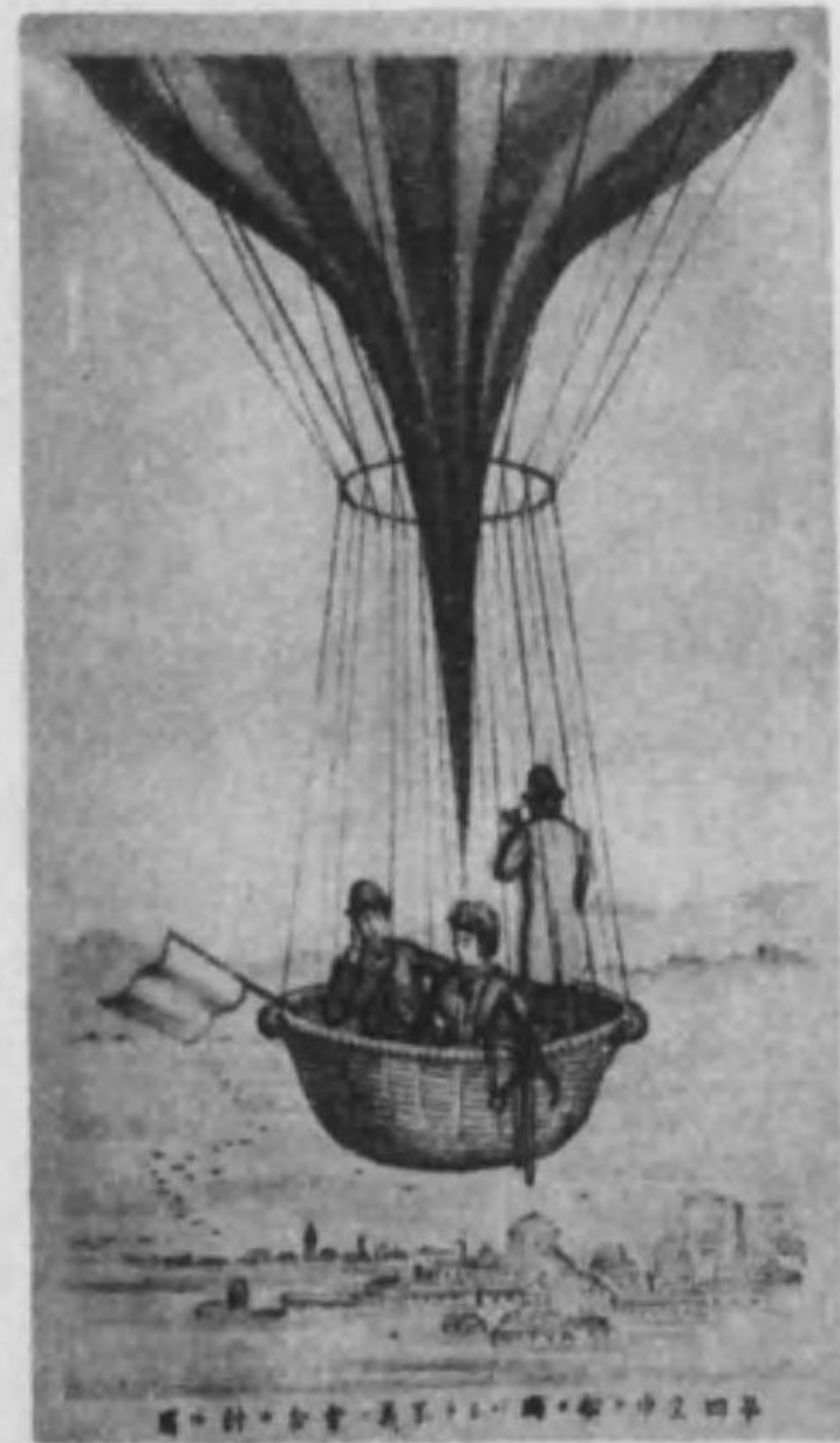
繪 挿



(風本峨嵯) 紙草の扇 刊初戸江
(藏庫文崎岩)



(筆村雪傳) 圓之牛十の中 刊代時朝北南
(藏庫文崎岩)



(詳不者筆) 繪挿し人住の柱折 刊年十二治明



(筆宣師川斐) 繪挿し雀戸江 刊年五寶延

作家といふ事門家が現れて来た。

【参考】浮世繪と挿絵(藤田一)○徳川時代

三大挿絵家(藤田一)○挿絵版権

論(藤田一)○西島好色本挿絵

○明治の挿絵(藤田一)

座敷浄瑠璃

【名】座敷浄瑠璃

浄瑠璃の意で、舞臺で演ずる浄瑠璃に

対していふ。往々古風に残れる大名屋敷など

で、人形を操れる「座敷浄瑠璃」といふ同じく、

「座敷浄瑠璃」といふその意であるが、第二義

の意味として「座敷浄瑠璃(安永三年正月

刊行)などに見ゆる「素人浄瑠璃」なぐさ

か浄瑠璃」の意にも用ひる。「解説」浄瑠璃が

素人の間に口ずさみ、口説かれた記録は、

その創始期において多い。「竹本秘書九」

には「なぐさみ浄瑠璃」の項目があつて、

竹本筑後権門弟と並記されてゐるに徴し

ても、義太夫節創始時代から、素人浄瑠璃の

流行を見るべく、且つ太夫の血縁相繼は極め

て稀で、弟子乃至なぐさみ浄瑠璃から太夫へ

の修業に轉じ、舞臺を勤め相繼する人が多い。

既に名を成した素人浄瑠璃が、友人として太

夫として友人の修業を納ずして芝居を勤むる

を、その仲間では「化浄」と稱してゐる。初代

義太夫の師も清水理兵衛といつた「なぐさみ

浄瑠璃」であり、二代義太夫の竹本権助少将

も、この意味の「化浄」であつた。「石門

指紋鮮血染野晒

【別名】指紋鮮血染野晒

【別名】指紋鮮血染野晒

【別名】指紋鮮血染野晒

【別名】指紋鮮血染野晒

【別名】指紋鮮血染野晒

【別名】指紋鮮血染野晒

【別名】指紋鮮血染野晒

【別名】指紋鮮血染野晒

【別名】指紋鮮血染野晒

【別名】指紋鮮血染野晒

【別名】指紋鮮血染野晒

【別名】指紋鮮血染野晒

【別名】指紋鮮血染野晒

【別名】指紋鮮血染野晒

【別名】指紋鮮血染野晒

【別名】指紋鮮血染野晒

【別名】指紋鮮血染野晒

改しきじ せいしきじ

恐らくはこれが初演に於ける名題ではあるま

いか。【請求】書印の素本は傳はらないが、

河竹紫雲氏が横とちの素本を所蔵してゐる。

【歌舞伎新報】には東京藤屋上演の際の詳細な

筋書を掲載。帝國圖書館蔵の「藤屋浄瑠璃

脚本集」にも幾分簡約されて収録されてゐる。

【初演】明治十四年四月大阪角の芝居。

【役者】教員藤屋(市川右衛門)、義太夫末次郎

川八百屋、義二の女土屋平八郎(市川十市)、お

みの見若之助(中村文之助)、末次郎の妻おみの

【脚村】東京「いろは新聞」(藤野子)に連載さ

れた。長崎縣島原附近に惹起した事件の脚色

である。

【梗概】(序幕)三宅村小学校門前。筑後柳

川の産婦屋へ入塾した其之助は、久し振りに

歸郷して伯父の調査松倉経吉や妹おみのに面

會し、更に阿彌陀寺の伯父了念を訪問のため

人力車に乗る。教員藤屋二の下僕清蔵は、自

分が媒約した義太夫末次郎の女房おみのが、主

人藤二に附文して不義をしかけた事を憤り阿

彌陀寺へ赴く。(阿彌陀寺座敷)其之助は了念

と清蔵に對して、妹おみのの處置に就きよく

意見を述べる旨を述べて調停する。(舞臺ケ池

辻亭)その夜、身の不行跡に分別を失つたお

みのが投身自殺を企て、藤二に救助される。

其之助の懐中金を拾ひ込んだ車夫三之助、女

房を奪ね探す末次郎、辻堂前で四人はだんま

り構はる。(二幕)島原城下出口(守山村入口)

藤二の女土屋藤平八郎は、仲の悪毒事件を百

姓の噂話より聞き知つた。(藤二住居)末次

郎はおみのとの間に出来た幼児へ、名前を附

けて貰ひに訪問してゐる。この幼児が藤二に

似てゐるといふ百姓連の言葉に、藤二の良心

は痛むらしい。父平八郎の頑固な意見。洩れ

聞いた末次郎が恨めしきうに立歸る。藤二は

鐵砲と金札を持って追跡する。(守山村末次

郎内)車夫三之助が辻堂で拾つた懸文を袖に

ゆすつてゐる。歸宅した末次郎は、藤二が以

前助めた藤家の子息といふ關係から、主家の

名譽のため、耐へ忍んで隠居に落着させよう

と、おみのへ意見を加へる。この時、藤二

は鐵砲で末次郎を狙撃し、家に火を放つて、

おみのと幼児を連れて逃れ去る。三之助は松

倉調査に捕縛された。(三幕)筑後國柳川下

立本町旅館)木曾宿へ歸る途中、藤二は

おみのの心術の機、病床に横はつてゐる。部

査の宿泊人取調へ、或は新聞記事に依り、身の

危急を覺つて藤二は逃亡しようとする。この

旅宿の女房お富とおみのとは主人の其之助故

やらうとの心組。おみのと藤二は兄弟姉妹に書

置を認める。折柄浄瑠璃お後傳兵衛藤川の段

が明えて来る。松倉調査が逮捕に来るので、

其之助は、おみのを犠牲に藤二を助けようと

する。又國元より清蔵が被疑をうけた平八郎

救免のため、藤二を連れて来たので、遂に藤

二は捕へられてしまふ。其之助夫婦に藤川の

奥次郎の心が、終つて露呈してゐる。(四幕)

(長崎縣本署詰問所)平八郎は、藤二に對する

厳正な裁斷を申請してゐる。末次郎は鐵砲傷

に憔悴しながらも、藤二と妻との關係を否定

し、舊主の恩義に報いようとする。その決心

に感動したおみのは、今迄頑強に口を固かな

かつた罪狀を告白する。(阿彌陀寺内)末次郎

より藤二へ差入物あり。この事件は、意味

深長と見ると小使の獨り言。(刑事課白洲)

判事民権護は、藤二を呼出し陰謀の上校罪に

行ふ旨、判決文を朗讀する。(大詰)【藤二

校罪】檢視の警部は松倉経吉。父平八郎と僧

了念が証付けるが、親を呪詛し佛を冷罵し、

教員をも勤務した自分が、かくの如き最期を

遂ぐるも親及び世間の不問化無習に原因する

と、不貞腐れた態度で窓口して被罪になる。

【解説】この狂言は大好評を博し、當時開化の

散策をした新入市川右衛門次(後の藤二)の當り

處となつた。と同時に藤二の狂言作者とし

ての地位を確保せしめた。新聞種脚色の代表

作である。この作で注目すべき二つの事柄は

(一)藤二が単先散切物の新聞種脚色に着手す

るに當り、阿彌陀に纏繞した因縁因果の關係

を顧慮せず、可なり現實に忠實なる態度を取

つた事。(二)大詰校罪の場に於て藤二が父

子關係、宗教等について、歌舞伎劇としては

奇異な感じを抱かせる言葉を弄してゐる事

である。其處に明治初期に於ける士族にして教

員といふ階級の一部に存する思想體系が展望

出来ることへ考へられる。併しこの大詰は東

京中馬場所演に際しては、改心した藤二を結

ぶ散敷場と變形してゐる。

【参考】南座末次郎○藤二の新聞を著す三本

竹(二)がらみ藤二(一)○歌舞伎新報(二)ノ

八二五ノ四)【尾形】

【参考】藤二の狂言、語學書(一)卷【著者】

東條義門【成立】文化十二年四月。天保十二

年自ら頭註を加ふ。【刊行】天保十四年九月

「磯の洲崎」(別題)と合冊して出す。【内容】著

者の友人石田千鶴が、村田春海の死後後継の

中に「遺訓らしむ」とも、「きならせし」ともあ

るについて、「し」と「せ」との異同を質問

したのに答へ、その序に、活用その他につい

三三九

て述べた事共を書き記した。その項目は「萬葉に引用のあや書事」「おはすと云の活のいと紛事」と「訓の活といふ名を設る事」...

【備考】長野義言の「指出過誤辨」(一)巻末、弘化二年二月は、「指出過誤」を批評したもので、「ちまたにのみ泥づみ云々」と云へる...

【指面草】清本一册【作者】山東京傳【名】子安観音に關する傳聞であるため、「新古今集」...

【指面草】清本一册【作者】山東京傳【名】子安観音に關する傳聞であるため、「新古今集」...

混合し、授けられる子胤に間違が生ずるに至つた。兩層屋の金多屋源右衛門に授けられた子胤三郎は武士の子胤であり、家業と似もつかぬ武藝ばかりをし、同じく兩層屋仲間に...

酒落本が行き方を持つてゐるといへる。要するに黄表紙・清本・酒落本の諸性質を含んで、而も、それは清本の型をとつたものである。【備考】...

【指物師名人長次】(小説) 脚本 五幕 世話物【作者】名人長次【作者】三代河竹新七【諸本】日本戯曲全集第三十二巻所収【題材】...

原の跡目を相続することとなつた。【備考】...

【備考】續々歌舞伎年代記(尾上菊五郎自傳)に見ゆ。坐禪(「正字」)を見よ。室家(「室家」)を見よ。...

【備考】續々歌舞伎年代記(尾上菊五郎自傳)に見ゆ。坐禪(「正字」)を見よ。室家(「室家」)を見よ。...



伊勢貞丈

【備考】續々歌舞伎年代記(尾上菊五郎自傳)に見ゆ。坐禪(「正字」)を見よ。室家(「室家」)を見よ。...

真爲の子貞衡、徳川家光の世に、春日局の願に依つて初めて徳川幕府に仕へることとなり、御殿米千俵を賜へられ、爾來禮法の家として立つた。...

【備考】續々歌舞伎年代記(尾上菊五郎自傳)に見ゆ。坐禪(「正字」)を見よ。室家(「室家」)を見よ。...

【備考】續々歌舞伎年代記(尾上菊五郎自傳)に見ゆ。坐禪(「正字」)を見よ。室家(「室家」)を見よ。...

で、貞敏は、これは我が累代の家風であつて、別に飾があつたのではないと答へた。劉二郎は大に感服して、自分の娘なる一少女を貞敏に與へ婚せしめた。この娘は琴及びひょうを善くしたので、貞敏は又新羅舞を學んだ。翌年、貞敏は歸朝の途に就いたが、別れに臨み劉二郎は祖意を説いて貞敏に紫標と紫藤との標を各一面を贈つた。この歸朝の年は我が承和六年、即ち大唐の大中年(これは三代實録の誤で、承和六年は唐の開成四年に當り、大中年は我が承和十四年に當る)である。承和七年に三河介、八年に主殿助・雅樂助となり、九年春に從五位下を授けられ、齊衡三年に備前介を兼ね、その翌春、從五位上となり、後攝部頭となり貞敏六年備前介を兼ね、同九年に卒した。貞敏は標を以て三代に歴任し、世評が高かつたと。中に劉二郎とあるのは、「源平盛衰記」には康承式としてある。併しどれ程の人物であつたかは分らないが、相當の妙手であつたものと思はれる。又貞敏が持ち歸つた二面の標は、「大日本史」卷百十四に、「將に歸朝せんとするに及び、二標を以て祖意を設け、贈るに紫標紫藤各一標を以てす。貞敏持ち歸り、終に朝廷の重器となる。所謂紫標、青山はなり」と書いてある通り、その一は紫標又は青山と、他は青山である。この事は「紫標御抄」拾芥抄「十訓抄」等にも記されてある。なほ「紫標御抄」の三曲を擧げ、この三曲は入皇五十四代仁明の御宇、遺唐使節部頭藤原貞敏、康承式より之を傳ふと記してある。この三つの標曲は今日絶えてしまつたが、平安朝の末頃迄は傳へられてゐて、種々傳説的話があるが、貞敏に依つて

我が國に傳へられたことは、誤らしく思はれる。貞敏は我が國琵琶樂中興の祖で、恐らく中世の雅樂琵琶の祖と稱するも過言ではなからう。樂曲のみならず、琵琶の調子についても貞敏はこれを研究し制定したやうである。琵琶の調子を書いた古書として最も有名な「三五要録」の中の「調子品」の條下に、「式部親王(貞敏)琵琶譜に云く、夫れ琵琶の調子品其數繁多にして、忽に彈じ盡す可らず。然るに貞敏朝臣諸調を尤彈し貫録せざる所なし。而して或は其音殊に美ならず、或は笛に合するに多し迂なり、仍て四調を定め雅樂に備ふ。(中略)所謂四調とは風香調、返風香調、黃鐘調、清調なり云々」と書いてあるのを見ても、貞敏は雅樂琵琶の奏法の上にも大改革を行つたものらしい。しかも特に貞敏の作曲として傳はつてゐる曲は見當らない。貞敏の事業は主として唐の名曲の輸入と、その奏法の改修とにあつたやうである。

【参考】三代實録〇三五要録〇紫標御抄上〇拾芥抄〇十訓抄〇源平盛衰記〇大日本史卷百十四〇教訓抄〇續教訓抄〇源朝抄〇樂家錄卷九〇日本音樂史考卷四〇日本音樂史 田邊尚雄(日本音樂史論)

貞主 仁明朝臣。滋野は地名から起つたもの(生没)仁明朝臣の延暦四年(西暦七二〇)に生れ、文德帝の仁壽二年(西暦七三二)二月卒す。享年六十八(家系)遺體は神皇正統記五世の孫紀伊國造天理親命。氏は最初藤原造と云ひ、天平勝寶二年三月紀伊國守藤原貞東人が部内なる藤原部多胡、湖濱に黄金を鑄てこれを獻した。そこで勳、臣の姓を賜つた。勳は伊蘇志と訓む。後、延暦十七年に至つて、從五位下家諱は伊蘇志、臣を滋野宿禰と改め、

弘仁十四年に宿禰を更に朝臣と改めた。

「公卿補任」には、貞主を藤原東人の孫としてゐるが、「文德實錄」卷四に、曾祖父、大學頭藤原正五位相原東人(仁壽二年二月、貞主の卒去の條)とあるのが正しい。滋野宿禰又は朝臣中著名の人々には、純純(仁仁八年正月丁卯)に滋野宿禰貞道、光孝(仁和二年九月乙巳)に更衣滋野朝臣貞直(自三年正月卒)、正六位下大外記、滋野朝臣貞幹など見えてゐる。

【附註】仁明帝の東宮時代、東宮學士として仕へ、天長四年五月(經國集)前項を撰進し、同八年には諸國と共に勳命をうけて「秘府略」二巻を撰んだ。仁明帝即位後は現任一層厚かつた。海府を府に構み、政する前には帝より醫藥を賜つた程であつた。諸官を歴任して功績も少くなかつた。【著作】「秘府略」二巻。諸國と共に撰す。古今の文書を編纂したもの。現存卷八六四(前項)と卷八六八(前項)の二巻のみである。何れも平安時代の書寫であらう。二巻共に續群書類從卷八八三所載。又「秘府略」の引用書に關しては後に現存二巻によつては到底そのすべてを知る事は出來ないが、試に列記すれば左の如くである。

秘府 玉書 聖書 皇書 聖書
 聖書 聖書 聖書 聖書 聖書
 聖書 聖書 聖書 聖書 聖書
 聖書 聖書 聖書 聖書 聖書
 聖書 聖書 聖書 聖書 聖書

も云ひ、白石との間答の條に、都府在朝地位別當等法に關した數語と、野鳥等主として寫東に關したものを合せたもので、定憲の實永八年の條がある。新井白石全集卷六所載。〇平家物語考證十二卷、語句を抽出し舊記數百部を擧げて解説し且つ事實を訂正したもので、平安註釋書中の一書也。國文註釋全集所載。〇東海道故抄一卷、短歌の傳説の具に就いて、古書を引かれ、その故實の大要を解説したもの。實永元年の自序がある。〇古口傳正誤一卷、元禄十五年五月、吉田屋長の古口傳説を訂正したもの。〇詳記類編五卷(公事類聚)類考のみにあつたものと云ふ。

貞頼 故實家(姓名)伊勢氏。通稱は二郎左衛門。因幡守貞長の孫、下總守貞數の子。永正、大永頃の人。下總守と稱した。

【著作】宗五大神祇(詞頭)がある。(石村)

左千夫歌集 かしは 歌集(編者)初版は伊藤左千夫(後、門人鳥木赤彦、石原純、古泉千樞、中村重吉、胡桃澤勘内、土屋文明、齋藤茂吉。改訂版は中村重吉、土屋文明、齋藤茂吉。【刊行】初版は大正九年九月、春陽堂。改訂版は正和五年五月、岩波書店。【内容】初版は左千夫全集第一編として出たもので、明治三十三年以降、左千夫遺年の大正二年に至るまでの作、短歌一千八百七十九首、長歌七十四首、長詩十二首、旋頭歌七首を収めた。本書は長く絶版になつたので、二百餘首の歌を増補して校合を新にし、再び「左千夫歌集」として出たに至つた。左千夫は生前に歌集を編む志があり、自らゆづり葉と命名したのであつたが、それを實行するに至らずに歿した。なほ左千夫の歌の選抄本には、鳥木赤彦編「伊藤左千夫遺集(二ツク)、齋藤茂吉、土屋文明共編

この他「文選」、詩文の續集、別集、續家、支那宋代の勳績「太平御覽」の巻を摩するか或はそれ以上のものがあらうと思ふ。何となれば藤原佐世が日本國見在書目には、易家より藤原家に至る四十家、書目一千五百五十餘部を掲げてゐる。しかも「日本國見在書目」は佐世が陸奥守となつた寛平三年若しくはそれ以後のものである。なほ僧家の將來目錄即ち最澄の古州錄、彼州錄の如き、空海や常樂の請來目錄の如き、圓仁の承和五年入唐求法目錄、在唐送遊錄、入唐新求聖教目錄等を見るに、經典の外に詩集、文集等が少からず交つてゐる。以上の如き多數の中には、その後支那に佚亡して我が國にのみ存する珍籍すら少なくない。外に「經國集」二十卷(別項)がある。なほその作るところの時は長短種々あるが、頗る唐詩の風格が多いと稱せられる。嵯峨帝の漁歌子に和した漁歌五首は詩集(別項)である。當時詩餘の流行を以てして、唐詩の隆盛と相俟つてを知るに足るものがある。

【人物】身長六尺二寸、體軀魁偉であるが、温良で仁徳の心深く、且つ度量があり、人材を適所に用ひることに努めた。その卒去を聞いて、知るもの知らぬも流涕して悼情したと傳へられてゐる。なほ死に臨んで、齊衡の外は悉く海にせよと遺言した如き、その人を想慕することが出來よう。【業績】貞主の陳情した便宜十四事は、「文德實錄」卷四(仁壽二年二月乙巳)にも「事多くして載せず。諫又行はれず」と記してあるが、その文は今傳はらない。蓋

「左千夫歌集」(岩波文庫本)、「伊藤左千夫集」(現代全集、改訂版)がある。(藤原集)三卷より五年にかけて岩波書店から刊行。【内容】伊藤左千夫の歌に關した論文、講話等すべてを編め、なほ隨筆、感想文、書簡をも附加した。歌論の主なるものには、萬葉集新釋、新歌論、短歌連作論、新しい歌と歌の生命、叫びと詠表現と提供、仁徳天皇の御歌、僧良良の歌と田安宗武の歌、上田秋成の歌、與謝野晶子の歌を評す等がある。(藤原集)

皇月晴上野朝風 のつぎは、歌集(編者)七卷、世話物(作者)竹葉其水(俗稱)上野の戦争(興行)明治二十三年五月、東京新富座初演。

【役目】天野八郎、金魚屋主人(實は天野八郎、朝野代演)五代尾上菊五郎、長岡役太郎、後宮白王院、天野實次郎(先代尾上菊五郎)、高木屋源吉(中村芝翫)、後藤彌次郎、赤人(ゆづり葉、天野の側近)、金魚屋女房(ゆづり葉、天野の側近)、小幡仁(中村福助)、秋本屋之助、銀行頭取取置(坂東東藏)、天野左衛門、金魚屋九郎兵衛(尾上松助)早ぶき吉吉、金魚屋屋敷上(山田五十鈴)等。

【脚本】日本戲曲全集第三十二編、世話狂言傑作集第七卷所載【題材】明治維新の際の上野戦争に關する遺聞逸事。

【提要】【序幕】明治元年五月、上野に戦争が始まるといふので、江戸市中は物騒然としてゐた。歩兵は官軍の名を借りて到る處で亂暴を働く。殊に上野の宮を中心として、將軍家恩顧の者共は、容易に上野の屯集を解かうとせず、膨張隊をめぐつて、悲劇は數限りもなく、武士と町人とに展開されるのであつ

評二年春の上書には「太宰府は西陸の大境、中國の領袖である。九國二島を以て群島關造、古來の重鎮であり中外の關門である。故に有徳を帥或となし才良を聚典とすべきである。若し其の人が無ければ辨官又は式部から選ぶべきよい。聞く所によれば、近來太宰府の吏は、濫敘を事として府司國家共に悲傷する者が多い。又少貳小野朝臣恒和と筑前守紀朝臣今守と執論して政を曲して意を披瀝する」といふにゐる。故に上奏して意を披瀝する」といふにゐる。この上奏は言辭誠に切實であつたが用ひられなかつた。又その邸宅を西寺の別院とし、唐の慈恩寺の構骨に模したために慈恩寺と稱したのである。その宅を寺院とするのは法華經の諸品に屢々見えるやうに現世の功德を期待するものであらう。

【参考】【傳記】文德實錄卷四(仁壽二年乙巳)の條。〇公卿補任(仁壽二年和九年)。【詩】凌雲集。〇文章秀麗集上下。〇雜言奉和。〇經國集卷一。十一、十三、十四。(慈恩寺の事)續日本後紀卷十四(和和十一年四月三十日壬午の條)〇百鍊鈔卷六(後、二年十二月、慈恩寺の條)〇慈恩院初會序(本朝文書一〇)。(山田)貞頼の註。故實家(姓名)伊勢氏。通稱は二郎左衛門。因幡守貞長の孫、下總守貞數の子。永正、大永頃の人。下總守と稱した。

【著作】本朝故實記一卷(野文政口語又は野野間茶と題したものとある。後記、讀位降時、後東等、故實に關する問答の條に、安永三年の美濃商人の條には、この書は正徳年中、新井白石上書の時問答であらうと記してある。〇車輪御座手記(白石との問答の條に、車輪之儀、前記之事を記してある。又車輪問答と題し、他の白石との問答を加へたものもある。新井白石全集卷六所載)〇新野問答(二名、白野問と

祖父の著書の校訂などに努めた。【著作】室町殿形私考一卷(室町殿形中興の大事を記したものとある。新井白石全集卷六所載)。〇平家物語考證十二卷、語句を抽出し舊記數百部を擧げて解説し且つ事實を訂正したもので、平安註釋書中の一書也。國文註釋全集所載。〇東海道故抄一卷、短歌の傳説の具に就いて、古書を引かれ、その故實の大要を解説したもの。實永元年の自序がある。〇古口傳正誤一卷、元禄十五年五月、吉田屋長の古口傳説を訂正したもの。〇詳記類編五卷(公事類聚)類考のみにあつたものと云ふ。

貞頼 故實家(姓名)伊勢氏。通稱は二郎左衛門。因幡守貞長の孫、下總守貞數の子。永正、大永頃の人。下總守と稱した。

【著作】宗五大神祇(詞頭)がある。(石村)

左千夫歌集 かしは 歌集(編者)初版は伊藤左千夫(後、門人鳥木赤彦、石原純、古泉千樞、中村重吉、胡桃澤勘内、土屋文明、齋藤茂吉。改訂版は中村重吉、土屋文明、齋藤茂吉。【刊行】初版は大正九年九月、春陽堂。改訂版は正和五年五月、岩波書店。【内容】初版は左千夫全集第一編として出たもので、明治三十三年以降、左千夫遺年の大正二年に至るまでの作、短歌一千八百七十九首、長歌七十四首、長詩十二首、旋頭歌七首を収めた。本書は長く絶版になつたので、二百餘首の歌を増補して校合を新にし、再び「左千夫歌集」として出たに至つた。左千夫は生前に歌集を編む志があり、自らゆづり葉と命名したのであつたが、それを實行するに至らずに歿した。なほ左千夫の歌の選抄本には、鳥木赤彦編「伊藤左千夫遺集(二ツク)、齋藤茂吉、土屋文明共編

た。「(二)下竹町の湯屋佐兵衛は、今度上野の宮が京都へ行かれ、その後(四)條侍が見えるから、お前(五)も官軍御用といふ札を掛けたと名主から言はれたが、いづれも聞き入れなかつた。上野は湯屋に本陣を構へてゐる義経の頭領天野八郎をたづね、總督の使者として長岡悦太郎(山田本太郎)を唯一一人不慮で来り、静かに解散することを勧めるが八郎は服せず、返答を後日に約して別れ、一戦するの止むを得ぬことを暗示する。「(三)元來、天野八郎は奥御新軍を勧めてゐる半左衛門の長子であり、弟の賢次郎は兄の武藝を勤むのと反對に學事にいそしみ、一期も早く洋行して、日新月歩の學問をしようとした。この決心を知つた兄八郎は、徳川譜代の家へ生れた身を以て、外夷に深く心を寄すのは國賊だといふので、刺し殺さうとしたが、父に引き分けられ、父は改めて兩人の志を聞き、親子兄弟の縁を断つて水姿をなし、各々望むところに向へと金子を與へて西と東に別れさせる。「(四)上野戦争の場、陳長清が幸助(曾田宮新八郎)等の戦死を以て、彈丸雨飛する中、湯屋の者が陣営を配つてゐる。「(五)上野を落ちた白王院(皇主)・光仁(皇徳)等が高木原(湯屋)湯屋佐兵衛等に導かれて、官兵を逮捕しながら三河島(不動前)まで落ち來り、これより尾久村の長兵衛方を志す事となる。「(六)天野八郎は戦争の後、本所北町下の金魚屋九郎兵衛に匿まはれ、諸人と名を替へ、ぼうふうを取り金を手傳ひて世話になつてゐた。秋の末になつたので父の安否を氣にしてゐる所へ妹のお花が横しあてて來て、父は七月の末に歿し、弟賢次郎は神奈川から外國船に乗つて洋行したと聞

き、自分は現本武揚と共に北海道に脱走せんと決心する。「(七)明治二十三年上野に第三回内閣博覧會の開かれたその會場上野を舞臺とし、洋行から歸つた天野賢次郎が、湯屋の佐兵衛を初め、高木原源吉などに逢ひ、往時を追憶する。「解説」上野戦争を正面から歌舞伎に採用して上演した最初の作であつて、當時江戸の民心を作者の體驗からも描破してゐる所に別種の興味もある。五代菊五郎の天野八郎は、左團次の會場賢次郎、松助の父親や金魚屋の亭主等と共に非常な當り役であつた。「参考」河竹秋阿(河竹)「月刊」(列傳)「維新」(二)「風俗」(二)「刊行」(一)「大正四年二月」(二)「同年八月、國書刊行會」【解説】江戸時代に於ける娯樂・諸藝に關した藝術史を記したものを集む。卷一には、揚子江邊渡天守御殿(同演者、今井中等)卷二には、古今俄舞(座敷草子合點、茶番狂言合點、三三三)等、すべて四十九種七十一巻を収め、卷一には三田村高島、卷二には、朝倉無量の解題を各巻頭に載せてある。「註」(一)「性質」定期刊行物の一種。普通には書籍の體裁をなし、月刊・週刊・月二回刊・旬刊、又は年數回發行のものなどあつてさまざまである。(但し諸種の學界の報告、年報の類を除く)。雜誌には文學・宗教など或る特殊の事項に限つて取扱ふものと、雜然と種々の題目に關する記事を掲載するものとがある。何れにしても内容は概して論説・報道を主とするものであつて、その性質はよほど新聞(新聞)と似た點がある。ただ新聞は報道を以て生命とするに對して、これは寧ろ論説

を中心に置く。尤も後には単に論説・報道に限らず、趣味・娯樂その他萬般の事項に亘るものも出、各々専門の雜誌さへ生れ、所謂娯樂雜誌の如きものすら生れて來た。古くはその性質によつて、Newspaper(新聞)とMagazine(雜誌)の區別があつたが、現在ではこの區別は必ずしも明かでない。「起源」西暦一六六五年一月、フランスに於て發行された、"Le Mercure"を以て嚆矢とする。"Le Mercure"は新刊書の評論、科學上の新発見の報告、人事の消息及び學界の報道を主としたものであつた。その後、イギリス、イタリア、ドイツなどにも相次いで發行を見たが、これ等は皆多少ともフランスの影響を受けたものであつた。十八世紀以降、印刷文化の進歩に伴つて、雜誌は歐洲各國に於て長足の進歩を遂げ、英國には評論雜誌、ドイツには學術雜誌、フランス、イタリアには文學雜誌、アメリカには娯樂雜誌が榮え、各々その特色を示した。また英國には十八世紀中頃に政黨の機關雜誌が生れ、フランスに於ては、同じく十八世紀後半に商業・經濟・社會・軍事等の特殊雜誌が擧出された。なほイギリスの有名な月刊雜誌がThe Gentleman's Magazine (1731)の如きは、當時に於て發行部數に二萬を超えたといふ。十九世紀に入つて雜誌は驚くべき發展を遂げ、歐洲各國に亘つて、文學・政治以外に、宗教・教育・科學・美術・商業等の諸雜誌が續々刊行され、社會生活の重要な一機關となつて今日に及んだ。「日本に於ける發達」日本の雜誌は、新聞と共に西洋文明の輸入に伴つて移植されたものであつて、文學的には、慶應三年に出た柳川春三編輯の「西洋雜誌」が最も古い。雜誌なる

語は既に「警報雜誌」(一)などに用ひられてゐるが、これを定期刊行物に移し用ひて、今日の意味に轉換させたのは、この「西洋雜誌」である。これは主としてオランダ語の翻譯であるが、間々日本の記事をも挿み、立派に雜誌の體裁をなして居り、又當時に於て雜誌の性質をよく理解してゐたといふ點でも注目すべきものである。しかし最初は新聞と雜誌との分化が十分には進んでゐないので、體裁性質共に判然たる區別は認められなかつた。中には「新聞雜誌」(明治四年)といふ標題のものすらある。雜誌が獨自の發達を示すに至つたのは、明治七年三月の「明六雜誌」(別項)からと見てよい。この雜誌は、十年までに於て最も注目すべきものであつたが、明治八年に新聞條例、違罰律が發布されるや、同年末、四十三號を以て、同人等は自發的に廢刊してしまつた。宮武外骨氏の調査によれば、柳川春三の「西洋雜誌」が出てから同十年までに、百八十餘種の雜誌が出たといふから、その發展は驚くべきものであつた。その中の主なものは、慶應義塾の一民間雜誌(明治七年)、三田演義(明治八年五月)、「家庭叢談」(明治九年九月)を初め、中村敬字の「同人社文學雜誌」(別項)、「成島柳北の「花月新誌」(同十年一月)、ボナンチ式の「開々珍聞」(同十年三月)、投資雜誌「頭才新誌」(別項)などであつた。十年から二十年までの間に於ては、なほ學者の學藝的傾向も残つてゐるが、雜誌が政黨の宣傳機關として觀望を集めた事が注意される。就中、自由民權運動の指導機關となつた中江兆民の「政理叢談」(明治十五年二月)が最も代表的である。有名な「民約論」(明治十五年)が發表されたのもこの雜誌である。また英國の「エノキモスト」に

範を得た田口照軒の「東京經濟雜誌」が出て、この種のものの先驅をなした。その他、東京大學系統の論説を中心とする「東洋學雜誌」(別項)があり、「文學新誌」(明治十七年六月)、「文學雜誌」(別項)、「文學叢誌」(同十八年七月)なども創刊された。かくの如く急に婦人雜誌が續出して至つた事は雜誌の發達史上特要注意すべき事である。なほこの頃及社(別項)が結成せられ、明治十八年二月には、後「我樂多文庫」(別項)の萌芽と見るべき「我樂多文庫」が生れてゐた。二十年代に入つては、最も注意すべきものに、徳富蘇峰の國民之友(別項)がある。これは政治經濟論、社會文學の方面にも亘つたもので、この傾向は後の「太陽」(反省雜誌)を通じて、遂かに今日の「中央公論」(改造)にまで及んでゐるといつてよい。この「國民之友」の歐化主義に對立するものに三宅雪嶺の「日本人」(別項)があり、文學雜誌としては森田外(「しがらみ草紙」)「別項」、坪内逍遙の「早稲田文學」(別項)が相對時局があり、外に「南洋評論」及び「評論」があつた。一方、文壇に於ける小説の興隆と共に、幾多の小説雜誌が現はれた。即ち二十一年より公刊するに至つた「我樂多文庫」を初め「都の花」(小説茶館)「やまと」(新小説)「草分舟」(文庫)「江戸紫」(千葉萬紅)「新著百種」(小説)「日本の文學」(各別項)などが出た。婦人雜誌としては「文學雜誌」(以長都女)「別項」(貴女の友)があつた。日清戦争後は雑誌が著しく商品化し、學者の學藝事業や政黨の宣傳機關の方が特殊雑誌の觀を呈するに至つたことは最も注意すべき現象である。文學俱樂部「太陽」(新小説)「再刊」(各別項)等はこの機運に乗

じて生れた。なほ二十年代の末には、「文庫」(青年文)「新聲」(江湖文學)「めざまし草」(帝國文學)「中央公論」(反省雜誌)「各別項」等が出た。こゝに一つ注意すべきは、少年團(小國民)「各別項」などが出て少年雜誌の先驅をなした点である。三十年代に入つては雜誌の商品化的傾向は益々顯著となり、日本大衆協會(別項)で成功した博文館は、在來發行してゐた數種の雑誌を整理して、二十八年以降、「太陽」(文藝俱樂部)「少年世界の」三雜誌を發行して來たが、爾來益々發展して、「太平洋」(文藝俱樂部)「女學世界」(女學世界)「中學世界」(文章世界)など十數種を刊行するに至り雜誌界に覇を唱へた。就中、田山花袋の主筆した文章世界は、自然主義運動に貢獻すること甚大であつた。又三十年には日清戦争以後の實業熱に乗じて「實業之日本」が出版された。この種の雜誌に先鞭をつけた。同社は數年後に「婦人世界」(日本少年)を出した。なほ三十年には「新著月刊」(三十一一年には「ホトギス」(三十四年)には「明星」(小天)、「三十五年には「萬年草」(文藝界)「以上各別項」(三十九年には山崎愛山の「獨立評論」(三十七年)「新潮」(改題)「別項」などが創刊され、三十九年には「婦人」(早稲田文學)も再興された。「日本人」が「日本及日本人」を改題したのもこの頃である。この外に「活文壇」(明治三十二年)「秀才文壇」(明治三十四年)「女子文壇」(明治三十七年)などの投資雜誌があり、二十年代の末に用いた「青年文」(文庫)「新聲」(各別項)などと共に多くの文學者を生み出したことは注意すべきである。四十年代に入つては日清戦争後につた新文學運動に伴つて、「新潮」(三藝苑)「スバル」(三田文學)「白樺」(藝文)「青年」(各別項)な

どの文學雜誌が生れた。これ等の諸雜誌と共に中央公論「早稲田文學」(新潮)「文章世界」などが、自然主義を中心題目として花々しく活躍した。殊に「中央公論」は、日清戦争後急激な活氣を帯び、當時文藝及び思想界に君臨してゐた太陽を壓倒するの氣勢を示した。なほこの時代に於て注意すべきは、後に雜誌の商品化を最も徹底せしめた講談社の出現である。四十三年初めに「維新」を創刊、續いて翌年、博文館の「講談雜誌」に倣つて、講談俱樂部(別項)を出し、少年少女雜誌に手を染め、次第に博文館の牙城に迫つて行つた。大正期に入つては、初期に「黒潮」(文章俱樂部)「第二次及び第三次新思潮」(別項)などの刊行があり、同人雜誌なども多く現れたが、歐洲大戰を轉機として異常な發展を示した。この期に創刊された主な雑誌には、「改造」(解放)「各別項」(新時代)「女性」(苦學)「婦人公論」(女性改造)「人間」(思想)「維新」(人)「我觀」(文藝春秋)「文學叢談」(各別項)等がある。殊に日進し活躍をなしたものは「中央公論」であつて、瀧田教授の編輯の下に、吉野作造の論説を掲げ、デモクラシーの宣傳に努め、一躍、太陽の聲を放つた。爾來講談界に第一流の地位を占めて今日に至つてゐる。「改造」は當初、旗幟甚だ不鮮明であつたが、三號頃から新興無產階級的諸運動の機關紙なるかの如き編輯を示し、これに依つて成功を収めたのであつた。「新潮」は中村武蔵夫の編輯であつたが、純文學雜誌として、「中央公論」と共に文壇に重きをなした。なほこの期に於て特長的なことは、評論雜誌乃至文學雜誌と娯樂雜誌が嚴然と分けられて來たことである。これは世界大戰以後に

於ける好況時代の後を受け、一般社會、殊に知識層から娯樂を要求する風潮によるものと思はれる。當時の娯樂雜誌としては、「講談雜誌」(文章俱樂部)「講談俱樂部」(面白俱樂部)「キング」(女性)「新雑誌」(青年)「高峯」(女性)「新雑誌」(青年)「新著」(各別項)等がある。これ等の傾向は後に合流して今の所謂大衆雜誌を生むに至つた。更にもう一つのこの期の特徴は、世報類と婦人雜誌の進出である。特に婦人雜誌は、「主婦の友」(婦女界)「婦人公論」(婦女界)など各々大なる發行部數を有し、昭和時代にかけて驚くべき發展を遂げた。又大震災の前夜、殊に大正末年に於ける大小無數の同人雜誌の出現は甚だ興味ある現象であつた。又社會主義思想乃至労働運動に關するものには、古く「政理叢談」があり、次いで「六合雜誌」(明治十三年)「労働世界」(同二十年)「眞實」(同三十七年)「火輪」(光)「新紀元」(以上同三十八年)「社會主義研究」(同三十九年)等が出たが、この期に入つてから大杉榮、肥田宗村の「近代思想」(大正元年)「増刊」(同二年)等が出た。以上舉げた以外に、各専門の諸雜誌が増多無數に刊行されてゐる。次に詩歌・俳句・演劇に關するものの中、左の

【参考】「明治文化全集」(雜誌部)○「東天紅」東京帝國大學新聞部「明治新聞」○「新著月刊」○「中央公論」(改造)○「文庫」(青年文)○「新聲」(江湖文學)○「めざまし草」(帝國文學)○「中央公論」(反省雜誌)○「各別項」○「太陽」(文藝俱樂部)○「少年世界の」(三藝苑)○「文章世界」○「太平洋」(文藝俱樂部)○「女學世界」(女學世界)○「中學世界」(文章世界)○「ホトギス」(三十四年)○「明星」(小天)○「萬年草」(文藝界)○「獨立評論」(三十七年)○「新潮」(改題)○「活文壇」(明治三十二年)○「秀才文壇」(明治三十四年)○「女子文壇」(明治三十七年)○「新著百種」(小説)○「江戸紫」(千葉萬紅)○「やまと」(新小説)○「草分舟」(文庫)○「日本の文學」(各別項)○「貴女の友」○「文學雜誌」(以長都女)○「我樂多文庫」○「太陽」(新小説)○「再刊」(各別項)等はこの機運に乗

【著】山口安國「成立」本書の末に天明元年...

【著】山口安國「成立」本書の末に天明元年...

【著】山口安國「成立」本書の末に天明元年...



ウトサトスチーフ

ある。フランスに自然主義が起つて以来...

二氏に會し、その忠告によつて紀州の豊高岡...

洲各地の山嶽ある文庫にたづね、自らも亦蒐...



佐藤誠實

【著】山口安國「成立」本書の末に天明元年...

【著】山口安國「成立」本書の末に天明元年...

【著】山口安國「成立」本書の末に天明元年...

【著】山口安國「成立」本書の末に天明元年...



佐藤春夫

【著】山口安國「成立」本書の末に天明元年...

正十三年三月小田中タミと結婚し、昭和六年再び谷崎との間に女房渡問題を起して世人の視線をあつめた。大正九年に臺灣及び支那編纂に、昭和二年には支那に旅行したことがあつた。

【作風】唯美的な上品さ、高踏的な趣味、浪漫的な情感を併せもつてゐる肉情的な作家で、谷崎潤一郎やエドガー・アラン・ポー等の一面の影響を受け、一種の青白い熱情とも言ふべきものを創造したところに、大正文學に於ける獨白性が認められる。それは彼の文學の特色たる近代的な愛慕味と、實際的な官能の匂いと、神秘的な怪奇さ等から醸成されたもので、その境地は谷崎潤一郎の藝術の世界を更に小さく、その代り一層細密にし、それに肉感的分子の代りに精神的な要素を加へたものと思へばよい。即ち微妙な感覚と神秘的な弱々しさをもつ彼は、その境地に滑り込む様な陰翳をも巧みに描き出してゐる。彼の文學は藝術派に属すべきもので、前期には主として泰西近代の類書美を描いてゐるが、又一面日本固有の風雅な心境にも觸れてゐる。後期には特にその傾きが強い。元來が詩人肌の作家で、初期には抒情詩を主として作つてゐたが、小説を書き出してからも、その作品は、何れも詩人的な氣風に富む文章で綴られた散文詩の如き趣を示してゐる。従つて思想的な分子が多いと共に、その文學は總じて異國的な風合を帯びてゐる。そして時には支那風の題材を取扱つたものや、京語風な作柄のもの等をも好んで書いてゐる。【著作】(短篇)西班牙大の家○或る女の幻想○指紋○李太白○お朝とその兄弟○笛吹きと王との話○海邊の望樓にて○美しき町○剪られた花○美人

○怪しすぎる○一夜の宿○歌世家の誕生日○故人○賣笑婦マリ○空屋○お坊○マダム・ルツウスの遺書○女房渡問題○新秋の記○F.O.U.の晩會○悪魔の玩具○春風馬場園遊○陣送○ぼろとる文(長篇)田園の愛慕○都會の愛慕○田園の愛慕(田園)○去年の雪いまいづこ(短篇)病める畫後○お朝とその兄弟○美しき町○佐藤春夫遺稿○お朝と佐藤春夫遺稿(感傷集)藝術家の喜び○退屈讀本○回想自傳等。右の外、別に單行本として、田園の愛慕(都會の愛慕)暮春物語(女房渡問題)南方紀行等がある。なほ現代小説全集第六卷(現代長篇小説全集第二十卷)現代日本文學全集第二十九卷(明治大正文學全集第三十八卷)等に、各々數篇の作品が収載されてゐる。

佐藤七太夫(田村俊子)を見よ。
【御祭歌】伊勢皇太神宮の御祭歌は、延暦二十三年に成つた「皇太神宮御祭式帳」に見えてゐる。これは伊勢皇太神宮の御祭歌の終つた後、神官等が大御宮の直會所に集集して、御祭歌を行ふ時に奏する歌である。故に直會歌とも云ふ。御祭歌及びその後に奏する御歌の二首は次の如くである。
さとうろの御祭歌
とどろに(直會歌)
百敷の大宮人の樂しみと打つたるは宮もどろ
とどろに(直會歌)
百敷の大宮人の樂しみと打つたるは宮もどろ
【御祭歌】伊勢皇太神宮の御祭歌は、延暦二十三年に成つた「皇太神宮御祭式帳」に見えてゐる。これは伊勢皇太神宮の御祭歌の終つた後、神官等が大御宮の直會所に集集して、御祭歌を行ふ時に奏する歌である。故に直會歌とも云ふ。御祭歌及びその後に奏する御歌の二首は次の如くである。

外宮の御祭歌は、「大宮司常長記」(大物忌弘重記)に見えてゐる。古語集。上二句は「度會の豐受の宮に」とあり、第三句「御祭立つ」と以下は、前の直會歌と大方向同じで、平安朝時代より行はれたものであらう。即ち「豐受大御宮御祭式帳」に、御祭歌、伊勢歌、御歌の名があつて、その歌の省略せられたものがこれである。

【春日若宮御祭歌】大和國春日若宮御祭歌と云ふものが傳はつてゐる。古正本も同社にあると云ふ。白拍子が加はつてゐるから、白拍子盛行時の歌であらう。三段に分れて各段とも、初め、白拍子、風相子の舞、中の歌、末の歌の四歌より成り、全部で十二首の歌がある。最初の歌を記すと、
初め、若宮の代久しきまをきためしは神も神も
けん佐吉の松や
白拍子、春日若宮御祭歌は、延暦二十三年に成つた「皇太神宮御祭式帳」に見えてゐる。これは伊勢皇太神宮の御祭歌の終つた後、神官等が大御宮の直會所に集集して、御祭歌を行ふ時に奏する歌である。故に直會歌とも云ふ。御祭歌及びその後に奏する御歌の二首は次の如くである。

たものであらう。鼓の外に笏子や和琴の伴奏があり、巫女が一人舞、また相舞に舞つた。なほ春日神社に傳へられる神事歌は多く、就中、御田植祭(御田)の歌は名高いが、近世では寧ろ住吉神社の御田植式に盛大な奉られた。鎌倉時代に至つては、正徳元年正月より始まつたと云ふ水谷神樂があり、二首の歌を傳へた(明治七年刊のしるし)。
水谷(その人の)を讀んで給ふいざ我とも水遊びせ
A
【氣比の神樂】越前國氣比大神宮で行はれる神樂歌である。由来古き同社の事ゆゑ、古くより神樂歌もあつたであらうが、平安時代の神樂歌は、承徳本(百首集)二卷(重訂)神樂本(行會刊、日本古曲全集(重訂)上巻)に出してゐる。それによると、本末二部より成り、兩者合して一首をなし、全部で七歌ある。最初の歌を掲げる。

本道の口久末歌田のや麻の葉の地ゆるを夜宿
り舞よとや神の夜宿り舞よとやおけ
本道の葉の地ゆるを夜宿り舞よとや神の夜宿り舞よとやおけ
【北御門の神樂】北御門と云ふのは、伊勢大神宮の本社の一である北御門神社の事と思はれる。然らばこれは、伊勢神樂の一とすべきである。その平安朝時代に行はれた事は、承徳本百首集に、北の御門の御神樂と題し、本末各別歌として十歌、但し終りの一歌は本末合して一首となし、合計九首の歌を載せたので明かである。(藤田)

佐渡狐(能狂言)【格式】本神文濟相傳の部(大藏書)。
【解説】越後の百姓と佐渡の百姓が、上堂へ御年貢を納めに行く道で出會ひ、色々お話を

し、佐渡には狐があるの論となり、結局一腰を賭けて來者に審判して貰ふことにする。そこで佐渡の百姓は賄賂を使つて來者に狐の形、眼、尾の色を教へられて越後の百姓を偽り騙して、越後の百姓はどうも來者の態度が狐に落ちないといふと改めて佐渡の百姓は、尾や眼の事を言つて逃げるが追付かず、遂に東天紅といつて啼くとて化の皮を纏はす。
【備考】能狂言の百種物としては、梅畑な形式を取つてゐるだけに異色のものがある。驚流和泉流では、啼聲が「ちゅくわい」となつてゐる。「ちゅくわい」は、「鷹流流」巻一に本勝寺日能の句として見えてゐる。「ちゅくわい」とは子がひのうづら哉、でも知られはいと啼くは子がひのうづら哉、でも知られるやうに、鶉の啼聲である。なほ賄賂に牛を贈けると云ふ書もあるが、この方が百姓には相違である。佐渡に狐があるといふ云ふ全曲展開の種は、彼の國の狸に、「佐渡に無いもの」狐と云ふと云ひ、又世俗に、「四國に狐無く佐渡に狸無し」と云ふ類に基いたものであらう。「耳袋」にも、「狸に云、三部に狐なしと傳へし通り、佐渡の國に狐なき由」と見えてゐる。(藤田)

佐渡七太夫(田村俊子)を見よ。
【御祭歌】伊勢皇太神宮の御祭歌は、延暦二十三年に成つた「皇太神宮御祭式帳」に見えてゐる。これは伊勢皇太神宮の御祭歌の終つた後、神官等が大御宮の直會所に集集して、御祭歌を行ふ時に奏する歌である。故に直會歌とも云ふ。御祭歌及びその後に奏する御歌の二首は次の如くである。

【春日若宮御祭歌】大和國春日若宮御祭歌と云ふものが傳はつてゐる。古正本も同社にあると云ふ。白拍子が加はつてゐるから、白拍子盛行時の歌であらう。三段に分れて各段とも、初め、白拍子、風相子の舞、中の歌、末の歌の四歌より成り、全部で十二首の歌がある。最初の歌を記すと、
初め、若宮の代久しきまをきためしは神も神も
けん佐吉の松や
白拍子、春日若宮御祭歌は、延暦二十三年に成つた「皇太神宮御祭式帳」に見えてゐる。これは伊勢皇太神宮の御祭歌の終つた後、神官等が大御宮の直會所に集集して、御祭歌を行ふ時に奏する歌である。故に直會歌とも云ふ。御祭歌及びその後に奏する御歌の二首は次の如くである。

【花街壽々女】人情本 三冊(作者)鼻山人(重工)白水漁人(重訂)の既著【名題】花街と角落。さとを佐渡原を吉原と角落するのを、更にさとと角落れたのである。院體體興とは、酒落本「花街」(文政五年鼻山人作)の續編の義。【刊行】文政九年(諸本)人情本傑作集下巻(帝國文庫)所収。【題材】角落にもある如く、酒落本「花街」の續編(院體)と云ふのは正確の意味の續編ではなく、単に連絡のある義に用ひる語)で、「花街」は遊女玉菊を主人公としたものである。玉菊は新原角町中萬字屋長衛門への遊女で、二十五歳で病死した有名な妓である。本篇は玉菊の死後を叙し、それにお菊・幸介の情話を結び付けたものである。
【解説】萬壽屋玉菊は情人彌さんを松田屋の半部と争ひ、思ひ詰めて自殺した。その新造玉草も今は菊の井と改名して、呼び出しの遊女となり、売小ても菊里と改めて新造となつてゐる。今日も菊の井の情人幸介が来て居り、何かにつけて亡き玉菊の噂が出る。幸介は自宅の内情、實父は死し、繼母に自分の放蕩をやましく言はれて面白くない事などを物語る。折柄新造の菊里が、自分の初買客か

【参考】河竹阿彌(續)歌伎傳代記(河竹) 讚岐典侍(のち)歌人(姓名)古來讚岐典侍と三位頼政の女二條院讚岐とす説があり、藤岡作太郎博士も同説であるが、日本文學史(安部)のこの説は明かに誤りで、現在では中右記(嘉永二年十二月一日鳥羽天皇即位の條を根據として、讚岐典侍を伊豫三位藤原兼子とする説(宮内省文書)藤田鳴鶴、(讚岐典侍)藤井孝と、伊豫三位の妹が讚岐典侍兼子とする説(歴史上に於ける乳母の勢力)和田英三)及び「中右記(康和四年正月一日の條、天祥體記(兼子)伯家雜記(即位奉帳並役人事)等の記録を根據として兼子の妹藤原長子となす説(讚岐典侍日記の作者に於て)藤井孝、(讚岐典侍日記の作者に於て)玉井幸助)とがあるが、そのうち長子説が最も妥當であらう。

【参考】(一)讚岐典侍を藤原長子とすれば、その關係は、康和三年十二月晦日堀河天皇の御時となり、讚岐典侍と呼び、同四年元且の御時、帝の大漸に當り兼子を賜つた讚岐典侍(嘉永二年七月、堀河帝の重患に際して病床上に侍し、帝の大漸に當り兼子を賜つた讚岐典侍日記)の、鳥羽帝の御時となり、その年の十二月一日、同帝の即位式に於て兼子に奉仕し、天祥體記(兼子)と、それ以後約十年間、讚岐典侍と稱し、新帝に仕へた。退職後鳥羽院の信任厚く、時折天機を奉伺した。元永の初年精神に異状を呈し(長秋記)てからの關係は未詳である。(二)讚岐典侍を兼子とすれば、その關係は「中右記」の歿年三十歳とすれば、永正五年に出生し、承暦三年三十歳の時、敦家との間に兼子をもうけた(兼子分産)。丁度その時、御誕生の堀河帝の乳母として宮中に出仕して乳を過め奉つた。應徳三年十二月十九

【参考】(一)讚岐典侍を藤原長子とすれば、その關係は、康和三年十二月晦日堀河天皇の御時となり、讚岐典侍と呼び、同四年元且の御時、帝の大漸に當り兼子を賜つた讚岐典侍日記)の、鳥羽帝の御時となり、その年の十二月一日、同帝の即位式に於て兼子に奉仕し、天祥體記(兼子)と、それ以後約十年間、讚岐典侍と稱し、新帝に仕へた。退職後鳥羽院の信任厚く、時折天機を奉伺した。元永の初年精神に異状を呈し(長秋記)てからの關係は未詳である。(二)讚岐典侍を兼子とすれば、その關係は「中右記」の歿年三十歳とすれば、永正五年に出生し、承暦三年三十歳の時、敦家との間に兼子をもうけた(兼子分産)。丁度その時、御誕生の堀河帝の乳母として宮中に出仕して乳を過め奉つた。應徳三年十二月十九

日、堀河天皇の御即位式に、從五位上で兼根に奉仕し(天祥體記(兼子)、寛治元年四月十六日には賀茂祭に使となる(長秋記)。同年六月十日には既に讚岐典侍と呼ばれて居り(兼子分産)記、寛治二年十二月十七日には八十鳥の使となつて京都を出發した(中右記)。寛治四年、敦家(兼子分産)の歿、同七年二月二十二日には既に三位となつて居り(中右記)、康和三年五月十六日には伊豫三位と呼ばれて居る(兼子分産)又嘉永二年七月二十四日には堀河院の重患を賜ひ(兼子分産)中右記、嘉永二年八月五日には出家し(中右記)、長承二年七月十三日、八十四歳を以て死去して居る(中右記)。(作品)讚岐典侍日記(兼子)その他、千載集卷十四懸四に伊豫三位の歌を一首載せてある。

【参考】讚岐典侍日記の作者に就て、同上(わ)竹大正六(二)〇歴史上に於ける乳母の勢力(和田英三)(國史館報誌明治四五ノ一)〇讚岐典侍日記の作者について、玉井幸助(史學雜誌四〇ノ九) (徳田)

【参考】讚岐典侍日記(のち)日記(一)巻の御ありさま、内侍のすけ讚岐とか聞え給ひ、こまにかかかれたるふみ侍りとかやとあり、新勅撰集(一八三三)に同じ頃香隆寺に参りて紅葉をみてよみ侍りける。堀河院讚岐典侍」と同書して、日記中の和歌をさめてある。【名稱】「さぬきてんじ」に普通通に呼ばれて居るが、「さぬき」のつぎにつぎ、と呼ぶ方が正しからう。本朝書目録に、讚岐典侍日記三巻と見え、本朝書目録にも同様に見え、「徒然草」には讚岐典侍日記と出てをり、「八雲御抄」の私記の條に、堀河院日

【参考】(一)讚岐典侍を藤原長子とすれば、その關係は、康和三年十二月晦日堀河天皇の御時となり、讚岐典侍と呼び、同四年元且の御時、帝の大漸に當り兼子を賜つた讚岐典侍日記)の、鳥羽帝の御時となり、その年の十二月一日、同帝の即位式に於て兼子に奉仕し、天祥體記(兼子)と、それ以後約十年間、讚岐典侍と稱し、新帝に仕へた。退職後鳥羽院の信任厚く、時折天機を奉伺した。元永の初年精神に異状を呈し(長秋記)てからの關係は未詳である。(二)讚岐典侍を兼子とすれば、その關係は「中右記」の歿年三十歳とすれば、永正五年に出生し、承暦三年三十歳の時、敦家との間に兼子をもうけた(兼子分産)。丁度その時、御誕生の堀河帝の乳母として宮中に出仕して乳を過め奉つた。應徳三年十二月十九

【参考】(一)讚岐典侍を藤原長子とすれば、その關係は、康和三年十二月晦日堀河天皇の御時となり、讚岐典侍と呼び、同四年元且の御時、帝の大漸に當り兼子を賜つた讚岐典侍日記)の、鳥羽帝の御時となり、その年の十二月一日、同帝の即位式に於て兼子に奉仕し、天祥體記(兼子)と、それ以後約十年間、讚岐典侍と稱し、新帝に仕へた。退職後鳥羽院の信任厚く、時折天機を奉伺した。元永の初年精神に異状を呈し(長秋記)てからの關係は未詳である。(二)讚岐典侍を兼子とすれば、その關係は「中右記」の歿年三十歳とすれば、永正五年に出生し、承暦三年三十歳の時、敦家との間に兼子をもうけた(兼子分産)。丁度その時、御誕生の堀河帝の乳母として宮中に出仕して乳を過め奉つた。應徳三年十二月十九

【参考】(一)讚岐典侍を藤原長子とすれば、その關係は、康和三年十二月晦日堀河天皇の御時となり、讚岐典侍と呼び、同四年元且の御時、帝の大漸に當り兼子を賜つた讚岐典侍日記)の、鳥羽帝の御時となり、その年の十二月一日、同帝の即位式に於て兼子に奉仕し、天祥體記(兼子)と、それ以後約十年間、讚岐典侍と稱し、新帝に仕へた。退職後鳥羽院の信任厚く、時折天機を奉伺した。元永の初年精神に異状を呈し(長秋記)てからの關係は未詳である。(二)讚岐典侍を兼子とすれば、その關係は「中右記」の歿年三十歳とすれば、永正五年に出生し、承暦三年三十歳の時、敦家との間に兼子をもうけた(兼子分産)。丁度その時、御誕生の堀河帝の乳母として宮中に出仕して乳を過め奉つた。應徳三年十二月十九

【参考】(一)讚岐典侍を藤原長子とすれば、その關係は、康和三年十二月晦日堀河天皇の御時となり、讚岐典侍と呼び、同四年元且の御時、帝の大漸に當り兼子を賜つた讚岐典侍日記)の、鳥羽帝の御時となり、その年の十二月一日、同帝の即位式に於て兼子に奉仕し、天祥體記(兼子)と、それ以後約十年間、讚岐典侍と稱し、新帝に仕へた。退職後鳥羽院の信任厚く、時折天機を奉伺した。元永の初年精神に異状を呈し(長秋記)てからの關係は未詳である。(二)讚岐典侍を兼子とすれば、その關係は「中右記」の歿年三十歳とすれば、永正五年に出生し、承暦三年三十歳の時、敦家との間に兼子をもうけた(兼子分産)。丁度その時、御誕生の堀河帝の乳母として宮中に出仕して乳を過め奉つた。應徳三年十二月十九

【参考】(一)讚岐典侍を藤原長子とすれば、その關係は、康和三年十二月晦日堀河天皇の御時となり、讚岐典侍と呼び、同四年元且の御時、帝の大漸に當り兼子を賜つた讚岐典侍日記)の、鳥羽帝の御時となり、その年の十二月一日、同帝の即位式に於て兼子に奉仕し、天祥體記(兼子)と、それ以後約十年間、讚岐典侍と稱し、新帝に仕へた。退職後鳥羽院の信任厚く、時折天機を奉伺した。元永の初年精神に異状を呈し(長秋記)てからの關係は未詳である。(二)讚岐典侍を兼子とすれば、その關係は「中右記」の歿年三十歳とすれば、永正五年に出生し、承暦三年三十歳の時、敦家との間に兼子をもうけた(兼子分産)。丁度その時、御誕生の堀河帝の乳母として宮中に出仕して乳を過め奉つた。應徳三年十二月十九

宗祇の時、飛鳥井推親に就いて、歌道の實際研究を始めた。その豊富な天賦は、文明十三年の千首歌、同十六年の結語千首歌に依つて明かに左證されてゐる。同十七年には「源氏物語」の筆寫を終へ、宗祇や實朝と清談の宴を催した。折しも宗祇は推親より二十歳の年少でありながら、常軌より「古今傳授」を授かり、衆望を己一人に集めてゐた。明徳の頃、實朝は宗祇と交ること日に深くなり、その啓蒙を受けるに至つて、歌道は一層深くなつていつたらしい。宗祇・實朝は、常に携へて實朝の邸を訪つた。文明十七年閏三月、實朝が永年の希望であつた源氏五十四帖を筆寫し終へた時など、共にその歡喜を分つてゐることが「實朝公記」の中に窺へる。かくて長享元年宗祇は遂に「古今傳授」をその最高弟として實朝に與へたのであつた。實朝はかくて延徳元年(三十五歳)正二位權大納言に陞進するに及び、宮廷に缺くべからざる人物として仰がれた。文道に於て毎日宗祇や實朝等の訪問を受け、歌道の庇護者として、免考、紙類を彼等に給與してゐたのみならず、その好學の性は萬般の古典學に博通して、一世の師範であつた。即ち文龜元年後柏原帝の御座時に際しては、皇室費不足にて典物を取上げ難かつたのを、實朝の奔走で幕府から一萬匹を獻せしめたなど、彼の帝王の精神の輝かしい一發露と見るべきである。その頃十年ばかりの間に、常軌・推親等相ついで逝つたが、宗祇も御座時の翌年示寂した。文明より明徳にかけて、御座時の歌道の普及して行つたことは、既に實朝に就する。月次會、法樂會の外に、様々な機會ごとに會合が催され、勤點あることは勿論、義政の將軍點もあれば、道灌の合點も行はれた。

宗祇・實朝の後の實際の地位は、益々自重すべきものがあつた。永正十二年(六十歳)主上が彼をして大臣に列せしめられたとされる時、これを固辭し、翌年四月薨じたに就いても、いづれの關係があつたにせよ、彼の文筆上の使命を情つた結果だらうと思つた。明金刺斗に受戒し、自らを科刺斗と云つた。大永六年後奈良帝の御即位後、特に自由の身となり得て、佛寺參詣や古跡行脚に餘生を送つた。石山參詣の際奉納した「詠源氏物語卷々和歌や、高野參詣日記は、天文二年即ち薨去の三四年前に出来たものやうである。八十歳近い人の作として、その堅實な筆致に値する。大正四年その忠誠の徳に基き更に従一位の贈位が行はれた。



【著作】和歌作法(巻一、巻二) (歌書の儀式に關したるもの) 細川右京大夫自歌合設(一編、(巻一、二) 川原元(の)の自歌合に關したるもの、(巻三) 五月に於て) 再草三十七卷(巻一、二) 文龜元年より天文五年に及ぶもの、(巻三) 實朝五年の氏物語卷々和歌や、高野參詣日記は、天文二年即ち薨去の三四年前に出来たものやうである。八十歳近い人の作として、その堅實な筆致に値する。大正四年その忠誠の徳に基き更に従一位の贈位が行はれた。

實朝の生前は宋朝曹王山長老であり、自分のその長老の門弟であるといつた。實朝も同様の夢を見てゐたので、大に好奇心を起し、一つには自分の前生住んでゐたところを見、一つには海外旅行を試みようと思へ、人々の反對を顧みず、陳和卿に命じて唐船を修造させた。翌年四月船は出来たが、由比ヶ濱では逆水し得られなかつたので、渡宋は實現しなかつた。建保六年六月、鶴ヶ岡に左大將の拜賀を行つたが、駿東調度與軍などすべて後鳥羽院から下し賜つたものであつた。十二月二十七日夜、雪を降して鶴ヶ岡に拜賀式を行つたが、退出に當り、石階の際で公卿のために害された。公卿は義時の使儀に乗つて實朝を執し、又自らも亡んだのであるとする説もあるが、容易に信ぜられない。

れに拘らず、再び精進校訂加點に努め、また當時舶來した宋本等の購置を計つたが、金澤引退の後も興隆の遺蹟を止めなかつた。金澤文庫の創立者としての實朝とするのが普通であるが、實朝の子孫、關時、貞顯等によつて金澤家の藏書益々増加し、稱名寺内に保管せられて、金澤氏滅亡後も亡びず、後世に傳へられた。(金澤文庫藏)

【参考】右文故事附録(正書) 金澤文庫と足利學校(中世に於ける源氏家系) (關時) 實朝の系譜 (關時) 歌人 (姓) 源 (幼名) 千鶴 (家系) 父は賴朝、母は政子、兄は賴家(千鶴) 建久三年八月九日、名越の灌御所に生れ、承久元年(一八七五)正月二十七日、明公卿に就き、享年二十八(墓所)「善養院」に依れば、鎌倉藤長院にあるべきであるが、今は善養院寺にその墓と稱するものがある。(關時) 建仁三年八月、將軍賴家が大事に罹つたので、天下を二分して長子一鶴と舎弟千鶴とに與へようとの沙汰があつた。一鶴の外戚比企能員は憤慨して亂を起したが、失敗に終つて千鶴即ち實朝が將軍となり、九月七日に宣下があつた。元久元年十二月坊門實朝の女が御寮所として下着した。初めは足利滿家の女が御寮所として下着した。二月中將の拜賀を勤ヶ岡に行つた。鎌倉に育つた武士として京都の文化形式を脱んだのである。五月文殊供養を行ひ、一生の内に五十回續ける祈願を立てた。承元二年五月御寮所の侍兵衛清綱が京都より下着して、其後重と稱する「古今集」を奉つ

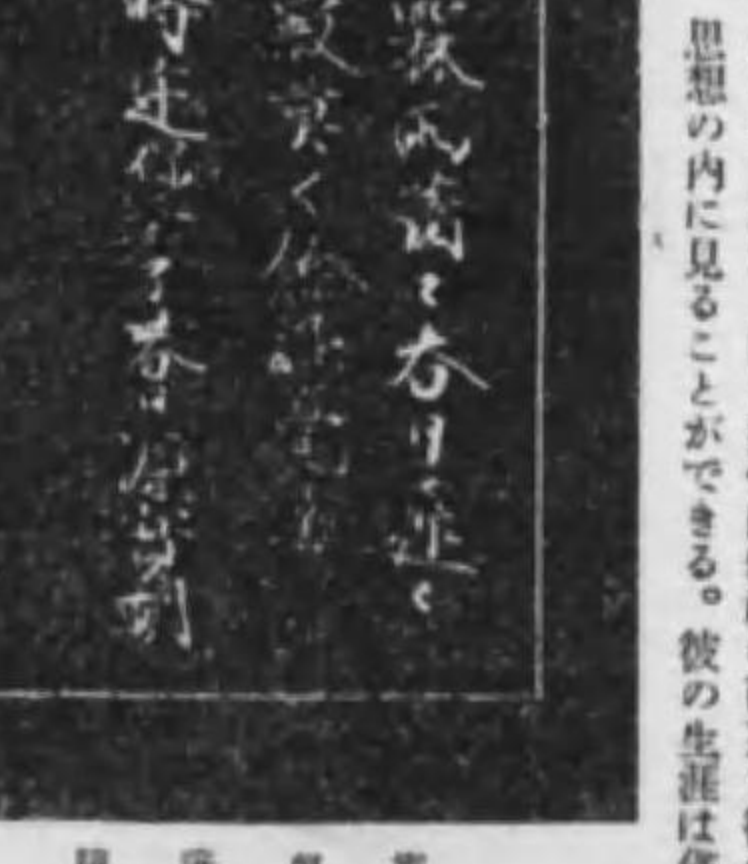
たので實朝は非常に悦んだ。承元三年七月夢想によつて和歌二十首を住吉神社に奉納し、併せて建永元年以来の作歌三十首を定家に送つて合點を乞ふた。翌月定家が合點して返して、別に「近代秀歌」(別題)を贈つた。彼は靈感によつて作歌に専念するに至つたのである。承元四年夢徳太子の御影を供養し、その後も二三度行つた。建保元年十月鴨長明が鎌倉に下つてゐたので度々これを召された。この時、長明は方丈記に見えるやうな無常觀を説いたと想像する説もあるが、信じられぬ。建保元年五月、和田義盛の亂があり、幕府方も苦戦し、實朝は戰捷を鶴ヶ岡に祈るといふ程であつたから、彼の受けた精神的影響も可なり大きかつたと思はれる。十一月定家に「萬葉集」を求めて相傳の私本を得、大に悦んでゐた宋人陳和卿が下着し、實朝に講して



(藏寺蓮大郎京) 鎌本朝實源

貴客の前生は宋朝曹王山長老であり、自分のその長老の門弟であるといつた。實朝も同様の夢を見てゐたので、大に好奇心を起し、一つには自分の前生住んでゐたところを見、一つには海外旅行を試みようと思へ、人々の反對を顧みず、陳和卿に命じて唐船を修造させた。翌年四月船は出来たが、由比ヶ濱では逆水し得られなかつたので、渡宋は實現しなかつた。建保六年六月、鶴ヶ岡に左大將の拜賀を行つたが、駿東調度與軍などすべて後鳥羽院から下し賜つたものであつた。十二月二十七日夜、雪を降して鶴ヶ岡に拜賀式を行つたが、退出に當り、石階の際で公卿のために害された。公卿は義時の使儀に乗つて實朝を執し、又自らも亡んだのであるとする説もあるが、容易に信ぜられない。

活動的現實的な空気を味ひ、文化の彼れに於ける鎌倉にあつて京都の文化に渴仰し、これを吸收して固有の武士氣質と調和させた。その時代は平安朝文化の行詰りが、政治的社會的變化に伴つて打開せらるべき機運にあつたので、彼の思想の中には時代的の現に於けるものがある。彼は自我ははつきり意識すると同時に他人の人格をよく理解してをり、天子將軍人民、國家社會といふ全體的な考も相當にもつてゐた。即ち近代的精神の萌芽を彼の思想の内に見ることが出来る。彼の生涯は僅か二十八歳であるが、十八歳・二十二歳を轉換として、凡そ三つに分けて彼の精神生活の考へる事が出来る。第一期は少年らしいロマンチックな時代で、驚きと悦びに満たされてゐる。作歌に於ては「新古今集」を粉本とした時代である。第二期は第一期の花やかさがやゝ減薄し、繪畫・物語・英雄を悦び、古代趣味を呈し、「古今集」を粉本として作歌した時代である。第三期は著しく流動的になり外國趣味を加へ、「萬葉集」を粉本として作歌した時代である。彼のもつてゐた新鮮な感受性と情熱



鎌本朝實源

的な力はこゝに至つて發揮せられ、多くの萬葉ぶりの傑作を後代に遺したのである。天も彼に今少しく餘を假したなら、更に歌壇の發展を見るに至つたであらう。題材に就いて自由であるが如く、用語に於ても、佛語、漢語等を自由に使ひこなししてゐる點は、注目すべきである。『影戀』彼が萬葉調の歌を詠み、現に『萬葉集』一部をもつてゐたことは、歌壇を動かすに及ぶ、正一位を賜はつた。耶の南庭からは稻荷山の森が見えるので、南庭に下りる時は當に冠をつけ、時に忘れぬことがあると、藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。又藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。又藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。

佐野市松 忠平の長子、師範の兄、母は宇多天皇の皇女、教敏、頼朝、實朝の父。『國史』朱雀、村上天皇の三天皇に仕へ、承平元年三十三歳の時、同四年中納言、三位となり、更に大納言、右大臣を歴任して、從一位太政大臣に陞り、攝政關白に任じた。康保四年村上天皇崩御、冷泉天皇御即位に當り、御病氣のために大納言に出御になるのが困難だつたので、大納言を兼せ、行ふやう建議した。天祿元年、病むに及んで天下に大政を行ひ、赤子に及び、正一位を賜はつた。耶の南庭からは稻荷山の森が見えるので、南庭に下りる時は當に冠をつけ、時に忘れぬことがあると、藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。又藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。又藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。

佐野市松 忠平の長子、師範の兄、母は宇多天皇の皇女、教敏、頼朝、實朝の父。『國史』朱雀、村上天皇の三天皇に仕へ、承平元年三十三歳の時、同四年中納言、三位となり、更に大納言、右大臣を歴任して、從一位太政大臣に陞り、攝政關白に任じた。康保四年村上天皇崩御、冷泉天皇御即位に當り、御病氣のために大納言に出御になるのが困難だつたので、大納言を兼せ、行ふやう建議した。天祿元年、病むに及んで天下に大政を行ひ、赤子に及び、正一位を賜はつた。耶の南庭からは稻荷山の森が見えるので、南庭に下りる時は當に冠をつけ、時に忘れぬことがあると、藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。又藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。又藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。

佐野市松 忠平の長子、師範の兄、母は宇多天皇の皇女、教敏、頼朝、實朝の父。『國史』朱雀、村上天皇の三天皇に仕へ、承平元年三十三歳の時、同四年中納言、三位となり、更に大納言、右大臣を歴任して、從一位太政大臣に陞り、攝政關白に任じた。康保四年村上天皇崩御、冷泉天皇御即位に當り、御病氣のために大納言に出御になるのが困難だつたので、大納言を兼せ、行ふやう建議した。天祿元年、病むに及んで天下に大政を行ひ、赤子に及び、正一位を賜はつた。耶の南庭からは稻荷山の森が見えるので、南庭に下りる時は當に冠をつけ、時に忘れぬことがあると、藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。又藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。又藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。

に罪に陥れられんとするが、武田東馬の明察によつて大之進は切腹、治太郎は死刑に處せられ、應永は許されて鎌倉に赴き、幾時、聞及ぶ、藤原安の遺囑を助けて武術を現はし、慶安が一味に加へようとするを辭して、武州に入り、地生郡成田不動の日に果し合ひの助太刀をしたり、象潟昇之助に邂逅して武術を指南したりして、奥州に上つたが、寒氣のために道に行き倒れ、徳川志津三郎や衣類等を賊に奪はれて苦しんでゐる所を、船屋久兵衛といふ律師者に授けられ手厚い看病を受ける。そこで會津の松浦山左衛門へ書を送り、金を借りて久兵衛の恩に報い、松浦家に引き渡されて、志津三郎をも買ひ取ることを得、又領主藤原高の給を辭し、雷殿を以て召抱へられようとするを辭して、上野に向ひ、更に近江長濱に出て、圓らずも爲十郎と會し共に旅を續けた。或は馬方を戒めたり、或は莊官を懲したりして、圓井の城下に到り、斯波家の師範役屋名正を大館義隆と知り、老臣田原樂之助に訴へて仇討を許され、義隆を討つて仇を報い、實朝を取り返す。かくて爲十郎は歸國し、鹿嶋は尾州・奥州・阿州・越前・肥後の諸家が召抱へようと争ふのを、檢使大坪新助の裁きで佐野家に歸り、菊池侯及び母兄にも對面し、暫くの暇を請うて各地に恩義を受けた人々の許を廻遊し、遊子と結婚して日出たく歸國する。

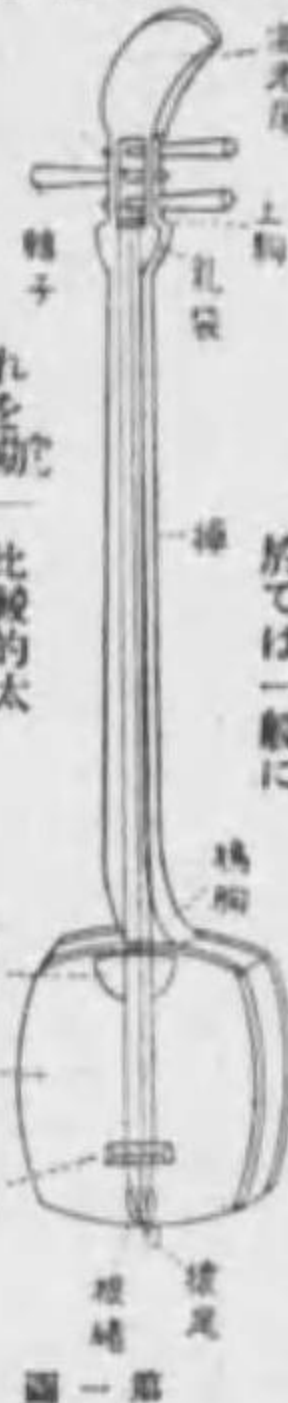
佐橋富三郎 關本作者『生身』生年未詳。明治二十六年一月十四日歿。享年は五十前後。『墓所』東京築地本願寺内淨泉寺。『國史』生誕は名古屋。彼は幕末上方で草雙紙を讀つたこともあつたが、明治初期には京阪歌舞伎界に入り、立作者として活躍してゐた。五年には京都南船場角の芝居に、自作『西國立志篇』(一)『新編高野聖』(一)と『其色色傳』(一)を上演し、大成功を収めた。『其色色傳』(一)は、明治初期の京阪歌舞伎界に、立作者として活躍してゐた。五年には京都南船場角の芝居に、自作『西國立志篇』(一)『新編高野聖』(一)と『其色色傳』(一)を上演し、大成功を収めた。『其色色傳』(一)は、明治初期の京阪歌舞伎界に、立作者として活躍してゐた。五年には京都南船場角の芝居に、自作『西國立志篇』(一)『新編高野聖』(一)と『其色色傳』(一)を上演し、大成功を収めた。

佐野市松 忠平の長子、師範の兄、母は宇多天皇の皇女、教敏、頼朝、實朝の父。『國史』朱雀、村上天皇の三天皇に仕へ、承平元年三十三歳の時、同四年中納言、三位となり、更に大納言、右大臣を歴任して、從一位太政大臣に陞り、攝政關白に任じた。康保四年村上天皇崩御、冷泉天皇御即位に當り、御病氣のために大納言に出御になるのが困難だつたので、大納言を兼せ、行ふやう建議した。天祿元年、病むに及んで天下に大政を行ひ、赤子に及び、正一位を賜はつた。耶の南庭からは稻荷山の森が見えるので、南庭に下りる時は當に冠をつけ、時に忘れぬことがあると、藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。又藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。又藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。

佐野市松 忠平の長子、師範の兄、母は宇多天皇の皇女、教敏、頼朝、實朝の父。『國史』朱雀、村上天皇の三天皇に仕へ、承平元年三十三歳の時、同四年中納言、三位となり、更に大納言、右大臣を歴任して、從一位太政大臣に陞り、攝政關白に任じた。康保四年村上天皇崩御、冷泉天皇御即位に當り、御病氣のために大納言に出御になるのが困難だつたので、大納言を兼せ、行ふやう建議した。天祿元年、病むに及んで天下に大政を行ひ、赤子に及び、正一位を賜はつた。耶の南庭からは稻荷山の森が見えるので、南庭に下りる時は當に冠をつけ、時に忘れぬことがあると、藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。又藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。又藤原忠文は出征したのみで戦はなかつたのだから、賞するに及ばないと言はれる。

倣めたと稱せられる。俗に「しやみせん」といふ。異名に三線・三尾線・三絃・三絃子・絃子等がある。【性質】絃樂器の一。廣く東洋各地に行はれ、各國に依つて多少その形状及び構造を異にする。その中で支那の三絃及び琉球の三絃（共に蛇皮を張る故、俗に蛇皮線といふ）、我が國の三味線は最も多く人に知られてゐる。

【我が國の三味線】その形は第一圖に示す如く、大體に於て胴と棹と天神との三部から成つてをり、胴は音を出す部分で、曲線方形の箱形になり、直徑五六寸位、厚さ三寸餘、四方は桐・桑・花梨等で作られ、表及び裏に猪皮を張り、（調子の品は大皮を張る、表には乳のある方を用ひる。なほ表皮の海老尾、上部、撥の當る所に猪皮と稱して半月形の薄皮を張る。棹は指で絃の各部（こ）を調へて種々の律を持つた音を出すために加減する所、胴から張り渡した三本の絃がその上面に沿つて平行し、上部の天神まで通つてゐる。その上部の天神は三個の糸袋（轉手ともいふ）を備へ、三本の絃の端を巻き付けてある。糸袋の挿入された廣い部分を海老尾といひ、糸袋と棹との間の少し廣い部分部分を乳袋といふ。乳袋の上端に絃が糸袋から出て棹に平行にならうとする部分に象牙製の小さな駒がある。これを上駒といふ。これは二と三との糸だけを文へる所の短い棹である。棹と天神とは一つの材料で作られる。棹の下端は細い棒として調を貫き、その先端は胴の下方に少しく突出してゐる。その下端



比較的太いものを調へる。棹に於ては細いものを用ひ、細いものを調へる。その糸の太さを示すには、その一定長の目方を以て呼ぶ。例へば十二の糸と言へば百指で十二の目方の糸で、その百分の一である一掛の糸を中央から切り、その半分を以て三味線に張るのだから、駒の大ききも流義に依つて異なり、太棹では大きくて高いものを、細棹では小さくて低いものを用ひる。その高さは三分乃至四分位。安いものは竹（黒漆塗）で作られ、高値のものには象牙で作られる。撥は檜・櫻・水牛・象牙等を以て作られるが、象牙を以て最上とす。なほ演奏に當り、胴の上に右手首を載せる際、左手首が滑らぬやうにするために、胴のその部分の側面に桐板と稱するものを用ひる。これは厚紙の上を布を張つたもので作り、胴の側面に被せるのである。三味線を奏するには、正坐して右膝の上に胴を載せ、皮面は正面に向け、棹は四十五度位の角度に斜に持ち、天神は肩又は耳の指を用ひる。で、撥を押へ、右手に撥を持つて、撥の部分に當る位にして撥の角で絃を打つて弾く。また時として絃を撥で強く弾くこともある。これを「すくひ」といふ。時として撥を用ひずに、駒から一寸位上に於て、絃を食指の爪で弾いて奏することも行はれる（例、江戸小唄の如き）。これを「爪弾き」といふ。左手指は絃の本調子各部を初めに於て抑へるのみの働をなす許りでなく、時として指で強く絃を打つて音を出し、これを「打ち」といふ。又指で絃をはじいて音を出す（これを「はじき」といふ）こともある。三味線の調律は極めて普通には三種あり、本調子・二上り及び三下りである。この外一下り・六下り等の調子を用ひられる。今一の糸二の糸、及び三の糸の間の各音の音程を示す次のやうにしてゐる。

Table showing musical scales and intervals for shamisen. Columns include scale names like '本調子' and '二上り', and interval descriptions like '完全四度' and '完全五度'.

三味線に於てはその各絃音の絕對の高さは因定されてゐないで、幾分自由に變化すること

に突き出した部分を橋尾といふ。棹が胴に入らうとする部分を鳩尾といふ。棹及び天神は櫻・檜・紫檀・紅木等で作られ、紅木を以て最上とする。長さは上駒から鳩尾の所まで凡そ二尺六分餘ある。その太さは流義に依つて異なり、義太夫節に用ひるものは最も太く、これを「太」と呼ぶ。長限の如きは細くてこれを「細」と呼ぶ。細きものは幅七八分位、太きものは一寸内外である。絃の下端は撥尾に掛けた所の根緒と稱するものに結び付ける。絃は精良な蠶糸を纏つて作つたもので、三本共その太さが異なり、最も太いのを一の糸、中間を二の糸、最も細いのを三の糸と呼び、一の糸は向つて左の端、三の糸は右の端に張る。但し太棹に於ては一般に

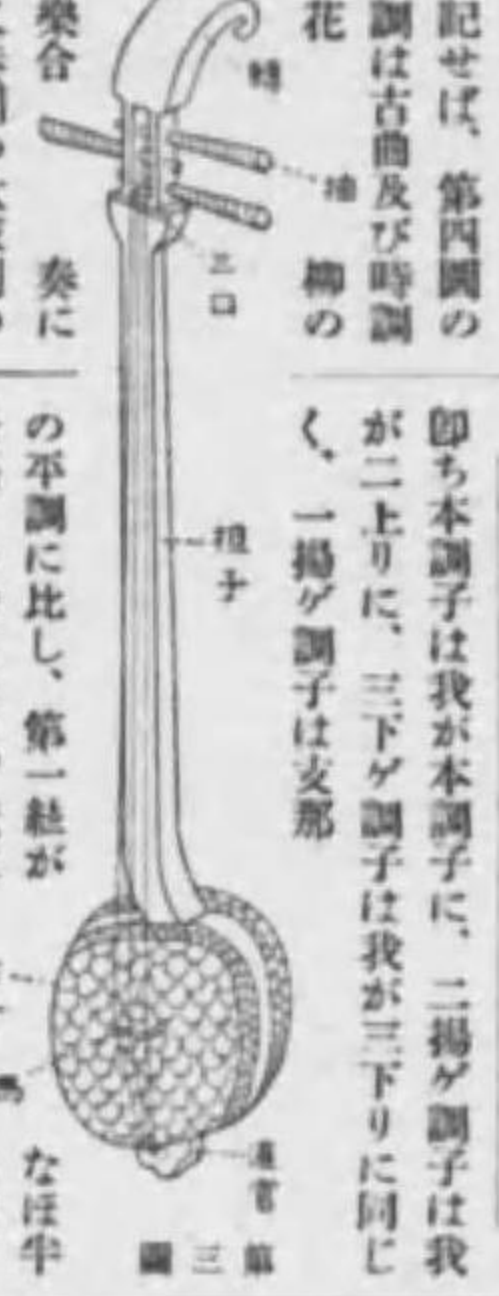
球では第一絃を男絃、第二絃を中絃、第三絃を女絃と呼ぶ。持ち方は我が三味線と全く同じ。但し左手指で撥を押へるのに、小指まで用ひるのが異つてゐる。撥は使用せず、その代り、第五圖に示す如き木製又は角製の義爪を用ひる。これを右手の食指にはめて指で調へつゝ、その先端で絃を弾する。琉球三絃の調子は次の四種類ある。

Table showing different tuning systems for shamisen, such as '本調子', '二上り', '三下り', and '一上り'.

調子名 第一絃 第二絃 第三絃
本調子 黄 黄 金
二上り 黄 黄 金
三下り 黄 黄 金
一上り 黄 黄 金

考尾の形も少しく異なつてゐる（第三圖）。その各部の名稱を圖に示す。皮は蛇皮を張り、駒は竹製で小さい。これを弾するには右手の食指と中指との爪を以てする。若し爪が伸びてゐない場合には、象牙又は牛角製の細長い爪形のもの、糸で爪の上に結び付けて用ひる。又これを弾する際は椅子に腰を掛け、兩股の間に調を載せて演奏する。その各絃の調律には平調・月調・反調の三種がある。

Table showing tuning systems for shamisen: 平調, 月調, 反調.



これを洋式五線譜を借りて記せば、第四圖の如くなる。このうち、平調は古曲及び時調に、月調は新曲に、反調は花柳の情歌に多く用ひられる。支那三絃も歌謡の伴奏と器樂合奏、器樂獨奏に用ひられ、劇場音楽にも、清樂合奏にも、廈門の御前清曲にも、又民間の太鼓詞の如きにも、藝妓の歌伴奏にも、凡て用ひられてゐる。

【琉球の三絃】琉球の三絃は、近來琉球では三味線と呼び、我が内地では蛇皮線又は蛇味線と呼んでゐる。その形は我が三味線と殆ど全く同じく、唯それよりも非常に小さく、約三分の二である。併し古いものは近來のものよりも大きい。皮は蛇皮を張る。蛇皮には主として海蛇を用ひるといふ。又轉手（糸袋）に絃をかける掛方は我が三味線と違つてゐる。一の絃を最下の轉手に、二の絃を中央の轉手に、三の絃を最上の轉手に掛ける。琉

球では第一絃を男絃、第二絃を中絃、第三絃を女絃と呼ぶ。持ち方は我が三味線と全く同じ。但し左手指で撥を押へるのに、小指まで用ひるのが異つてゐる。撥は使用せず、その代り、第五圖に示す如き木製又は角製の義爪を用ひる。これを右手の食指にはめて指で調へつゝ、その先端で絃を弾する。琉球三絃の調子は次の四種類ある。

Table showing different tuning systems for Ryukyuan shamisen: 本調子, 二上り, 三下り, 一上り.

調子名 第一絃 第二絃 第三絃
本調子 黄 黄 金
二上り 黄 黄 金
三下り 黄 黄 金
一上り 黄 黄 金

球の形も少しく異なつてゐる（第三圖）。その各部の名稱を圖に示す。皮は蛇皮を張り、駒は竹製で小さい。これを弾するには右手の食指と中指との爪を以てする。若し爪が伸びてゐない場合には、象牙又は牛角製の細長い爪形のもの、糸で爪の上に結び付けて用ひる。又これを弾する際は椅子に腰を掛け、兩股の間に調を載せて演奏する。その各絃の調律には平調・月調・反調の三種がある。

が出来ると。その際これを調子箱に合せて、一本二本……等といふ。これは一の糸を以てその音を調子箱に合せ、一本は黄鐘に、二本は變鐘に、以下順に十二律の順になり、六本は變鐘になる。近來三味線の旋律を洋式五線譜を假り用ひて記すに當り、かくの如き自由變化をも一々その絕對音の高さで記載することは不便であるから、一種の便宜法を用ひて、その各絃の開放音を第二圖に示すが如くに記すことが行はれてゐる。

三味線は、語り物及び唄物に於ては、歌の伴奏として用ひられる外に、又その中間に於て特に歌なくして樂器の演奏のみを聞かすために用ひられ、これを「合の手」といひ、又歌の出る前に樂器だけを聞かすために用ひられ、これを「前奏」といふ。又特に歌なくして三味線だけ、或は箏尺八等と合奏する曲がある。換言すれば器樂獨奏としても、器樂合奏としても、或は器樂伴奏としても用ひられる。若し特殊な場合に於て、普通の手法以外に複雑な技巧を用ひて奏する時は、これを「曲調」といふ。

【支那の三絃】支那の三絃は「一絃子」と呼び、廣く行はれてゐる。その形は我が國の三味線と似てゐるが、全體が少し大きい。但しこれに二種類あつて、南方から北平・天津邊までは胴の小形のものが行はれ、滿洲邊では大形のものが行はれてゐる。大形のもの則ち我が義太夫三味線位あり、小形のもの則ち我が三味線よりもなほ小さく且つ調味が多い。海

といふ者が出て、大にこれを改良し、琉球歌謡の伴奏樂器として完成せしめた。絃に於て大體今日見られる如き琉球三絃が現れた。但し今日の形は、今から二百餘年前に出た琉球の名匠、眞壁の作った型である。眞壁の作った三絃は古今無比の優秀三絃として、今日に至る迄尊重されてゐる。赤犬子以後三絃は琉球に普及し、婦女のこれを玩ぶ者が多くなつた。その後百年を経て、我が慶長年間（慶應）の島津家は琉球征伐をなし、遂に琉球は我が薩摩の保護國となつたので、我が内地の音楽が多く輸入され、琉球音楽は大に内地化して来たが、同時に國家の存立が危うなされたので、悲劇を帯び類似的になつて来た。その後五六十年を経て漢水といふ者が出て、この類似的氣分に憤慨して潮風に満ちた作曲をやつた。これを漢水流といふ。漢水より三代を経て聞聲といふ者が出て、三絃の形式的發展に力め、聞聲流を開いた。その弟子の屋嘉比朝吉は琉球三絃樂の中興の祖と稱せられる大家で、その流を當流といふ。今日琉球に最も廣く行はれてゐるのはこの當流である。屋嘉比から三傳して天才知宗高が出たが、この人は近代琉球三絃の第一の名手で、平民であつたが、尚温王が一度その演奏を聞かされて、忽ちこれを土族として王宮の樂人となしたといふ。知念の弟子に安富正元と野村安雄との二人の天才がゐる、互に漢をなし、遂に安富正元と野村安雄との二に分れ、互に對立して以て今日に至つてゐる。我が國の三味線は、足利時代の末年に琉球から傳へられたものである。その傳來に就いては多くの異説があるが、最も信すべき所をとれば、永祿年間（琉球の貿易船が堺港に到り、初めて堺へこれを傳へた

てうち嘆くばかりである。帝はもし宮が取られたのでないかと疑はれたが、その様子を無

めにして、萬葉物語(別項)のやうな辛辣な描寫は無く、又同じく御君を敬み出させるに

中に、「萬葉」の言葉遣を十分知らず、除んだ歌には誤りも亦少くない。これ等の點について

したことを、後成定家・爲家等の「萬葉集」を重んじたこと、更に歌合の判や連歌に關しても

期以後の作として不都合はなからう。(諸本)京都帝國大學文學部藏寫本は、奈良繪入十行

へて、さ夜娘と名付けて讀つて、長者はふとした病から他界した。月日の経つて家來

だ泣かれるばかりであった。やがてその日に

【時習考】、歌曲集【名稱】詳しくは歌曲時習考【所收】文政年中「解説」上方

民平等、人材常用の説を高調し、以て當時の氏族政治の弊を痛めんと試みられたものと考へられる。實にこれに依つて、我が國體の基礎が確立されたと言つても、敢て過言ではな

同に互つて、書寫せられた又は上梓せられた、三本共に完全に後世に傳へられ、現に大藏經中に收められてゐる。大正新修大藏經第五十一卷經部一所收、外に聖德太子御製法華

本藏には、他に何等の書名も人名も引かれてゐないから、太子は全く獨立にその藏を造られたわけであつて、本藏が三藏中最も短い

の「註釋摩訶」十卷の文を引いてある所を見れば、本藏は専らこれに據られたことが明かに判る。併しこれに盲従することなく、私撰・私

常に讀誦の態度を以て、先哲の説は十分に尊重され、強ひて新説を立てられるが如きことはなかつた。【影體】本藏は何れも立派な漢文で書かれてをり、恐らく漢文でものされた

同巻も亦諸家説同異略集に於て、支那日本本の十家を列する第八に、大日本國上宮太子を擧げてゐる。鎌倉時代に至つて、三藏學士

【刊行】天明三年【題材】天照大神、釋迦孔子が並りに、老孝に違ふ趣向である。その他、子路・李自等も現れる。

が聞える。大神、釋迦と行つて見ると、孔子が如き釋迦の通子に怖れをなすのか、開

氏平等、人材常用の説を高調し、以て當時の氏族政治の弊を痛めんと試みられたものと考へられる。實にこれに依つて、我が國體の基礎が確立されたと言つても、敢て過言ではな

同に互つて、書寫せられた又は上梓せられた、三本共に完全に後世に傳へられ、現に大藏經中に收められてゐる。大正新修大藏經第五十一卷經部一所收、外に聖德太子御製法華

本藏には、他に何等の書名も人名も引かれてゐないから、太子は全く獨立にその藏を造られたわけであつて、本藏が三藏中最も短い

の「註釋摩訶」十卷の文を引いてある所を見れば、本藏は専らこれに據られたことが明かに判る。併しこれに盲従することなく、私撰・私

常に讀誦の態度を以て、先哲の説は十分に尊重され、強ひて新説を立てられるが如きことはなかつた。【影體】本藏は何れも立派な漢文で書かれてをり、恐らく漢文でものされた

同巻も亦諸家説同異略集に於て、支那日本本の十家を列する第八に、大日本國上宮太子を擧げてゐる。鎌倉時代に至つて、三藏學士

【刊行】天明三年【題材】天照大神、釋迦孔子が並りに、老孝に違ふ趣向である。その他、子路・李自等も現れる。

が聞える。大神、釋迦と行つて見ると、孔子が如き釋迦の通子に怖れをなすのか、開

かねるところが多い。「三嶋庵隨筆」(別冊)の別本と見られる。

三玉集 (くしきふ) 歌集【解説】中世の歌集の中で、柏玉集・雪玉集・碧玉集(新編)の三集をいふ。(久松)

山旭亭眞鏡行 (さんきょてい) 酒落本作者【解説】山旭亭眞鏡行の外に、間道行間道行・旭野行とも書く。小金厚丸(別冊)と同人である事は、酒落本研究家の間には定説となつてゐるが、一般には知られてゐないから説明する。小金厚丸の酒落本に眞鏡行の序がついてゐるのを見るが、「仇手本」の如く、序だけでは果してどちらの人が作つたかわからぬ位である。厚丸は南院海雲院作願之輩有多(安永九年を「内所開會」と改題自序を附して刊行し、眞鏡行も前書の前半を削つて文を改作し、「孔雀集動記」と題して刊行し、「面影多動身」の作者名を削り、自己の名を入れ、金の和良路と改題したり、不徳な事ばかりしてゐる點が兩者共通してゐる。又兩者共に神田藍染川附近に住んでゐる點等から見て、小金厚丸が珠更に烏有の人物を設けたのであらうと推定されるのである。(山崎)

三溪 (さんけい) 備者【姓名】菊池純。字は子嗣【生涯】文政二年生れ、明治二十四年十月十七日没す。享年七十三【因縁】紀伊の人。幕府に仕へて將軍家茂の侍講となり、晩年京郡に住した。【著作】本朝初新編(別冊)三巻○晴雪修抄(一巻)○三溪文抄【批評】詩文家ね長し、清の真蘭園の風があつた。殊に詠物詩の技術は比山と對峙するに足る。(佐々)

三鼓 (さんこ) 樂器【真稱】打鼓【解説】樂樂の管絃合奏に於ける三種の打樂器、即ち太鼓・鉦鼓・鼗鼓(各別冊)の總稱。この三器は樂樂管絃合奏に於て常に相組んで樂曲の拍子變遷を主導し、打音を以てこれを飾るの用をなすものである。通常必ず各器一個づつを使用する。但し鉦に鉦鼓は必ず左方の樂に於てこれを用ひ、右方の樂に於ては鉦鼓の代りに三鼓と稱するものを用ひる。即ち右方の樂に於ける三鼓とは太鼓・鉦鼓・三の鼓(各別冊)の三種を總稱するのである。太鼓及び鉦鼓の裝飾は左方と右方とで多少の相違あることは、それ等の各項に於て述べた通りである。この三鼓は古來各樂家が必ず習得すべき必要な技術となつてゐる。(田邊)

参考源平盛衰記 (さんげん) 四十八卷四十九册【編者】徳川光圀の命によつて今井弘清・内藤百閒が編纂したものである。但し弘清はこの事業の中途で没したので、貞顯がその後を承けて完成した。【成立】元禄二年の冬頃、編纂を完了したものである。【諸本】書寫本の外、史籍館蔵に収めてある現行活字本(天明十七年刊)がある。【解説】「源平盛衰記」の本文を平家物語諸本、印本一本伊藤本十八坂本、鎌倉本、如日本、佐野本、南都本、南都本、東寺本、長門本等の本文と對照してその異同を校註し、なほ史書・文學書凡そ四百部を参照して記事の適否を考訂してある。そして本文四十八卷の外に首巻を設け、凡例・總目次・三鼓指歸(三鼓)・辭賦(三鼓)・著者(三鼓)・釋源平(三鼓)の書初め【釋源平】と名づけ、後に改めて「三鼓指歸」と名づく。三鼓とは源平三鼓、指は肩、指は腰、即ち三鼓指歸の意旨の歸趨する所を表明するの義である。【成立】成立年代に古來異説がある。「源平記」空海僧都傳(修行雜記)「宗體要文」(廣傳)「高僧傳要文」(事相目錄)等は、皆弘法大師御遺教の文に據つて、空海十八歳の時の作と定め、「行化記」(行狀略)「源平抄」(本朝通鑑)等は、「三鼓指歸」序文に據つて二十四歳の時の作と定む。豊明の三鼓指歸註には、成形の時の草案を二十四歳にして再治すと云ひ、源敏の三鼓指歸註(別冊)には舊説を引いて、「初め近士たりし歳之を草し、延暦十六年に至つて之を治し給ふか」と云つてゐる。案するに、十八歳の時草したのを二十四歳即ち延暦十六年に至つて再治すと云ふのが定説のやうである。(由来)空海は初め詩文を學び、又孔子の道をも修めたが、一たび佛法を知るに及んで深くこれに傾倒し、釋源平三鼓の對比論を試み、遂に本書を著して、出家の志願を表明した(空海集)。【諸本】「三鼓指歸」と「三鼓指歸」とを比較すると、序及び卷末十回の時はいく異なるが、その餘は大同小異である。寛政元年(本朝通鑑)高野山御影堂所藏眞鏡本、共に皆眞鏡本に作る。三鼓指歸の刊本には、元禄十年空海遺傳の刊行せるもの、弘法大師全集所載本、その他古版數種がある。【組織内容】上中下三巻より成る。上巻は序及び龜毛先生論、中巻は虛亡隱士論、下巻は假名乞見論である。その内容を略記すれば、こゝに龜角公と云へる者の外甥に野牙公の子といふ源平兒があつた。性質温厚で禮義あること知らず、酒色を樂しみとなして、博識を事となし、陶染して習ひ性となつてゐた。時に龜毛先生と云ふ學者があつて、龜角公の請に應

じ、儒教の立場から懸に説諭して遂に野牙を説伏した(同上)と、ところが同じ座に虚亡隱士といふ道士がゐて、先より、光を和げ狂を示してその説を聞いてゐたが、野牙の戒心を見て大に嘲り、龜毛が病を療するが如きは寧ろ治せざるに如かずとなし、源敏の立場から儒教の仁義忠孝説を批難した。龜毛・龜角・野牙公子等、皆國文なる源敏の哲理を聞いてその説に感服した(同上)中巻。こゝに父、假名乞兒といふ乞丐の善行傳があつて、今日しも鉢を擲けて空路に出で、偶々龜角公が合に到つ

丹鳳翔必自由院、龍威振未格是故詩人、俗安樂以來便意或懷息、吟而賦曼い祝賢終以賦、(續中野山金山野高) 三鼓指歸(三)本編初集自海空

この生死を超えて涅槃に到達することが長壽の教であり、眞の大学であると唱へた。龜毛先生等、自らその遺見を恥ぢ、喜んで出世の最期に休した(同上)下巻。龜角公・龜毛公・野牙公子は、假想人物なることを現はし、共に最勝王經の語に據つて名づけたものである。虚亡と云ふは、老子の所謂虚無に名を得、假名乞兒と云ふも亦假に行乞の僧に名づけたものである。この三人の假想人物の語を借つて三鼓の勝劣を論じ、親護の勝劣を論じ、出家の本懐を論じたものである。「三鼓指歸」は三鼓の勝劣を論じたものであるが、直接の事實について論ぜずして、辭を設けて託したもので、文體より云へば辭賦に屬すべきものである。文詞流麗、思想富麗、以て空海が青年時代に於ける意氣と文藻の一度を窺ふことが出来る。

本文四十巻の外に首巻を設け、凡例・總目次を収めてある。(高木武) **参考平治物語** (さんげい) 三巻六册【編者】徳川光圀の命によつて、水戸藩の今井弘清・内藤百閒が編纂したものである。但し弘清は業半ばにして没したので、貞顯がその後を承けて完成した。【成立】元禄二年に編纂、同六年に刊行【諸本】元禄六年刊行の整版本の外、國書刊行會本がある。【解説】「平治物語」の流布本を底本として、京師本・杉原本・鎌倉本・半井本・同時本等の諸本をこれに對校して異同を註し、なほ史書・文學に關する典義四十九部を参照して、事蹟の適否を考訂したものである。(高木武) **参考北條時朝記** (さんげい) 北條時朝記(別冊)を見よ。

三國一夜物語 (さんごく) 讀本七卷八册【作者】曲亭馬琴【重工】歌川國直【名題】角書に讀本とある。富士にゆかりを求め、三國富士太郎を中心に、富士家・渡間家の物語といふ意に出たものである。【刊行】文化三年【諸本】曲亭馬琴集(野村銀次郎

編)所載(別冊)讀曲(續枝)富士太郎三羽法、寧ろ直説には、並木宗輔の「愛人奇妻傳形」、八文字屋本の「富士漫聞野村」等に據つてゐると思はれる。【提要】嘉慶二年、足利義滿が富士山に遊んで舞臺を築いた時、も天王寺の侍人渡間左衛門は太郎を打つた時、その邊に流浪してゐた住吉の侍人富士右門は、この邊に流浪してゐた峯の太郎を左衛門の祖父に奪はれた事を申立てたので、義滿は兩者に舞臺の故實を論ぜしめて右門の言ふ所に感ぜ、彼に父祖の本領と太鼓を返し與へる事になつた。その後、右門は京に出で義滿に仕へ、橋州住吉に住み、子太郎に櫻子を妻として配した。櫻子は南朝の臣橋本治部丞の遺子で、郎黨村主兵助夫婦に譲られて職を離れ、偶々賊に擄かされたのを右門が助け變つてゐたのであつた。然るに右門は、橋州川の陣に在つた大内義弘・赤松義則に招かれて樂を奏し、共に招かれた左衛門に藝の事から恨みを受けて合法ケ辻で暗殺され、その一家も奪殺されかけたが、當時こゝに居つた兵助がよく防いで死し、左衛門は橋州に走り、赤松家の臣平馬を頼つて赤間關に赴き、こゝで遊女浪路に關染み、その戀を争ふ遊女浪江は兵助の娘を殺し、浪路を妻として橋州鳩岡の館に住んだ。一方仇を頼む富士太郎は古備の中山で病み、それを知つた母三郎が身を以て代らんと自害した後、安否を尋ねて發見した櫻子は遂に幼兒を見失ひ自殺しようとし、計らず本復した夫に救はれ、その幼兒は假名乞といふ尼僧に救はれ、また太郎の子と知つた左衛門の母卯原に殺されようとするが、却つて卯原は仇を尋ね

來つた太郎等に殺され、浪路は夫に代つて自害した。彼女は嘗て右門が買入れた樂器を得るに困り、京の商人に奪はれた太郎の妹小雪であつた。かくて幼兒を尼僧に託した太郎等は嶺を下ると、卯原の合圍に攻め寄せた平馬と左衛門の兵に遭ひ、敵せずして伊賀の嶺に投身したが、運で右門の助けが現はれて夫婦を一孤島に運んだ。然るにこの騒動に罪を得た平馬は、逐電した左衛門と逢つて共に浪路へ渡り、便船に乗じて九州に連れ戻したが、風雨に流されて太郎等のある島に漂着した。こゝに太郎等は仇を討ち、再び島に乗つて橋州に行き、幼兒を預けた僧尼を訪ね、その村主兵助の妻であることを知つた。かくして太郎は足利家に召返され、三國富士太郎と名乗つた。

【構想】太郎等が島に助けられて渡つた島に、左衛門を擲置させて仇討を遂げさせる。この奇怪な事象は、敵討に至る事件の起伏を據つする方便に過ぎないのであるが、これに據つてこの敵討話を複雑にして興味を加へ、敵討の意義を深くしてゐる。そこに作者の興味と教訓とがあつて、善人が悪人を懲らすといふ勸善懲惡の作意がある。【影響】文化五年八月、大阪角の芝居でこれを歌舞伎狂言に仕組んで興行した(江戸作者部類)に見えろ。【参考】近代小説史(別冊)馬琴研究(野村)并(日本文學史) (野村)

三國傳記(成立)應永初年頃【刊行】未詳【諸本】大日本傳教全書所載【出典】本書の説話は、「法苑珠林」(釋律異相)「孝經」史記等の佛典漢籍に依つたもの、或は「日本書紀」(三寶樹)「扶桑略記」(今昔物語)「太平

【註釋書】三鼓指歸文解知(三巻)田邊○三鼓指歸註七巻(田邊)○三鼓指歸補註四巻(田邊)支○三鼓指歸補註七巻(田邊)○三鼓指歸補註九巻(田邊)○三鼓指歸私註二巻(支)○三鼓指歸(支)○三鼓指歸(支) (田邊)

参考太平記 (さんげい) 四十巻四十一册【編者】徳川光圀の命によつて今井弘清・内藤百閒が編纂したものである。但し弘清は、未だ業を終へないで没したので、貞顯がその後を承けて完成した。【成立】元禄二年に完成、同四年刊行【諸本】書寫本の外、元禄四年刊の整版本、國書刊行會刊本がある。【解説】「太平記」の流布本を本文とし、今出川本・島津本・今川本・毛利本・北條本・金勝院本・西洞院本・天正本・天正興本等の諸本と對校して異同を註し、更に史書・文學書など四百部を参照して記事の適否を考訂してあるが、なほ

管絃合奏に於て常に相組んで樂曲の拍子變遷を主導し、打音を以てこれを飾るの用をなすものである。通常必ず各器一個づつを使用する。但し鉦に鉦鼓は必ず左方の樂に於てこれを用ひ、右方の樂に於ては鉦鼓の代りに三鼓と稱するものを用ひる。即ち右方の樂に於ける三鼓とは太鼓・鉦鼓・三の鼓(各別冊)の三種を總稱するのである。太鼓及び鉦鼓の裝飾は左方と右方とで多少の相違あることは、それ等の各項に於て述べた通りである。この三鼓は古來各樂家が必ず習得すべき必要な技術となつてゐる。(田邊)

管絃合奏に於て常に相組んで樂曲の拍子變遷を主導し、打音を以てこれを飾るの用をなすものである。通常必ず各器一個づつを使用する。但し鉦に鉦鼓は必ず左方の樂に於てこれを用ひ、右方の樂に於ては鉦鼓の代りに三鼓と稱するものを用ひる。即ち右方の樂に於ける三鼓とは太鼓・鉦鼓・三の鼓(各別冊)の三種を總稱するのである。太鼓及び鉦鼓の裝飾は左方と右方とで多少の相違あることは、それ等の各項に於て述べた通りである。この三鼓は古來各樂家が必ず習得すべき必要な技術となつてゐる。(田邊)

管絃合奏に於て常に相組んで樂曲の拍子變遷を主導し、打音を以てこれを飾るの用をなすものである。通常必ず各器一個づつを使用する。但し鉦に鉦鼓は必ず左方の樂に於てこれを用ひ、右方の樂に於ては鉦鼓の代りに三鼓と稱するものを用ひる。即ち右方の樂に於ける三鼓とは太鼓・鉦鼓・三の鼓(各別冊)の三種を總稱するのである。太鼓及び鉦鼓の裝飾は左方と右方とで多少の相違あることは、それ等の各項に於て述べた通りである。この三鼓は古來各樂家が必ず習得すべき必要な技術となつてゐる。(田邊)

管絃合奏に於て常に相組んで樂曲の拍子變遷を主導し、打音を以てこれを飾るの用をなすものである。通常必ず各器一個づつを使用する。但し鉦に鉦鼓は必ず左方の樂に於てこれを用ひ、右方の樂に於ては鉦鼓の代りに三鼓と稱するものを用ひる。即ち右方の樂に於ける三鼓とは太鼓・鉦鼓・三の鼓(各別冊)の三種を總稱するのである。太鼓及び鉦鼓の裝飾は左方と右方とで多少の相違あることは、それ等の各項に於て述べた通りである。この三鼓は古來各樂家が必ず習得すべき必要な技術となつてゐる。(田邊)

管絃合奏に於て常に相組んで樂曲の拍子變遷を主導し、打音を以てこれを飾るの用をなすものである。通常必ず各器一個づつを使用する。但し鉦に鉦鼓は必ず左方の樂に於てこれを用ひ、右方の樂に於ては鉦鼓の代りに三鼓と稱するものを用ひる。即ち右方の樂に於ける三鼓とは太鼓・鉦鼓・三の鼓(各別冊)の三種を總稱するのである。太鼓及び鉦鼓の裝飾は左方と右方とで多少の相違あることは、それ等の各項に於て述べた通りである。この三鼓は古來各樂家が必ず習得すべき必要な技術となつてゐる。(田邊)

【記】又は諸種の往生傳及び論記、諸寺の縁起文、鎌倉時代の説話文學等から得て来たものが少なくない。【解説】各巻略して三十巻の説話を、印度、支那、日本の順に排列してある。これは梵、漢和の三層が清水寺の通夜に會して物語つたためであるとしてある。説話は殆ど佛敎關係のものである。六道輪廻の思想を示す説話には、「百姓と蛇」とが沙門と王に生れる話、地獄に墮ちて餓鬼・修羅等に生れる話がある。その他の畜生に轉生する説話が多数を占めてゐる。佛の虫となつたり、蛇になつたりするのと、前生、牛や野干であつたものが人間となる話がある。なほ龍蛇と婚姻する説話も見出される。三寶の護衛を示す説話には、病を治し壽命を延ばし、長生不死の藥を得たりする現世利益の話がある。長谷の貧女や、五萬長者がそれだ。隨地獄を免れる來世利益の説話も多い。弘法の字が龍となり、淨觀が龍塔を斬り直し、雨をふらし病を治す法力、久米仙人が天女と結婚する話、高島郡の置木等の話、發心往生譚、伊豫西條の兩魂譚、夢想紙の話、世間現の千人切などの説話が見られる。

【参考】國文學通史 櫻井善平 ○致謝今物語集 (高島) 芳賀天一 續故紙 (高島) 田原直樹 【成立】文化三年編者の序が一部分を備忘のために抄出したものであつて、編者の意見等は更に加へてゐない。卷一に支子僧辨慶・源朝子・政事・名徳・年貢考・赤水先生・赤水先生七十壽序・禮記註疏抄、卷二に別段風説書・國語圖説・安政二年魯西亞・英吉利・亞利加國御取替七條約書・算法開立

【参考】國文學通史 櫻井善平 ○致謝今物語集 (高島) 芳賀天一 續故紙 (高島) 田原直樹 【成立】文化三年編者の序が一部分を備忘のために抄出したものであつて、編者の意見等は更に加へてゐない。卷一に支子僧辨慶・源朝子・政事・名徳・年貢考・赤水先生・赤水先生七十壽序・禮記註疏抄、卷二に別段風説書・國語圖説・安政二年魯西亞・英吉利・亞利加國御取替七條約書・算法開立

【参考】國文學通史 櫻井善平 ○致謝今物語集 (高島) 芳賀天一 續故紙 (高島) 田原直樹 【成立】文化三年編者の序が一部分を備忘のために抄出したものであつて、編者の意見等は更に加へてゐない。卷一に支子僧辨慶・源朝子・政事・名徳・年貢考・赤水先生・赤水先生七十壽序・禮記註疏抄、卷二に別段風説書・國語圖説・安政二年魯西亞・英吉利・亞利加國御取替七條約書・算法開立

【参考】國文學通史 櫻井善平 ○致謝今物語集 (高島) 芳賀天一 續故紙 (高島) 田原直樹 【成立】文化三年編者の序が一部分を備忘のために抄出したものであつて、編者の意見等は更に加へてゐない。卷一に支子僧辨慶・源朝子・政事・名徳・年貢考・赤水先生・赤水先生七十壽序・禮記註疏抄、卷二に別段風説書・國語圖説・安政二年魯西亞・英吉利・亞利加國御取替七條約書・算法開立

【参考】國文學通史 櫻井善平 ○致謝今物語集 (高島) 芳賀天一 續故紙 (高島) 田原直樹 【成立】文化三年編者の序が一部分を備忘のために抄出したものであつて、編者の意見等は更に加へてゐない。卷一に支子僧辨慶・源朝子・政事・名徳・年貢考・赤水先生・赤水先生七十壽序・禮記註疏抄、卷二に別段風説書・國語圖説・安政二年魯西亞・英吉利・亞利加國御取替七條約書・算法開立



(雲北) 畫師 藤 阿 南 郎 全 七 三

【参考】國文學通史 櫻井善平 ○致謝今物語集 (高島) 芳賀天一 續故紙 (高島) 田原直樹 【成立】文化三年編者の序が一部分を備忘のために抄出したものであつて、編者の意見等は更に加へてゐない。卷一に支子僧辨慶・源朝子・政事・名徳・年貢考・赤水先生・赤水先生七十壽序・禮記註疏抄、卷二に別段風説書・國語圖説・安政二年魯西亞・英吉利・亞利加國御取替七條約書・算法開立

【参考】國文學通史 櫻井善平 ○致謝今物語集 (高島) 芳賀天一 續故紙 (高島) 田原直樹 【成立】文化三年編者の序が一部分を備忘のために抄出したものであつて、編者の意見等は更に加へてゐない。卷一に支子僧辨慶・源朝子・政事・名徳・年貢考・赤水先生・赤水先生七十壽序・禮記註疏抄、卷二に別段風説書・國語圖説・安政二年魯西亞・英吉利・亞利加國御取替七條約書・算法開立

明徳揚巻と、互ひに契つた仲であるので、今宵の几帳との祝言に離れ介は當惑した。花嫁は計らずも揚巻であった。これは奥三右衛門の様な揚巻であつた。左衛門は鎌倉殿から回船往來の御朱印を知り、神道源八には渡し、瑞軒の御朱印平太には渡さず、流川往還の任に當らせてゐるが、この二人の反目で、一向坊が明かぬため、試合で勝つた方に委ねることとした。源八は、離れ介のことから、平太に勝を譲らうとしたが、平太の暴言に敵々彼を打ち懲らした。この時、離れ介の父將監が、熊本傳之伴に投書され、御朱印も紛失したとの報告が届く。そこへ、血みどろの御船が轟の息で馳せつけて、始終を告げて降参する。大内を騒がした際、早くも城受取りの使者が向つた。皆々、涙ながらに旅路につく。(三三三)



(附番本繪) 始 鏡 石 十 三

お松を掲げ結めにして、故意に苦しめてゐる。揚巻としては、お舟への義理から、離れ介とお松との戀を見て、徒に煩悶するばかりである。そのうち源八等の口から、お松の死を初めて知つたお舟は驚き悲しんだ。源八の身の危険から、お舟は自分に心を寄せる權九郎を喚び、源八の身代りに作りたて、一時を逃れたが、やがて揚巻と離れ介とが攫はれたと聞いた源八は、大門口に進み付いて平太と争ひ、首尾よく御朱印まで取り返した。(三五三) (奥三右衛門) 流川檢分の動使守護役として来た瑞軒に、花光家の人々は暇ひ寄つた。凡帳は瑞軒に反を向けたが、捕はれて計らうも瑞軒の頼であることが知れ、小市か

ら去られて悲しき戀を飲いて自害する。奥三右衛門は未だ生魂をよふに、釣花活の額を許まで引かせたが、不圖、これから流川に引船の案を思ひつく。同時に、幾て怪しく思つてゐた宜徳は、凡帳の血をいこの御に合はせて飲ませると、怨み神之作の正體が露はれた。この時、陰謀が露れて瑞軒召捕の動説が下つた。(流川) 辨之作は水門から出たが、外に待つてゐたお舟・揚巻等が、三十石船を操つて、遂に仇を討つ。(お花畑) 瑞軒も明智の匠、曹藤内蔵之介と名乗つて大衆となる。(解説) 題材の先行脚色に併せ見ると、全曲の構想は、それ等から組織されてゐるに過ぎぬが、治水に通じた河村瑞軒を、却つて無氣味な解群を以て反感者に仕立てたところに、大阪であるだけ、一層特殊な感興が惹かれたと思ふ。既に脚色されてはゐたが、源八渡も平太も、大阪人としては親しい名稱であつて、愈々瑞軒との交渉も深くなる。その上、文七と大五郎との男達役の人氣者を對立させ、悪役の歌右衛門を中心に別れた筋は、正に成功といはねばなるまい。更に舞臺技巧に於て、本作は正三の名を不巧ならしめたとも見られ、最も有名なのは大話である。正三が獨樂廻しから思ひついたと傳へる廻り舞臺は、事實はこれより早く利用されてゐたらしく思はれるが、豪壯な舞臺装置によつて、深く觀衆を驚かされたのであつた。而も舞臺を廣く使用して敷居の三十石船を並べ、大提灯下の説話は、見事なものであつた。大評判を擧げた作で、直に三都に流行した外、源八と平太は尾々他に興行された浄瑠璃の三十石船は寄せ物

で、名題を利用しただけである。(守備) 三尺のむち(流儀) (俳諧三尺のむち)を見よ。
三社託宣 (さんじやくせん) 神道(解説) 天照大神宮、八幡宮、春日神社を特に三社と云ふ。その三社の大神の託宣と稱せらるゝものを三社託宣と云ふ。
 八幡大菩薩
 難・食・九・不・受・心・人・物。
 難・半・兩・不・到・心・人・處。
 天照大神宮
 謀計難・爲・眼・利・潤・必・富・神・明・前。
 正直難・非・一・且・依・情・終・聖・日・月・輪。
 春日大明神
 難・曳・千・日・注・連・不・到・邪・見・家。
 難・爲・重・服・深・厚・可・赴・惡・悲・家。
 この託宣が果して眞の託宣であるか否かは、素より疑問である。伊勢貞丈は「三社託宣考」の一書を著して、その偽作を論じてゐる。たとひ偽作にしても、中古以来、社會教化の上で効果があつたことは認めねばならぬ。(参考) 三社託宣考 伊勢貞丈(神道學叢書) 神道問答 新編神道 (田中義一) 三社託宣 (さんじやくせん) 浄瑠璃 五段 時代物(作者)未詳。近松門左衛門との推定説もある。(名稱) 八行本には、巻首に題名がないが、輸入細字本には「三社の託宣」とあり、外題年鑑には「三社の託宣」と記すので、今これに従ふ。輸入細字本には「三社託宣由来」とある。伊勢・石清水・春日三社の託宣が作用するところから、この題名を成した。(成立)「道行抄」や「竹千代」に本曲の一節を載せることから延寶六年の作と推定されてゐる。八行本は宇治加賀正本である。【註

本) 八行四十四丁加賀正本、輸入細字本等。近松門左衛門全集第十・近松全集第一巻等に所載。【題材】説書節の系をひく古浄瑠璃に属々見る懸子を中心とした疑物に三社託宣の懸巻を文へた。加賀正本と傳へられる「當麻中將監」の交際も豫想せられ、【解説】(初段) 初春の祝儀に、伏見院は前關白某所に懸巻を愛へ給ひ、先帝第二の皇子雅仁をお下しなされて、二位中將を賜ふ。某所の政所はわが親の親名月御前を中將に配せるため、姉の繼照照日の前を乞ひものにしようと思ひ、右近・左近の兄弟に、これを命じたが、兄弟は疑を致つて密かに謀す。この時名月御前に伊勢の大納言が乗り移り、政所の謀を發き、逆謀になつて飛び廻つた擧句終に狂ひ死んだ。御殿の箱から御託宣が金色の文字となつて現はれた。(二段) 伊勢路を志す照日の前に道手が掛り、兄弟の防禦も危く見えると、神宮の動によつて使姫が忽然と現はれて道手を捕ふ。金色の神託は虚空に現はれて、源は河内へ落ちる。(三段) 雅仁は八幡社参の隙、まだ見ぬ照日の前に會つたが、互にそれとは無言で別れて了つた。源は兄弟に命じて深夜に鳥籠を放つて供養を行ふうち、社人公文の手に捕はれて既に危く見えたと、俄かに山谷鳴動して公文は狂ひ、大石が二つに割れて中から神託が現はれた。兄弟は源を扶けて逃れる。(四段) 東大寺の傍に庵を結んだ源は、若僧治部卿からの懸を斥けたため、神鹿を殺した罪名で刑場に引かれたが、來かかつた雅仁は始めてそれが許嫁の源と知つて對面し、治部卿も慈悲心を試みるための化身で、地蔵菩薩に現はれて失せる。紫雲龍曳く中に大明神は白鹿に乗つて現はれた。源は許

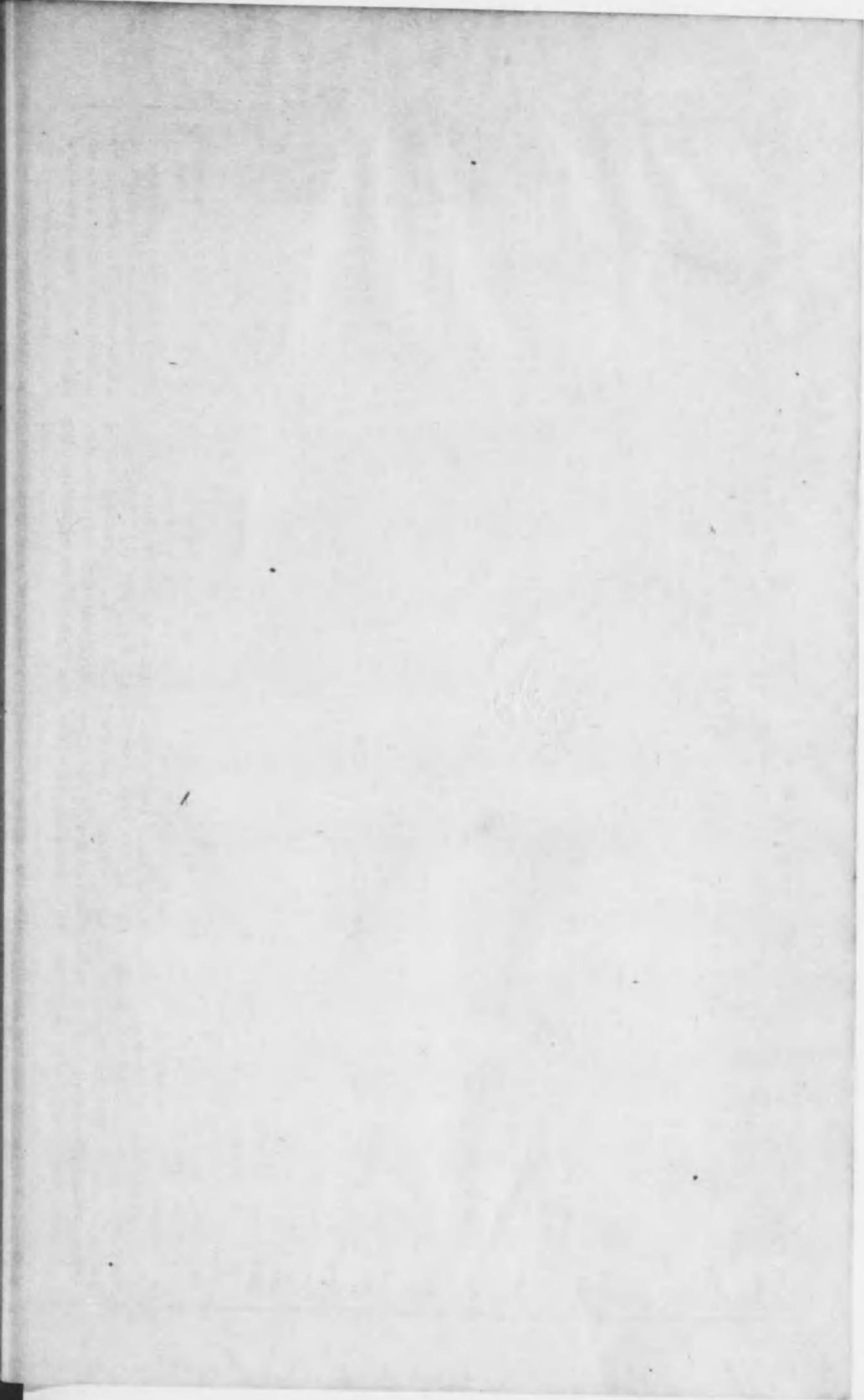
されて都に於れる。(五段) 都では、源に屢々託宣のあつた事が帝の御感を蒙り、三社(寒幣使が遣はされる。(二位中將宮めぐり) 雅仁は源を伴ひ伊勢に参宮する。異香四遊に惹き、雲上に伊勢・石清水・春日の神々が姿を現はし、御託宣は曇然と光を放つ。【解説】筋は頗る簡單であるが、託宣の主題に忠實ならうとして、略と場面ごとに機巧を利用して不思議を見せたことは、却つて内容の單調を懸した観はせて、相當觀衆の興を集めた作と思はれる。全曲が平田な履ひはあなが、三段目を發揚場と見れば、四段目に道行を配置した案によつて、作者の手腕は注目されるべきものがある。四段目座敷の清支の曲に負ふかと思はれる。なほ本曲が歌舞伎脚本に傾倒した(参考) ほかの中將監の作品に影響する所は少からぬものがある。因みに「二位中將宮めぐり」は、「源氏鳥帽子折」(参考) 近松門左衛門全集第十巻説書節本曲題【近松全集第一巻解説】(参考) (参考) 三社託宣 所作者 變化物(名稱) 漫草の三社託宣を取り入れたのでこの名があるが、同名で全然異なる曲に、「三世相繼編文草(おその六三) 安政四年七月江戸中將監がある。併し普通には併に「善玉悪玉」と呼ばれるのを指してゐる(本名題) 歌舞伎の源生の花漫草(別名) 善玉悪玉(初演) 天保三年三月十一日初日、江戸中村座(時女行列) 第二番目大切(作詞) 二代瀧川如早(曲節) 清元節(太夫) 二代清元延壽太夫(作曲) 清元榮治郎(振付) 二代藤間勘十郎(本曲五郎市) 【傳來】 曲・振と傳存 【題材】 當時、問帳中

の三社託宣を信込み、漫草觀音の宮戸川縁起に山東京傳の黄表紙(心算早草(別題))に書き出されて世の流行となつた善玉悪玉の源向を取り入れたもので、池田の朝打から善玉悪玉に化する趣向は、「早草集」の類編である「堪忍袋結」(善玉) 寛政五年(中) 北尾重政が書いた挿巻に暗示を得たものである。又これより先、文化八年江戸市村座で、三代坂東三津五郎が七枚花の變換の七變化所作の一作として悪玉だけの頭を演じたが、これなども參酌されたものであつた。(内容) 節屋臺といふ趣向で、山車人形の神鳥息屋(四代坂東三津五郎) と武内宿禰(二代中村甚左) とで、常磐津の所作があり、引抜いて三津五郎は池田三ツ成(源成) 芝敷は池田駒成(武成) と變つて宮戸川縁起を利かせた舞臺面、潮を打つ振からテンポの早い手踊、次いで虚空から善玉の玉が降ると、それに乗り移られた二人は、善玉・悪玉の踊り分け、短いクドキから舞臺めいた早玉の踊りになる。初演には、この次に更に三津五郎は通人水木、芝敷は田令時(若き) 新五兵衛となり、これ(善玉) 悪玉の吹替が絡まつて二人を誘導する趣になる。最後は二人が石橋の役人と變り、華やかな所作タテがあつて終る。即ち二人四變化所作の形式である。唄は「それが歌に」のクドキが眼目である。(備考) 弘化四年五月、江戸河原崎座(時) 漫草八景では、長根と常磐津師との掛合で、池田は支成・演成・武成の三人で、善玉・悪玉の件になつて舞臺文が絡んだ。また安政二年五月、江戸市村座「三幅對(彩色)」では、常磐津師のみで、善玉・悪玉とで演じたが、二曲とも廢演した。(参考) 【三社託宣と勢獅子町田理三(演藝叢報) 合同

五六〇清元研究空室(参考) 日本歌舞集成〇歌舞曲集〇歌謡劇集〇近世邦楽年表
 散手 (さんじやく) 舞臺樂曲(異稱) 散手破陣樂・主皇破陣樂・至皇破陣樂(性質) 左方樂、新樂の中心、太鼓・笛に屬する(昔は道調に屬してゐた)。序(二拍) (拍子各二十)、破七拍(拍子各二十)、舞(一人)一人、舞(舞者は特殊なる裝束を着、寶冠・甲冑をかぶり、大將の如く威あつて舞の高い假面をつけ、太刀を帯び、鈴を持つて舞ふ。別に從者二人がある。これを童子(又は年古)といふ。常裝束を着て太刀を帯び、一人は鈴を持つて出てこれを舞者に授け、他の一人は舞ひ終つた後にその鈴を受取る役をする。舞の途中では童子は舞臺の隅に侍立してゐる。香舞には貴徳を用ひる。【沿革】「教訓抄」に、「此曲誰人のつくりたる」と云ふこと勅いささる所也。古老傳曰、串川明神平・新羅東、并悦之傳向・新羅國・捕鹿而舞、時人見此姿・摸之・之とあり、「體源抄」にもこの説を載せてゐる。これに就き、「大日本史」(備後志)には、二書不記、年代今考、事實姑定爲、神功征韓時と述べてゐる。即ち神功皇后征韓の時、串川明神がその軍を助けて勝を得られたによつて、これを撰してこの曲を作ると稱せられる。異説としては田安宗武の「樂曲考」に、「此曲の名を古くしてはさるだ」といひしなめりて勢也。さるは散樂をさるがうと唱へ、散樂ともかけば、散と樂とは通はし用うる事知るべく、手をたともいふは常也。しかれば瓊々并尊の日向國に天降りませしとき、猿田彦命御先に立てその國の神をむけ給ひし事あり、それを舞にうつせるこそ。また答へには必歸徳をす。それは國神の瓊々并尊の御徳に從ひ奉りしがた成べ



(内) 集人六十三本五回本西) 集券伊



長者の名が山莊大夫といふ外に、これといふ特異の點もない。諸國の長者の話には朝日と夕日との二面がある。多くは原因を信心と善根の有無に歸してゐるが、一方には神度の率運によつて一朝にして巨富を得た者と、他の一方には然るべき因縁があつて、さしもの大分限が夢の如く退轉して了つたと云ふ話とが語られる。山莊大夫は即ち右の長者没落の一の例であつて、これに伴ふに對王丸の不思議の立身譚を以てし、大體の形式はよく整つてゐる。長者が没落して行く因縁話には種々なものがあるが、山莊大夫の如く、惡徳に乏しく下人を遣使した爲めに滅びた例も段々ある。現に奥州浄瑠璃の郷長者などもその一つである。『土俗研究』(二)『郷長者』とは圓香、曉蘭などの最も重んじ給ふ所である。加ふるに信仰と祈念とを以てした對王丸は高い官位を得たので、これも『今昔物語』以来、貧民が出世した普通の道筋である。次に岩城判官の三人の遺骸が人買に買はれたといふ話も、少し複雑ではあるが説明が出来る。貪慾なる長者が富を得る手段として悪い事をした話は、『關東城の筋』を引いた浄瑠璃の平野長者の類が少くない。但しこの場合に、被害者が安藤姫・對王丸であることは、何か吾々に分らぬ別の仔細があることと思ふ。岩城判官の居館は、寛永の淨瑠璃には奥州信太夫とあつて今の福島縣らしいが、北奥の青森縣では彼は津輕から出た人と傳へ、今でも丹後の國の船が寄港すると、岩木山の神の憤りで天気が荒れるといふことが多くの書に見えてゐる。又近い頃の弘前の人のお話に昔この邊に同胞二人の娘があつて姉の方を安藤姫と言ひ、山莊大夫のために苦しめられて連れ出で、一人は東へ行つて小栗山

に登り、一人は西に走つて岩木山に入り山の主になつたといふ昔話も種々ある。山莊大夫があれ程有名である以上、後人の流傳とは認め難き話の相違である。兎に角この兄弟の話の奥には、例の花菱中納言の子少將の話などと同じく、土俗研究(三)『流人の子』が親を慕ひ、その臨終に逢ひ得ずして後に供養をしたといふ一段が含まれてゐたことはほぼ確かである。而も岩木判官正氏が如何にも芝居の假構然たる名である上に、奥州の大名が九州へ流されるなどは有り得べき話でないから、これは玉孫沈論の悲劇を濃厚ならしめるまでの脚色かも知れない。一體山莊大夫の話の中で最も身に沁むのは、盲目の母親が鳥を追ふ一段である。「あんじゆ、懸しやほらほら、つし玉こひしやほらほら、この叫は人の涙を誘はすには指かなかつたらう。前牛は石泉丸に、後牛は梅若丸に、よく似通つた幾多の脚色は、或はこの鳥追の歌を中心として敷衍せられたのではなからうか。若しさうだとすれば、舞臺は遠くが謡曲の『鳥追』などは、既に又その一先型であつた。こゝに注意すべきは、山莊大夫に限らず多くの長者没落譚には、農作に關する話題を伴つてゐることである。殊に鳥追は田植に次いで、農村生活に於て重要な地位を占めてゐた行事であるから、かく長者の話に結びついてゐることは寧ろ自然であるといつて可い。そしてこの話などもこの唄によつて人の心に植まつられ、信ぜられて傳説となつたものであらう。なほもう一つは、早乙女の死んだといふ話が長者傳説には伴ひ易いと考へられる點があるので(山莊大夫考、若い安藤姫の非業の死、並にその母の盲目にして鳥を追ふといふ哀れな話も

軍に由良長者の口碑として不調和な取合せでないのみならず、寧ろ山莊大夫の由来を明らかにする良い手掛りであると思ふ。勿論浄瑠璃の山莊大夫となるまでには多くの脚色を経てゐるにしても、これ等鳥追の歌や、早乙女の話の如きは、後代の技巧が到底偶然には添附し難き部分であるのを感ずる。尤も實を言へば、これ等鳥追の歌や早乙女の話は、長者の滅亡退轉とは寧ろ調和の出来ぬ事柄であるから、多分はこの長者傳説が、その最初の形、即ちその榮華繁昌を傳へられてゐた時代から、長者に附いて廻つてゐた口碑の一つであつたらうと思ふ。

【参考】山莊大夫考(『土俗研究』三)『浄瑠璃集(續帝國文庫)』所収『題村』山莊大夫(『土俗研究』三)『浄瑠璃集(續帝國文庫)』所収『題村』山莊大夫(『土俗研究』三)『浄瑠璃集(續帝國文庫)』所収『題村』山莊大夫

之助と政氏の異母弟大江左衛門との間に政氏の跡目についての争ひがある。政氏の娘安藤姫は平野の社に詣で、許婚の梅津中將春道との情事。大江左衛門の郎黨がこれを機ふが要人之助が追散らす。政氏は京の館に死體となつて歸る。要人之助の父兵衛は、草津の宿で主君が曲者のために害された次第を語つて切腹。大江は勸説と許つて安藤姫を奪はうとするが、要人之助はその妻婿竹と共に奮戦してこれを退す。(二)『三』要人之助夫婦は、政氏の北の方、安藤姫・對王丸の供をして歸り行く。大江に仕へる要人之助の兄内藏之進は、安藤姫等を奪うため、弟と斬り合ひ、その隙に無事に逃れしめる。(道行こしちの女唄)北の方、姉弟・横竹四人の道行。越後の關山岡は、追手のかゝる四人を救ふが如く見せて、北の方と姉弟とを二艘の人買船にのせ去らしめ横竹を斬るが、被女の告白によつて三人の素性を知つた山岡の妻は、岩城の舊臣と名乗つて自害する。山岡は改悟して三人を奪ひ還す事を約する。(三)『三』丹後山良の千軒長者三莊太夫には五人の娘があるが、長女は白痴、次女は跛、四女は瞎、五女は目を病んでをり、三女のおさんのみが満足な體であるが實子でなく山岡の妻の妹に當る。太夫は香着狂暴で新しく買ひ入れた安藤・對王を嫁々に虐待する。姉弟は母が佐渡で首ひて狂ひ、山岡に救ひ出される様を夢見る(四)『三』二人の素性を察したおさんの聲山良三郎が自決させようとする。おさんは安藤と謀つて對王を逃がす。三莊太夫は怒つて安藤に横金を當てる。と見せたのは計略で、實は四女を身代りに立てたのであつた。太夫はもと梅津家の體掌で、山良三郎等を欺くための策であつたと明かす。

り、位官は正四位下内膳頭で終り、康保元年(一〇六三)十二月、七十一歳を以て卒した。その書に關する事は、大江匡房の『新撰實記』を初め、いろ／＼見えて居り、彼の傳に幾の逸話さへ傳へられてある位、能筆を以て有名であるが、彼はまた我が國で書道の専門家として立つた第一人者とも見られるのである。醍醐天皇深くその書を愛で給うて、醍醐寺の傍に書かされた、又行草の法帖各一巻を書かして、これを唐に遣はしたこともある。この外、殿堂宮門の題額等、その筆に成るもの頗る多かつたと謂はれてゐる。殊に行草に巧妙であつた。その書風は、勿論唐様(胡)の影を脱却した和風のものであるが、而も勁勁を失はぬものである。世にその筆蹟を野跡と云ふ。眞蹟としては、帝室御物の屏風土代、北白川宮御所藏の智願大師御影等があり、秋萩帖・彩色紙・本阿彌切なども古來その筆に成るものと傳へられてゐる。次に佐理は近江少輔教敏の子で、太政大臣實朝の孫である。太平大弐となり、正三位に遷んだが、長徳四年(一〇五七)七月、五十五歳を以て薨した。その筆蹟を佐理と云ふ。他の上代様に比して體調は少いが、暢達巧妙を極めたものである。されば實朝に在任中も遙に京都より手本を依頼するものが少くなかつたといふことであるが、殊に宇佐八幡の神宮と傳うて京都に召還せらるゝ途中、瀬戸内海に於て風波の難に遭ひ、三島大明神の夢現に依つてその社の額を書き奉つた話は「大徳」などにも見えて、名高い逸話である。その眞蹟としては、御物消息(皇命帖)を初め、酒井忠正御所藏、松平直亮御所藏の消息があり、また松平頼朝御所藏の額紙も有名である。なほ古筆切としては、相

地切・通切・筋切・室町切・紙切等がある。次に、行成は少輔義孝の長子で、攝政伊尹の孫に當り、佐理とほぼ同様の人で、正二位權大納言にまで陞つたが、萬壽四年(一〇八七)十二月、五十六歳を以て薨した。彼は才氣に長じ、典禮に精しかつたが、殊に書は二王を宗とし、道風に私淑したもので、世に權跡と稱へる。その書風は頗る温調で、道風に依つて圓熟された書風がこの人に依つて更に大成せられたと謂ふべきである。のみならず、その書法は世尊寺流(洞)として永く後世に傳はり、子孫世々朝廷入木道の本宗となつてゐるので、影響する所も亦大なるものがある。行成の眞蹟として知られてゐるのは、御物(洞)・高松宮御所藏「白氏文集」、名古屋御守彦彦氏所藏消息等があり、また所傳のものでは本能寺切・伊豫切・法輪寺切・針切等の古筆切その他がある。(伊本)

人として、狩野左京進盛光が選まれる。(盛光船)盛光は留守中、十三歳になる眼病の春姫が繼母に仕へる事、不安を感じたが、一族の樂人近藤兵衛守に託して出立した。(猿澤池邊)駿で兵庫に通じてゐた繼母は、共に謀つて姫を猿澤池に投じようとしたが、左京を見送つた執事高直が、歸途これを見つけて姫を救つた。(二段)(玉水)高直は姫を護つて落ち延びて来たが、深手に堪へて此處に落命する。姫は父を慕つて都に參り、(北條崎殘秋庭)姫の母夕霧太夫の乳母は、太夫の死後、三三三と號してこの處に住んだが、尋ね寄つた知貞も、もと河内太夫の遺子の果であつた。東下りの別れに三三三を訪れた左京は恰も父を探し尋ねに廻り逢ふ。こゝに動説と稱して左京を捕へんと兵衛が寄せて来た。姫を家來望月小六に託した左京は、敵を追ひ散らして丹波へ落ちる。(三段)(新町原)姫は母の跡をばし、廊に入つて、貴母の妹女郎萩野に會つた。萩野は相城の城を説くのであつた。(扇屋)姫は萩野に案内されて、母のつめに扇屋の法要に參列すると、黒格子の袴巫女の口寄せて、母の地獄の叫聲を知る。(下寺町野宮寺)亡母の墓に詣つた姫は、寺の軒下に結ぶ夢の中に、悪鬼に責められる母の姿を見た。(四段)「はるひめ道行」姫は父と知りながら、玉京塚を立てんとした勸進の聲に、姫の繼母が密に兵衛の文を獻じて愛を切つた所へ、兵衛が追ひ寄つて、尼の所業を憤り守護職に引立てる。(守護職)恰も左京が小六と姫を連れ出て出たために、尼の手から出された文が證據となつて、兵衛の罪科はすべて免れる。(五段)(大内)左京の官

位は元に戻され、春姫は宮仕への身となり、薄磯局と名乗る。(雲願寺)夕霧供養のため、七日間の大法要が執り行される。満月の日、夕霧と彼の繼母とが姿を現し、誠は眞實に至り、衆生濟度のために假りに人間に現じたのであると説く。

【解説】近松初期の作例にも徴して諸曲種と思はれるが、「富士太鼓」や「徳太鼓」の如き間接的な仇討の解釋を離れ、お家騒動の筋を辿らうとした所に近世的な態度が窺はれる。繼子成めの脚色を盛つて前期流行の様式を繼承したもの、夕霧事件を具體的に扱つた事によつて活氣を呈したのである。その観方からすれば、脚色の中心は左京進のお家騒動にあつたが、外面を夕霧事件の方に選んだのは安當かと考へられる。九年忌に當つた作であらうが、河内・萩野を初め實在の人物が多く登場してゐる。二人の尼の如きもその類であるかと思ふ。これ等は寧ろ脚色以上の効果を與へた題材と見るべきであらう。要するに脚色からは上作の部に足らないが、歴史的に解釋すべき位置を占めてゐる。(夕霧七年忌参照)

【参考】近松全集第二巻解説(藤井勇)近世邦楽年表(義太夫節之形)末木忠雄(守田)

【脚色】小説【作者】山田花袋【發表】大正七年十月朝日新聞に連載【刊行】大正七年五月春陽堂、長篇小説全集(新潮社)所収。

【解説】主人公實太は、或る時關東平原と思はれる殘雪の野に、昔懐いた女の住んだ跡を探したり、片田舎に隠居してゐる年寄つた知人を訪ねたり、或る川邊の料理屋を兼ねた旅館に泊つて、遊び客の騒ぎを隣室に聞きながら、ひとり淋しく種々の思ひ出に耽つたりす

る。この數年來、彼は家を捨てよう、世を離れようとして、屢々旅から旅へとさまよつたのだつた。現在、彼の携はつてゐる文學的職業の代りに山奥の百姓とか離れ島の燈臺守とかいふものの方に心を惹かれ、さういふ職業を調べて見た。けれども何處へ往つても同じやうな苦しい人生があつた。都會の人である彼はやはり都會へ歸らなければならなかつた。そこには彼の悲惨な家庭があり、足手まといの妻子があり、煩はしいけれども懇しく離れられない戀人があつた。彼は早くから家庭生活に飽きて、外に戀愛の相手求めた。求めたその相手には、別に男があつた。そして色戀を賣り物にする種類の女だつたが、その女の情夫に別に女があるのを嫉妬して、その別の女を殺さうとして果さず川に身投げするまでになつた。フランスの文學の中にある類型的・靴靴的の生活から、精神的・宗教的の生活に對つてゆく人物Danteに深い興味を感じてゐた實太は、自然にといふよりは意識的に、努力して、肉の世界から靈の世界へ、煩悩から菩提へと辿り登つて、塵々あと戻りをしてはものゝ世に陥つたこともあつたが、女が身投げした事件があつた頃から悟るところがあつて、田舎の或る寺に参詣されてゐた一切縁廻を讀む機會を得るや、それまでも多少佛教の研究をしてゐた彼は、こゝにまさしく佛法に會ひ得た喜びを感じ、新生の靈氣を以て都會生活へ還つて来た。

【批評】同じ作者の「生」(二巻)(生田)の三部作の續編と見るべきもので、戀愛の三角關係の紛糾を中心として、人間生活の諸種の問題に互り、思案的傾向の強い主人公が、懷疑に懷疑を重ね、煩悶に煩悶を繰り返した後、一

種の悟道、佛教的の菩提心を發するに至る事が取扱はれてゐる。「生」(二巻)等では、自然主義の平面描寫が重んじられてゐたが、この作になると、心理描寫や、心理描寫が多かつた。感想文又は議論文が長く續いてゐる事もあつて、人生の外面よりは内面を、客觀の世界よりは主觀の世界を擧げて見せようとしたのであつた。そしてフランスの自然主義から象徴主義へ移つて行つたメイスンズの宗教的三部作など、その作は多少の暗示を得てゐるであらう。その證據は作中所々に散見する。又わが國の文壇にも、自然主義が擧げられて人道主義が起り、やがて宗教的、殊に佛教的文學が盛んになつたことがあつたが、この作などは、その宗教的傾向を代表するものと云ふことが出来る。(中村(星))

子道信は、まなごの作問の煩白菊の一念で、道成寺で死んだが、弟道善は白菊の靈の乗り移つた異母妹満月の執拗な戀心に愛しく思ひ、避けて大塚山に籠らうとして吉野に來た。執拗な道善が、道善を控へて、家のために特許娘との婚儀の承諾を勧める。併し道善は十六夜との仲に傾けた道九を世襲にせよと主張し、家業の善徳の利権と日高川の掛橋とを助解山に預けて山に入る。助解山は松林とその輪を掛ける、輪の中の大蛇が抜け出して、満月姫の一念を誘はせぬ時は家に居るであらうと戒めた。(道成寺)助解山が歸つたので、一時、特許娘の興人を迎へることとなつた。(二巻)(道成寺)道善は人目を避けて、十六夜に會ひに來たが、特許に發見されたので、特許には、吉日を下して館に迎へると約して一時實家に引取らす。繼母から助解山の一事文に満月姫を配はせて家を離れさうと言はれた助解山は、怒からこれに與かして明日鞍馬に籠る道善の自滅の策を案じた。併しこれを十六夜が立ち聞きしたために、十六夜は殺さる。まなご屋敷、白菊から道九を知つてゐる弟まなご常五郎の許に、白菊が姿を現した。そこへ東國から歸り着いた兄道九の助けは、十六夜の胸から心の事が現れて道善を棄せて走るまなごに驚き、つとを訴ふる。(三巻)(鞍馬)専念行を勧める道善の所へ、満月姫から贈られた小袖が届いた。山伏姿にやつして忍び寄つた特許が道善を尋ねて誘ふと、かの小袖が自ら動いて、また道善を誘つた。この時特許からは別の姿が抜け出して、行儀の屋内で激しい争ひが始まる。道善が遺書文を唱へると、小袖は消え、特許も屋外にゐた。淺ましい己が心に恥ぢて特許は山を下る。十

【参考】元祿歌舞伎作家上巻解説 高野聖之
三千世界色修業 (守田)
草子 五巻 (作者) 自伝的南無散人の異名がある。【刊行】安永二年【題名】徳川文藝類

【参考】元祿歌舞伎作家上巻解説 高野聖之
三千世界色修業 (守田)
草子 五巻 (作者) 自伝的南無散人の異名がある。【刊行】安永二年【題名】徳川文藝類

た所で、うんと一躍を名乗りに傾死する。こ
れより其の特色が展開してゆく。この世
を去つた介太郎は、先づ西方浄土へ急がうと
して行く途中、三途の川でおぼに思ひ込まれ
たのを手始めに、牛頭馬頭の娘の赤鬼青鬼に
惚れられ、閻魔大王は若衆にしようとする。
介太郎は口説かれて戀神となり、安永に
戻り、大和國三輪のあたりに住むを定め、
酒商賣をして大に繁昌したが、どこまでも釋
尊につき纏はれるうまささ、人間と佛との
間を行く神になり、遂に三輪明神と神去ると
いふ筋で、好色の弊を諷した作、その滑稽的
叙述は、早くも黄表紙の世界を思はせるもの
がある。(小説)

三千世界商往來

【参考】元祿歌舞伎作家上巻解説 高野聖之
三千世界色修業 (守田)
草子 五巻 (作者) 自伝的南無散人の異名がある。【刊行】安永二年【題名】徳川文藝類

に数種見るので、それ等から案を得た事も
考へられるが、彼の浄瑠璃「宮城土蔵」(前和
五年九月、鶴巻屋上演)と、近松半二作浄瑠璃
「天竺徳兵衛」(寶暦十三年四月、竹本座上演)
とに負ふ所が多いと思はれる。
【挿話】(序巻)久吉公の命で、和蘭
人を獲るため、竹田園田芝居の備しから、
廊の邊となる。久五郎は悪人の侍安女
之助が傾城長門放た勘當の身となつて
ゐるのに、種々心を砕いた。(和蘭屋
敷)久五郎は終にこゝに忍んで、香爐
を盗み、和蘭人に買はれた傾城長門を
奪ひ、かびたん達を斬りすてて出奔す
る。(二巻)朝鮮國 落城となつた王
宮へ、城受取りの日本の使者に化けた
山司金右衛門は、まんまと財寶を盗み
去る。(三巻)雨申、大勢の金右衛門
の手下が、盗品を船に積む。(四巻)
(ちやうど)國代官屋敷) 傾城に横
懸忍のんしは、徳深の叔母と共謀し
て、美男の入婿をかき返り出し、自分
が家を儲かうと策を講じた。金右衛門
は日本からの漂流人になり済まして、
この家の掛り人となる中、多くの手
下を入り込ませ、終に財寶を奪つて消
える。(五巻)荷物の積込み。物凄
い、女高、小人、腹に穴のある唐人の幽霊等
が現はれて、金右衛門を悩むが、彼は物の数と
も思はれて、(六巻)和蘭人殺害の疑
いのか、つた采女之助と長門は、こゝで代官に
聞かれたが、久五郎の愛おむが、二人を
救ふ。采女之助は昔の主人九郎作に助けられ
たが、おぼは黒坊のために殺された。長門も
危く黒坊の懸かとなる所を、邊り一面に海水



(三巻本繪) 采女園界世千三

【参考】元祿歌舞伎作家上巻解説 高野聖之
三千世界色修業 (守田)
草子 五巻 (作者) 自伝的南無散人の異名がある。【刊行】安永二年【題名】徳川文藝類

部が武智光秀の一人左馬五郎光秋と名乗り、
時高と勘合の印を見せ、小女郎は時
高の首を討つて、自分こそ光秀時代の原大矢
作左衛門の娘と明かし、自ら竹槍を胸に立て
て光秀最期の様を見せ、久吉討伐の決意を馳
せました。所が、その六巻は、實は諸國に謀叛
人を探る久五郎であつた。然るに守袋から門

兵衛の金右衛門こそ其の光秋であると知り、
彼は奮へた財寶を以て、天下を奪はうと決心
した。(七巻) 闇中を金右衛門の跡を追
ふ。久五郎は磁石で金右衛門の跡を追
ふ。(八巻) 闇子の恋 采女之助・長門の道
行。久吉に滅された薩摩藩は、光秋の謀叛を
助けて術を授ける。まづ中科中將の行列を引
戻して見せると、光秋は早速中將を殺して代
つて乗物に入つて行く。(九巻) (島田御前) 久
次公が暗殺されたので、後室海町御前を慰
めようとして藤家は五箇句を一度の催し。上使北
條氏直が花山和尚と共に来て、藤家にその不
確信を語る。藤家は悪人と見せて氏直等に一
味すると、花山和尚はさばき愛となり、謀叛の
頭領光秋と名乗つた。と、今迄その一味と見
せた一同が、忽ち光秋を闇んだ。すべては藤
家が光秋を捕へんための謀であつた。(以下三
段返しを七度反復する) (御殿) 長門の死體か
ら三蔵子が産れる。(左馬五郎隠家) 梅町御
前と久五郎とが繪巻を探す。(捕物) 左馬五
郎は終に捕はれる。

【参考】元祿歌舞伎作家上巻解説 高野聖之
三千世界色修業 (守田)
草子 五巻 (作者) 自伝的南無散人の異名がある。【刊行】安永二年【題名】徳川文藝類

【参考】元祿歌舞伎作家上巻解説 高野聖之
三千世界色修業 (守田)
草子 五巻 (作者) 自伝的南無散人の異名がある。【刊行】安永二年【題名】徳川文藝類

【参考】元祿歌舞伎作家上巻解説 高野聖之
三千世界色修業 (守田)
草子 五巻 (作者) 自伝的南無散人の異名がある。【刊行】安永二年【題名】徳川文藝類

三人吉三郎初買... 本七幕 世話物 (作者) 二代河竹新七郎...

【題材】三人吉三郎は、同じ作者の「小猿七之助」の拾遺と註されてる作であるが、挿話であるところの「一重」文里の物語は、梅里里谷の酒蔵本「傾城買」(別題)から得たものである。

【評】「浮城」安藤の家は預つてみた庚申丸の短刀を盗まれて断絶となつたが、海老名軍はこれの短刀を道具屋の木屋から百兩で買取り、研師與九兵衛に預けたまゝ安藤の若衆の手にかゝつて死ぬ。木屋の手代十三郎は、愛取つた百兩を辻おとせの許で落す。...

は傳吉と分る。おとせと十三郎は双生兄弟なのであるが、さうと知らずに枕を交はす。傳吉は軍議に頼まれて安藤家から庚申丸を盗んだ折、赤み犬を斬つたその報いで、今生道を見ることが出来ぬ。...

【参考】河竹新七郎の「傾城買」の筋は、梅里里谷の酒蔵本「傾城買」(別題)から得たものである。...

た時、ふと少年時に及ばぬ懸の對象だつた人の末の妹で、翠の顔匠をしてゐるまで二十四の美しい處女お艶と逢ひ、お爲めごかしに東京へ連れ出して暴力で思ひを遂げて了ひ、間に餘之助といふ子さへ生む。...

三人長者

【題材】「三人長者」は、同じ作者の「小猿七之助」の拾遺と註されてる作であるが、挿話であるところの「一重」文里の物語は、梅里里谷の酒蔵本「傾城買」(別題)から得たものである。

軍の時、樽谷四郎左衛門とて近習に召された二條殿(御成り)の節、引出物を持つて出た尾上といふ女房の美しさに魅せられ、病となつて出仕も出来ずにあつた。...

【参考】河竹新七郎の「傾城買」の筋は、梅里里谷の酒蔵本「傾城買」(別題)から得たものである。...

【参考】河竹新七郎の「傾城買」の筋は、梅里里谷の酒蔵本「傾城買」(別題)から得たものである。...

を自國の語で歌ふについては、フランスは他國に先だつた。「ドイツ」ルーンが一度起つて、讚美歌は新教會の支柱となつた。その傑作は Ein fest Jung 「神は我が神である。リンカートの Am dunkel」を共に、一は國家の大興に用ひられる。ゲルハルトはルーン以後の第一人者といはれる。...

アンが新しい聖歌を入れた。英國聖歌のやゝ起らんとするや、ケンが現はれた。その「朝の歌」の歌は、共に美しい。ワッツは英語聖歌の第一人者といつてもよからう。日本の讚美歌にさへ二十五篇を存してをる。...

【日本】戰國の頃、わが國へ渡來した南歐の天主教徒は、幾多の文書を遺したけれど、歌は主として詩篇を唱へて來た。後の新教徒の間では、明治七年頃から讚美歌の集が数々あらはれた。...

三筆の三書「解説」平安朝の初期に於ける書道の三大家たる嵯峨天皇、空海、橘公兼の遺書を、或は嵯峨天皇と空海とを二筆ともいふ。嵯峨天皇は王羲之の書風を慕つてこれを学び給ひ、空海が支那より將來した法帖などを召されたこともある。...

王羲之に比せらるべき人である。山嵐「白雲閣別業」を見よ。杉風「姓名」杉山元憲。晩年一元と改めた。通稱「杉屋市兵衛」。...



庵の地主であつたからである。芭蕉は是非常に深い關係にあつた人で、芭蕉が寛文十二年江戸へ下つた際、先づ杉屋方へ落ち着いたといふ説もある程であるが、兎に角芭蕉用府の初めから弟子ともなり扶持者ともなつた人で、...

芭蕉の遺風を守つた。芭蕉没後支考と稱したといはれるが、「草履」(元禄十六年刊)に杉風から支考に送つた手紙があるので、これに就てその生前の思慕に感じ、深川の長慶寺に、「世にふるも更に宗祇のやどり哉」といふ芭蕉自筆の短冊を埋め、發句集を建ててこれを手引、月々の忌日に懷舊の句を像前に手向けるなど、追慕の情に餘念なく、何處までも芭蕉の遺風を守つた。...



【著者】常盤屋句合(其角の田舎句合の註釋)一冊、寛文八年刊。俳諧文庫・俳諧大系。○角田川紀行一冊(元禄二年、俳諧大系紀行篇)○冬かづら(芭蕉七回忌追善)一冊(元禄十四年刊、俳諧文庫門十哲集)○杉風句集一冊(平山梅人編、天明五年刊、俳諧大系元禄句集)○此外、「杉風句集」の末尾に、探茶庵所持として掲げてあるものがあるが、存否不明である。...

ども有ける事にこそ、なまじひに舊名の文章ならばこれほどの感情はすもめざらまし、およそやまの人ためはよきかなの文章ほど、その心をうごかすものなほとおぼえ侍り、と云ひ、又「三部抄のうち、経緯の意をやらはらげとかれたところ」みな漢文の師たるべし。殊に父子相迎のうち、鞍馬の傷を引ずり、譯せられたところなど、蓋より出でて蓋よりも青し」とも云つてゐる。佛敎文學の逸品である。

【参考】三部假名抄註 西澤 〇陽命本願抄要解 〇西要抄要解 〇三部假名抄言釋 〇陽命本願抄要解 〇陽命本願抄要解 〇陽命本願抄要解

三幅對紫會我

黄表紙三幅 十五丁十九國 (作者) 豊川春町 (兼工) 自筆 (名) 三幅對とは、重忠・祐成・祐親の三人を主要人物とし、紫會我とはそれ等を通人に見立てた江戸當世流行會我の義であらう。【刊行】安永七年、徳形屋版、再版寛政六年、萬屋版【講本】黄表紙百種 (繪巻國文學) 黄表紙集 (近代日本文學大系) に本文のみを載せてゐる。【題材】曾我我言を題材として當時後説に上つてゐる大名の家を背景としたものと云はれてゐる。

(三) 關三郎はしがむがたけ首右衛門と名乗り重忠に見えする。重忠は相撲好である。(四) 鬼王また關三郎を重本久善太夫に好むであつた。(五) 鬼王、又重忠を重忠の身で重忠に、宮本宗太夫と名乗つて重忠の酒宴に參會し、敵祐親を殺へと勧める。(六) 生樂屋に身を重忠してゐる祐成、大蔵の虎から重忠部大酒宴の折の衣裳を盗心される。(中册)(七) 祐成大蔵屋に衣裳を盗心される。(八) 大蔵屋、虎の部屋に衣裳を持込む。(九) 大蔵屋、衣裳代を祐成に催促して時あかず、地廻りに頼んで祐成を打擲する。虎、留めに入る。關三郎の浪人來かゝつて、衣裳代を返して縁を救ふ。(十) 重忠、大蔵の遊樂、虎を相方にして座敷のみで闘らうとする。虎、合點せず大悶着となる。關三郎の浪人、仲裁に入る。(十一) 祐親、一帯別當になり、重忠部に禮廻りにと念で。(十二) 祐親、重忠の挨拶。(下册)(十三) 山中、重忠、大酒宴に集つた諸大名を覺悟又は香袋に入れて何處へか早いで行かせる。(十四) 山中の夢驚き、大小僧と兩首が諸大名を接待する。曾我我言、祐親の酒宴の場であつた。(十五) 重忠部、豐後守の館、重忠、宗太夫の不夢を語る。鬼王の陣調、祐親の執成。(十六) 時、艾切の庵丁を研ぎ研ぎして寝る。夢に鬼王の禪院を見て目を覺す。(十七) 時、四手に乗つて重忠部(急ぐ)。(十八) 重忠部、斬り込まうとする時、祐成と關三郎の浪人が引かせる。「今祐親を打たせては兎十郎は誰を敵とするか。今祐親を打たせては兎十郎は誰を敵とするか。今祐親を打たせては兎十郎は誰を敵とするか。今祐親を打たせては兎十郎は誰を敵とするか。」

などといふ。時政承知する。(十九) しめ飾りの舞臺、關空を説いて作者が「紫會我」その他の黄表紙弘みの口上をいふ。(二十) 重忠部が赤澤山麓にあるので、鎌倉の人々が赤澤門の先生といつたとあるのは、その大名部が赤澤御門附近にあることを示し、曾我我言の味者が相撲取となり、宮本の太夫となつて入り込むとあるのは、その大名がそれ等を抽戻してゐることを示すのであらう。宮本久善太夫は曾我我言、似付太夫は曾我我言、宗太夫は曾我我言、しやがむがたけ首右衛門は、釋迦靈雲右衛門に擬してゐる。曾我我言の名の人であつた。「史的地位」曾我我言は江戸演劇の代表とも見られるほど、民衆の好向に投じてゐた事として、草紙に於ては、初期以來して「題材となつてゐる。多くは、初期以來して「題材となつてゐる。多くは、初期以來して「題材となつてゐる。多くは、初期以來して「題材となつてゐる。」

作者の出渡する趣向は、後年の黄表紙として最も多く見受けられるので、随分黄表紙の一特相とも考へられる。この作はその趣向の早いものとして注意されねばならない。所謂黄表紙名作二十三部の一である。(山口) 散文誌「文學の分類」を見よ。
朱藤 〇刊行 明治十四年十一月より大正二年六月まで、東雲堂刊「主君」北原白秋「解説」白秋の處女歌集「開の花」(引) 第三詩集「東京動物詩」の主要篇を成した時代の刊行で、執筆者には、上田敏・蒲原有明・水井荷風・内田魯庵・與野島子・外崎夢等、初め、パンの會の石井柏亭・高村光太郎・木下孝太郎・長田秀雄・吉井勇等があつた。白藤(引)の著野二十一、里見洋三、志直直哉、「アキラギ」(引)の著藤茂吉等を對社會的に誘引したのも、この「朱藤」であつた。なほ新説としての詩人室生犀星・萩原朔太郎等を紹介し、劇小説に於て、三上白雲(著)、國枝完二等を世に送つた。藝術の香氣と時代の清新相に満ち、雜誌「嵐上」(引)以後の異國情緒を承けた高敏の純藝術主義であつた。なほ第二期「アキラギ」は白秋、三期、その直系河野慎吾、村野大郎編輯の短歌雜誌で、大正七年一月より同年九月までつづいた。(北原)
三寶繪詞 〇佛敎説話集 三巻 (著者) 源盛彦 (名) 三寶は佛と法と僧とである。「成立」由来、總序の終りに永觀二年仲冬と明記してあるので、著者年代が知られる。本書の撰まれた因縁は、濁世を取つて成佛を希求する事を勧めるに在ることが總序に由つて知られる。「諸本」この書の現存する物は、東寺觀智院本であつて、その影寫が東京帝國大學史料編纂所に藏せられる。原本の

下巻にある識語は、「文永十年八月八日、御末別書寫了、戸部二石三義次に名し、字、花得がある」とある。三巻のうち、上一巻だけは殊に宣書書きの書式が詳かで、題の古色を帯びてゐるが、中と下との二巻は、小字を普通通の文のやうに書き交ぜたのが多く、一體に上巻よりは後の物のやうである。凡て片假名が用ひてあつて、その字體はキとかテとかマとか昔古體である。大體一面八行もしくは九行に書いてあつて、墨附は上四十七枚、中六十二枚、下七十五枚である。今日のところでは、他に善本の出ない限り、この鎌倉時代善寫の原本が貴重なものである。大日本佛敎全集の佛敎叢書に収めてあるものは、原本の片假名を總て平假名に書き直し、且つ誤讀に基づく誤寫が多い。文章は大體國文體であるが、所々に漢文の格を混じ(例)、「入、實山、空、手、を、二、三、が、如、し、行、文、は、形、式、美、を、備、へ、趣、致、に、富、ん、で、ゐ、る。」【内容】初めに總序があり、各巻にも小序がある。これは恰も「聖真記」(三巻)に似てゐる。また中・下巻の終りには、贊の詞が添へてある。佛敎・法寶・僧寶の三巻を以て組織したに就いては、總序に總て佛法僧を顯せば、初も善く、中も善く、後も善し、在としらむ所に、當に三寶伊坐して、可守給し」と言つてゐる。上巻は「昔の佛の行ひ給へる事」、即ち



本館藏 觀智院 本館藏 家戸

本生説話を擧げてゐる。(一) 檀波羅蜜を行った昔の戸部王は今の釋迦である。(出典) 六度集經 (釋迦王) (二) 持戒波羅蜜を行った昔の須陀摩王は今の釋迦である。(出典) 阿毘達磨 (須陀摩王) (三) 忍辱波羅蜜を行った昔の忍辱仙人は今の釋迦である。(出典) 大論 (四) 持戒波羅蜜を行った昔の如來太子は今の釋迦である。(出典) 六度集經 (如來太子) (五) 持戒波羅蜜を行った昔の正閼梨仙人は今の釋迦である。(出典) 阿毘達磨 (正閼梨仙人) (六) 持戒波羅蜜を行った昔の拘翼大臣は今の釋迦である。(出典) 大論 (七) 持戒波羅蜜を行った昔の六波羅蜜六度集經のことであるが、なほ

次の如きものがある。(七) 昔の流水は今の釋迦である。(出典) 法華經 (八) 昔の國王は今の釋迦である。(出典) 阿毘達磨 (九) 昔の鹿王は今の釋迦である。(出典) 阿毘達磨 (一〇) 昔の雪山童子は今の釋迦である。(出典) 阿毘達磨 (一一) 昔の須陀摩太子は今の釋迦である。(出典) 阿毘達磨 (一二) 昔の如來太子は今の釋迦である。(出典) 阿毘達磨 (一三) 昔の施無は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (一四) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (一五) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (一六) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (一七) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (一八) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (一九) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (二〇) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (二一) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (二二) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (二三) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (二四) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (二五) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (二六) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (二七) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (二八) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (二九) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (三〇) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (三一) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (三二) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (三三) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (三四) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (三五) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (三六) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (三七) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (三八) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (三九) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (四〇) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (四一) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (四二) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (四三) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (四四) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (四五) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (四六) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (四七) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (四八) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (四九) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (五〇) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (五一) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (五二) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (五三) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (五四) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (五五) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (五六) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (五七) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (五八) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (五九) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (六〇) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (六一) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (六二) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (六三) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (六四) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (六五) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (六六) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (六七) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (六八) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (六九) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (七〇) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (七一) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (七二) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (七三) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (七四) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (七五) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (七六) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (七七) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (七八) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (七九) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (八〇) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (八一) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (八二) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (八三) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (八四) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (八五) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (八六) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (八七) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (八八) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (八九) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (九〇) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (九一) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (九二) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (九三) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (九四) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (九五) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (九六) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (九七) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (九八) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (九九) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨 (一〇〇) 昔の如來太子は今の佛である。(出典) 阿毘達磨

これ等の中には、勿論幾多の佛敎説話を包含してゐる。善師寺高僧會の條に、貧女の一體の説話があり、八幡放生會の條に、放生してやつた龜が、報恩として洪水を豫言した説話があるといふ次第である。
【史的地位】本書はこれを佛敎説話集として見る時、上巻異記を承け、下(今昔物語)の如きを起した中間の物として、尙に意義が深いのである。特に「今昔物語」の研究上、その説話の源泉を探るためには、これを逸してはならない。【價值】三寶傳依の信念に基づいて書かれたこの繪詞は、佛敎が漸く國民上下の思想を支配し、且つ種々な法會が、公然各所に營まれるに至つた平安時代の反映として出来たと見てよい。故に平安朝の世態人情を察する上には、好箇の資料とせられるばかりでなく、文詞が文學的價値を有し、實質は説話集としても目せられる。
散木并歌集 〇歌集 (作者) 源俊賴 (名) 略して散木集ともいひ、并は兼又は奇に作る。散木は無用の材の意で俊賴が木工頭であつたので謙遜しての命名であらう。并歌も謙遜であらうから奇に作るの

である。【成立】未詳【傳本】(イ)群書類本(二五四所載本。(ロ)圖書寮所蔵本(十巻)...

り、巻に拘らず興味のあるものは生活境遇を...

な」などの歌があり、かはりいなごころ、...

つて、河東瑠璃(別題)を主とするもので...

いて意見を異にし、風俗を以てその信ずる...

實情外、奴半道・奴半道・チャリ奴等の語が...

五年四月九日、養家が破産したので宿老を...

る。この方面の著書では「風俗」(八巻)天保七...



風俗 (Fūzoku) calligraphy

さんざん さんざん

三五〇

此科大炊の所置は太師の榮經卿、重盛久吉(尾上朝五郎)...

この返しが南禅寺山門である。潤漫たる櫻花金翠爛爛たる...

此科大炊の所置は太師の榮經卿、重盛久吉(尾上朝五郎)...

覺英、體操美が精皮に洗練されて来てゐる。...

【三遊亭】五右衛門の部下が世帯中納言を勤めて...

【三遊亭】五右衛門の部下が世帯中納言を勤めて...

母に縛り合せて行はれる。例へば、嘉永四年正月...

【三遊亭】五右衛門の部下が世帯中納言を勤めて...

【三遊亭】五右衛門の部下が世帯中納言を勤めて...

いだ。明治年間における落語界の名人の一人であつた。

【三遊亭】五右衛門の部下が世帯中納言を勤めて...

【三遊亭】五右衛門の部下が世帯中納言を勤めて...

年江戸下谷觀音寺町に生れ、明治三十七年二月二十七日...

葛西屋(奉公)に出たり、玄治店の一勇舎國芳の門に入つて...



殺したり、一冊に纏めて刊行したりした。それは世間から...

【人物】佐野栄山(山々)の「神樂奇人傳」に、「此人うきたる...

現在は専ら著述に従つてゐる。佛歴としては大...

【著者】淺井兼成(註) 隨筆 八巻 寫...

【慈園】 歌信(註) 藤原(初名) 遺快...

を知る上に同様な暗示を寓し得るであらう。...

通は濃厚文雅の點に於て代表的人物で、詩文...

【著者】淺井兼成(註) 隨筆 八巻 寫...

【慈園】 歌信(註) 藤原(初名) 遺快...

生の頃の一首は、特にひろく世間に喧傳...

とした。當時兼成に相對し、通觀の勢力が他...

【著者】淺井兼成(註) 隨筆 八巻 寫...

【慈園】 歌信(註) 藤原(初名) 遺快...

なりな女(新刊) 山嵐に知りし娘や愛れぬむねをたんとに思は...



(草歌四巻) 藤原 兼成

三十歳時代からであるが、驚くべき多作者で、...

【著者】淺井兼成(註) 隨筆 八巻 寫...

【著者】淺井兼成(註) 隨筆 八巻 寫...

【著者】淺井兼成(註) 隨筆 八巻 寫...

【著者】淺井兼成(註) 隨筆 八巻 寫...

二十九年、東京帝國大學卒業、地方中學校より日本女子大卒、奈良女子高等師範學校等に在任した。...

【著作】明治二十七年刊「花紅」...

【参考】明治文學史 岩谷孝太郎「明治大正詩史」...

【参考】「松風」見よ。

つたもので、比較的佳本であるから、さし當り底本としてよいであらう。この解題も同本に據つて置く。...

【参考】「松風」見よ。...

【参考】「松風」見よ。...

【参考】「松風」見よ。...

行つたとき、實父角右衛門の家の玄関に立つたが角右衛門は遠はなかつた。實父にすると實父に對する義理があつた。...

【参考】「松風」見よ。...

【参考】「松風」見よ。...

【参考】「松風」見よ。...

少し違つた点がある(其、欺・基を傳譯ではアと讀むが、字書にはキとあるなど)。これは佛經の方が由来が古いのであらう。(漢書)平安朝に正音ともいつたもので、支那と國交が開けてから、隋唐時代の正しい發音として傳へたもの、支那北方音に基づく標準的發音であつたらしく、隋以來の支那の韻書に一致する。後世までも漢文を讀む時の正しい音として用ひられた。(唐書)宋以後、時々傳はつたもので、古くは宋書といつたが、室町・江戸時代に明清の音を傳へてからは唐音といふ事になつた。概して支那南方音を傳へたものである。今日では、譯宗で或る經文を讀む時に用ひる外は、特殊の漢語の讀み方として用ひるに過ぎない。(その他の字書)推古時代の萬葉假名として用ひられた漢字の音や、天台・眞言で讀誦する或る種の經文等の音などは、今日の吳音・漢音、何れにも一致しないものがある。又、日本で作つた漢字を字音で讀む事があるが(「讀」をドウ、「讀」をクワンなど)、音即ち支那語の音ではない。

Table with columns for phonetic symbols (p, b, m, n, etc.) and their corresponding historical or regional pronunciations (e.g., 漢音, 吳音, 唐音).

Table with columns for characters (魚, 機, 齊, etc.) and their corresponding historical or regional pronunciations (e.g., 漢音, 吳音, 唐音).

【四】四聲。漢音は韻書の四聲と一致するが、吳音は多くは一致しない。吳音の平聲は漢音の上聲去聲に當り、吳音の上は漢音の平聲に當る事が多い。但し入聲は相違がない。【日本漢字音の傳來及び沿革】(最古の字書)我が國に漢文が傳はつたのは應神天皇の時、「論語」と「千字文」とを百濟から奉つたのが歴史に見え最初である。その時百濟の阿直岐や王仁がこれを讀む事を教へたのであり、その後我が國で文筆の事を司つたのは、阿直岐や王仁の子孫なる文氏であつた。それ故最も古く傳へた漢字の讀み方即ち字音は、主として百濟に行はれたものであつたらうと考へられるが、百濟は支那の南朝と交通し、その文化を傳へた故、その發音は主として支那の南方音に基づくものと思はれる。この音は、今日の吳音の系統に屬するものである事は、推古時代の人名・地名を寫すに用ひた萬葉假名や、「古事記」などの萬葉假名で、大體吳音に一致し、又はこれに近いのによつて知られる。但し推古時代の假名に、奇をカ、居をケ、已を

ヨ、止をトなどに用ひて、後の漢音にも吳音にも一致せぬものがあるのは、永く用ひられてゐる間に、新古を混じり、又多少他の系統のものをも交へたからであらうし、又今の吳音は、多少やゝ後になつて定まつたもので、太古のものとは多少の相違を生じたものであらう。その發音は百濟に入つても多少變じ、更に日本に入り多くの年月を経てたので、一層變化したであらう。(漢音の傳來)推古天皇の時、支那との國交が始まり、以後、假意支那の文物を輸入するにいたつて、古來の字音とは系統を異にする。支那北方音に基づく隋唐時代の標準的發音が輸入せられ、朝廷で音博士を置いて正しい發音を教授させた。これが即ち漢音であつたが、しかし、因襲久しき古來の吳音系統の音は容易に改まらなかつたと見えて、平安朝の初めには、屢々令を出して明確の學徒や僧侶に正音即ち漢音を學ばしめられた。かくて、漢文の正式の讀み方として漢音を用ひること定まつたのであるが、その漢音も、後漢文が漸く衰へ、支那との交通が絶えるに従つて、次第に日本化したものと考へられる。(一種の漢音の傳來)平安朝の初、支那から傳はつた天台宗及び眞言宗に於ては、現代までも、日常讀誦する法文や經典に一種の漢音を用ひてゐるが、これは、當時支那に於て讀誦してゐたのをそのまま習ひ覺えて傳へたものと覺しく、その發音に於て、普通の漢音よりも、支那語に近いものがある。それ故、これこそ眞の漢音であると唱へるものもあるけれども、當時は唐の末期であつて、支那語の音が漸く變化した時代であるから、眞の漢音とは違つた點があるやうである(脚・乘・稱・昇をシ、偉・應をイクと讀むな

ど)。(吳音の勢力)漢音が用ひられた後にも吳音はなほ勢力を失はず、和音と稱して普通に行はれ、殊に佛經は古くから吳音を用ひて讀誦し讀誦したため、これを改めることは不可能であつて、ために今日に至るまで吳音を用ひる事となつたであらう。これ等の漢音と吳音とは、平安朝末期までも諸尾のmnriを區別し、タキ・ケの音を存し、四聲を區別するなど、なほ原音に近い點を存してゐた。(宋音の傳來)平安朝初期支那との國交は絶えたと、その後も日本の僧侶や宋の商人の來往絶えず、ために宋以後の新しい音を學ぶ機會は多くあつた。殊に鎌倉時代に於ては禪宗が盛んであつて、日本僧が支那に渡つて禪宗生活をして歸るものも多く、支那僧の日本に來るものもあつて、宋の支那音が傳はつた。當時これを宋音といつた。(唐音の復興)室町時代には、幕府と支那との交が回復し、幕府の使節として、或は求法のために譯僧の渡明するものあり、江戸時代の初めには、明が亡びて僧侶傳者などが日本に歸化して、當時の音を傳へた。これを唐音といつた。當時の譯學者は唐音に注意し、漢吳音との比較を試み、その間に音變換の規則を作つたりしたが、その規則によつて實際に無い唐音を作るものさへあつた。江戸時代の半以後、漸く唐音を學ぶものも多く、殊に江戸では養生館などの提唱によつて世に流行し、種々の支那語學書も出て一時甚だ盛んであつた。宋元以來日本人の往來したのは揚子江下流地方であり、江戸時代に於ても南京官話、杭州・福州・漳州等の音を傳へたのであるから、宋音・唐音は主として南方音である。(字音傳來後の音變化)日

本の漢字音は勿論多少日本化したものであるが、一旦日本化したものが、後に更に變化したのものもある。遅くも平安朝末期にはあつた密雲を「ミツツ」、觀音を「クワン」といふ如き所謂漢音の現象は、果してこの中に入れてよいか不明であるが、「心」シムとシソとなつて「シ」キとなり、「孝」カウと「功」コウとが同音となり、「京」キヤウと「共」キョウと「飲」ケウとが同音となつた如きは、明かに後世の變化である。(備考)吳音を對馬音といふのは、金鐘信といふ人が對馬に來て初めて吳音を傳へたといふ説から出たのであらう。これに對して表信公といふものが筑紫に來て漢音を傳へたといふ説がある(共に安樂の「悉曇經」に見えてゐる)。表信公は奈良朝の音博士、唐人宮音師の誤かといふ。(註・韻學・四聲・韻部等)

【備考】漢字三音考本野山○漢音正辨書○三音正辨書○字音新野山○國文書局所收○字音假字用格本野山○漢字の形音義圖○非韻書○漢字音韻圖要略○假名源流考○國語調査委員○文藝叢書編輯委員○古事類聚○漢西に於ける支那語學研究○武蔵長平(同上)○唐音考中村久四郎(學藝叢書)○唐音考(同上)○漢音考(同上)○韻部考(同上)○支那音韻圖(同上)○中國聲韻學概論(同上)○日漢大辭典(同上) Z. Volpelt, Chinese Phonology, Shang-hai 1896. S. H. Schwartz, Ancient Chinese Phonetics, (T'oung Pao VIII, IX) - H. Maspero, Le dialecte de T'chang-ngan sous les Tang, Bulletin de l'Ecole française d'Extreme-Orient.

等も研究してゐるが、専ら宇音假名遣について研究したのは、本書が初めてである。その意味に於て假名遣研究史上に一時期を劃するものと云ふ事が出来る。而して本書が學界に貢獻した最も大なるものは、おのの所屬を改めた點である。尤もその證明にはなほ不備な點も少くなかつたので、後に瀧門は「於手輕重義」を著してその不備を補つた。なほおのの所屬を著してその不備を補つた。なほおのの所屬を著してその不備を補つた。なほおのの所屬を著してその不備を補つた。

に據らず、去つて彦根の正法寺に赴き、桃谷に師事して悟道を得んことを努めた。なほ石山寺に師事して參籠したり、茶を斷つたり、三千佛を三日三夜に拜して刻苦したりしたが、得るところなく、最後に石田梅巖に就いて頓悟した。安政の初年、江戸に下つて心學の普及に従ひ、世人の誘誘誤解を受くるも意とせず、婦人の身を以て道のために盡し、同三年「道徳問答」三巻を著した。尼は江戸で心學を説いた最初の人である。

京經濟雜誌で、それに續く「源朝を論ず」(北條政子)「承久以後の變遷時代」その他の史論を發表した。「史海」には瀧門の外に久米邦武博士の史論が載つたが、その他考證及び批評の欄があつて、前者は主として久米博士のそれを収めた。寄書家としては、吉田東伍、淡邊修一郎、藤田鳴鶴、田岡嶺雲、川上廣樹、西村俊文、森三溪、原田一庵その他があつた。

紙園南海「刊行」寶曆十三年「諸本」日本文庫第五編所載「解説」漢詩について論じたものである。詩論、常語取義、詩有、地題、雅折、詩有、輕重清濁大小體、字韻、詩有、強弱等の目につき、假名交り文で書いてある。

傳三と云ふ假名遣がある。判人長谷六來り、奉公人の周旋を相談する。終つて傳三は、遊女お龍を小庭に招き、五郎時宗との仲に就いて誠める。朝比奈・十郎・三郎は歸る。八幡の入相の鐘が鳴つて夜となる。五郎時宗、この家にあがる。彼の馴染お龍は、既に客現原源太に出でゐるが、時宗の來てゐるのを知つて會ひにゆく。源太、時宗を立て太平樂をならべる。段々聲が大きくなるのを、皆々出てなだめ歸す。あとにお龍と五郎は、互の語り果てた身の上を、お龍は、結局逃げようかと相談が懸る。

【批評】追加に作者が言へる如く、深川を題材とした洒落本は多いが十年の星霜がたち、風俗が變遷し流行が推移してゐるので、これを新たに描寫したのである。そこに作者の目的があらわにだけ、深川の描寫は、特に精緻を極めてゐる。殊に前半がこの意味で勝れてゐる。筋は平凡で、洒落本の類型以上のものではない。堀原源太の如きは、後世の落語五人廻し「三枚起調」の中に現はる、半可通そつくりで、これには既に、「荒地の編段」(別項)中の翠孝の如き類型的人物がある。巻末の五郎・お龍の情話は、彼の前作「志願川夜船」(別項)中の梅川忠兵衛の情話と些の相違が見出せない。本書は「娼妓物語」(編の裏)「源太」と共に、京風最後の洒落本となつたものである。(山崎)



(文庫) 娼妓物語

安藤爲章(名譽)「娼女七論」とも、「源氏物語七論」とも。娼女部に關する七箇の論說の意。「成立」巻末の跋によれば、爲章が伏見宮(貞親親王)に仕へた時、中院通村の門人各仲朝臣の源氏講義を聴き、その先考爲朝臣の講義を申請し、烏丸資慶の門人兼風法橋の談書をつたへ、中院通茂の説を承り、「水原」河海「花鳥」紙江等の諸抄に心を盡したが、後、東

契沖に會ひ、「萬葉集の不容傳授されたついでに、この物語の談に及んで、彼の私案と符合する事多く、遂に江戸小石川で清書を終つた。時に元禄十六年重陽の日であつた。この本を整理元禄五年五月、伴安貞が清書して世に傳へた。「源太」本書は、爲章の自跋、伴安貞・藤原治之向友軒收月等の跋を添へて刊行された。國文註釋全集第三卷、日本文學文庫(富山)所載。なほ彰考館所蔵の本は最も注意すべき本である。「内容」本書は、巻頭に娼女の家系を示し、七論にはその一、才徳兼備の條に、娼女は單に才女たるに止まらず、有徳の賢婦なる由を物語中の女性の性格、女性觀(娼女部日記等)によりて論證し、その二、七事具の條に、式部が學問の家に生れたること、天才なりしこと、學藝について教養ありしこと、有職故實に通じたること、文物大に興れる太平の世に生れたること、地理に明るかりしこと、中流の婦人たること、作者としてふしきこと等の七得を兼備せる由を論じ、その三、修撰年序の條に、「娼女部日記」及び「娼女物語」等を引證して、式部三才徳、寛政時代の作なるべしと論じ、その四、文章無雙の條に、「源氏」は品位高き名文なりとし、清少納言の「草子」に優るものとし、その五、作者本意の條に、式部は諷諷の目的を以て物語を作れりとし、その六、一部大事の條に、冷泉院の事、源の事に對して辯明し、その七、正傳説誤の條に、「源氏」の作者のこと、その著作動機のこと、由來のこと等に關して、古來の説の誤りを指摘してゐる。「價値」本書は、舊き中院家の學統と、新しき契沖の學風の感化を受け、新舊學風の過渡期に立てる著者が、水府の蔵書を涉獵して「源氏物

紫家七論

【著者】